

一般国道18号改築工事関係発掘調査報告書

小 重 遺 跡

2002

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道18号改築工事関係発掘調査報告書

小 重 遺 跡

2002

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は国道18号改築工事にともなって実施した、中頸城郡中郷村小重遺跡の発掘調査報告書です。新潟県教育委員会は、高速道路や国道バイパス建設などにともなう発掘調査をおこなっており、その成果をこのような形で数多く公表してまいりました。

中郷村内では、昭和60年代から国道18号バイパスと上信越自動車道という、大動脈の道路建設がなされ、周辺の景観や交通の事情は一変した感があります。小重遺跡の発掘もこれら施策に関係した国道改築工事によってなされたものであり、跡地は現在、道路ステーションとして信越を行き交う利用者にチーン着脱などの利便を供しております。

小重遺跡の出土品で特に注目されるのは3万枚弱の古銭ですが、このような、いわゆる埋納銭遺構は不時発見されることが多く、緻密な発掘調査がなされることは稀であります。

今回の調査成果が埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待いたします。

最後に、この調査に関して多大なご協力と援助を賜った中郷村教育委員会、ならびに地元の方々をはじめ、建設省北陸地方建設局（現、国土交通省北陸地方整備局）・同高田工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成14年1月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 薫一

例　　言

- 1 本書は新潟県中頸城郡中郷村大字市屋字小重・字横引に所在する小重遺跡の発掘調査記録である。
 - 2 発掘調査は、一般国道18号改築工事に伴い、新潟県が建設省から受託して実施したものである。
 - 3 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が主体となり、平成元年度・2年度に実施した。
 - 4 整理および報告にかかる作業は、新潟県が国土交通省から受託して平成13年度に実施したもので、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）職員がこれにあたった。
 - 5 出土遺物と整理にかかる資料は、すべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は「小」とし、出土地点・層位などを併記した。
 - 6 本書で示す方位は日本平面国家座標第VII系のX軸方向を指しており、真北から約0度9分57秒西偏している。
 - 7 作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれの出典を記した。
 - 8 掲載した遺物の番号は一連の通し番号であり、図面図版と写真図版の番号は一致している。
 - 9 引用・参考文献は、著者および発行年を〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
 - 10 土層および土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖』の表記に従っている。
 - 11 本書の記述と編集は小池義人（埋文事業団主任調査員）が担当した。ただし、第Ⅱ章は過去の新潟県埋蔵文化財調査報告書をもとに加筆編集したものである。
 - 12 本遺跡については、既にいくつかの概要報告がなされているが、本書の記述をもって最終的な報告とする。
 - 13 本書作成作業の一部は株式会社セピアスに委託した。詳細は第Ⅰ章に記述している。
 - 14 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大なご教示と協力を賜った。厚く御礼申し上げる。（五十音順　敬称略）
- 親跡　商・戸根与八郎・永井久美男・永嶋正春・野村忠司・早津賢二・博田　純

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	1
A 一次調査	1
B 二次調査	1
3 調査体制	5
4 整理作業	5
第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境	7
1 地理歴史的環境	7
2 妙高火山群由来の堆積物と遺跡の年代	7
3 縄文時代の遺跡	11
第Ⅲ章 調査の概要	13
1隣接する横引遺跡の調査	13
2 グリッドの設定	15
3 基本層序	16
4 遺構の層位と時期	16
A III層上面の遺構	16
B VI層・VII層上面の遺構	18
第Ⅳ章 遺構	19
1 概要	19
2 竪穴住居	19
3 挖立柱建物	21
4 陷し穴土坑	21
5 土坑	23
6 集石土坑	23
7 埋納錢遺構	24
第Ⅴ章 遺物	25
1 概況	25
2 縄文土器	25

A 早 期 中 葉	25
B 早 期 後 葉	25
C 前 期 中 葉	26
D 前 期 後 葉	26
E 中 期 ・ 後 期	27
F 純文土器以外の土器・陶磁器	27
 3 石器・土製品	28
 4 銭 貨	29
A 既出報告の整理	29
B 銭名別の数量	33
C 銭貨各説	34
 5 草・木 製 品	35
 第VI章 ま と め	37
1 妙高山麓の陥し穴土坑について	37
2 繩文時代前期の集落と土器について	39
3 15号土坑の埋納銭について	40
《要 約》	41
《引用・参考文献》	42

挿図目次

第 1 図 小重遺跡の位置	2
第 2 図 上信越自動車道・国道18号に関わる小重遺跡周辺の遺跡	3
第 3 図 一次調査の試掘坑設定位置	4
第 4 図 妙高山麓における火山性堆積物と遺物の層位関係	8
第 5 図 関川水系の河川と妙高山麓の遺跡	10
第 6 図 小重遺跡・横引遺跡の位置関係	13
第 7 図 横引遺跡の出土遺物	14
第 8 図 小グリッドの呼称	15
第 9 図 大グリッド設定図	15
第 10 図 土解柱状図	17
第 11 図 陥し穴土坑の計測法	21
第 12 図 陥し穴土坑の配置	22
第 13 図 土器20の文様概念図	26
第 14 図 土器49の文様メモ	26
第 15 図 前期後業土器のグリッド別重量分布	27
第 16 図 野林遺跡・郷清水遺跡・西福田新田遺跡の陥し穴土坑配置	37
第 17 図 中ノ沢遺跡の陥し穴土坑	39

表 目 次

第 1 表 陥し穴土坑一覧	23
第 2 表 15号土坑出土銭貨 銭名別点数	36
第 3 表 15号土坑出土銭貨 サシ・バラ別の完形銭点数	36
第 4 表 15号土坑出土銭貨の既出資料	36
第 5 表 15号土坑出土銭貨 各サンの銭名別点数	36
別表 1 土器観察表	45
別表 2 石器・土製品観察表	48
別表 3 銭貨観察表	50

図版目次

【図面】	
図版 1 小重遺跡全測図 1 繩文時代～中世	図版 12 造構築別図 5 壇穴住居（5）・掘立柱建物
図版 2 小重遺跡全測図 2 近世以降	図版 13 造構築別図 6 陥し穴土坑（1）
図版 3 主要部平面図 1	図版 14 造構築別図 7 陥し穴土坑（2）
図版 4 主要部平面図 2	図版 15 造構築別図 8 陥し穴土坑（3）・銭貨埋納土坑
図版 5 主要部平面図 3	図版 16 造構築別図 9 土坑・集石
図版 6 主要部平面図 4	図版 17 造構築別図 10 集石土坑
図版 7 主要部平面図 5	図版 18 土器実測図（1）
図版 8 造構築別図 1 壇穴住居（1）	図版 19 土器実測図（2）
図版 9 造構築別図 2 壇穴住居（2）	図版 20 土器実測図（3）
図版 10 造構築別図 3 壇穴住居（3）	図版 21 土器実測図（4）
図版 11 造構築別図 4 壇穴住居（4）	図版 22 土器実測図（5）
	図版 23 土器実測図（6）

図版 24 石器実測図 (1)	図版 33 銭貨拓影図 (5)
図版 25 石器実測図 (2)	図版 34 銭貨拓影図 (6)
図版 26 石器実測図 (3)	図版 35 銭貨拓影図 (7)
図版 27 石器実測図 (4)	図版 36 銭貨拓影図 (8)
図版 28 石器実測図 (5)・土製品実測図	図版 37 銭貨拓影図 (9)
図版 29 銭貨拓影図 (1)	図版 38 銭貨拓影図 (10)
図版 30 銭貨拓影図 (2)	図版 39 銭貨拓影図 (11)
図版 31 銭貨拓影図 (3)	図版 40 銭貨拓影図 (12)・木製品実測図
図版 32 銭貨拓影図 (4)	

【写 真】

図版 41 小重遺跡全景1・小重遺跡周辺の景観	
図版 42 15号土坑銭貨埋納状況2・15号土坑銭貨埋納状況1・15号土坑銭貨埋納状況3 15号土坑銭貨埋納状況4・15号土坑曲物設置状況	
図版 43 1号竪穴・2号竪穴	
図版 44 3号竪穴・4号竪穴	
図版 45 5号竪穴・6号竪穴	
図版 46 7号竪穴・8号竪穴	
図版 47 土層堆積状況1・土層堆積状況2・土層堆積状況3・土層堆積状況4・土層堆積状況5	
図版 48 7号土坑・14号土坑・14号土坑断面・16号土坑・16号土坑断面・17号土坑・17号土坑断面	
図版 49 18号土坑・22号土坑・23号土坑・23号土坑断面・24号土坑・24号土坑断面・25号土坑・25号土坑断面	
図版 50 27号土坑・27号土坑断面・37号土坑・37号土坑断面・43号土坑断面・132号土坑・135号土坑	
図版 51 162号土坑・162号土坑断面・163号土坑・163号土坑断面・175号土坑・175号土坑断面・203号土坑 203号土坑断面	
図版 52 213号土坑・213号土坑断面・221号土坑・228号土坑・268号土坑・269号土坑・426号土坑	
図版 53 34号土坑・36号土坑・99号土坑・197号土坑(4号竪穴)断面・216号土坑・216号土坑断面・217号土坑 坑・66号土坑	
図版 54 集石土坑列北側部分・集石土坑列中央部分・集石土坑列南側部分・集石土坑列441号～443号土坑・60号土坑・106号土坑・1号集石・溝跡	
図版 55 小重遺跡全景2・調査風景・田畠上面の櫻産出状況・国道18号際の調査経過	
図版 56 土器(1)	
図版 57 土器(2)	
図版 58 土器(3)	
図版 59 土器(4)・石器(1)	
図版 60 石器(2)	
図版 61 石器(3)・土製品・サシ状態の銭貨	
図版 62 銭貨(1)	
図版 63 銭貨(2)	
図版 64 銭貨(3)	
図版 65 銭貨(4)・木製品	

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

小重遺跡は、国道18号と県道新井・中郷線（旧国道18号）が合流する市屋LC.から南方約1.1kmの位置にあり、現在は建設省江口道路ステーションとなっている（第1図）。昭和61年、建設者が第九次道路整備5ヶ年計画に基づく一般国道18号改築に伴い、中郷地区除雪払幅計画を決定したことから、小重遺跡に関わる協議が始まった。建設省北陸地方建設局高田工事事務所（以下、高田工事）は、同年9月に埋蔵文化財の有無及び発掘・保存等について新潟県教育委員会（以下、県教委）に照会しており、この時点で小重遺跡は昭和51年に県教委が行った中郷村内の分布調査によって既に周知されていたが、県教委は改めて分布調査を行い、縄文時代の遺跡が確認されたことを回答している（昭和61年10月21日付け、教文第548号）。

一方、国道18号上新バイパス用地内の埋蔵文化財に関わる協議は昭和51年に始まつたものであるが、昭和59年には中郷村内の遺跡発掘に関する協議が本格化し、同じく建設省高田工事が所管する国道18号江口道路ステーションの用地内に所在する小重遺跡も、上新バイパスの埋蔵文化財調査と関係して調整されることとなった。なお、中郷村内では上新バイパスに関係して、昭和62年に西福田新田遺跡・上滝ノ沢遺跡、63年に中ノ原D遺跡・窪畑A遺跡・窪畑B遺跡、平成元年に上中島遺跡、昭和62・63・平成2・3年に郷清水遺跡がそれぞれ調査され（第2図）、『国道18号上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書IV』としてその成果が報告されている〔立木ほか1999〕。

国道18号を挟んだ小重遺跡の西方では平成2年の調査期間中に地権者による土取りが進行し、遺物の散布を確認していた県教委職員は中郷村教委と協議して工事に立ち会い、約200m²の範囲で縄文土器（主に前期後葉）・石器等1箱を採集している。当時の記録ではこの範囲を「小重II遺跡」としているが、新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードには登録されておらず、また、上信越自動車道に関係して発掘調査された横引遺跡〔立木1996〕南端に接しているので、名称は横引遺跡とすべきであろう。採集遺物は中郷村教育委員会が保管しており、建設省の事業とも無関係であるため本書では報告しない。

2 調査経過

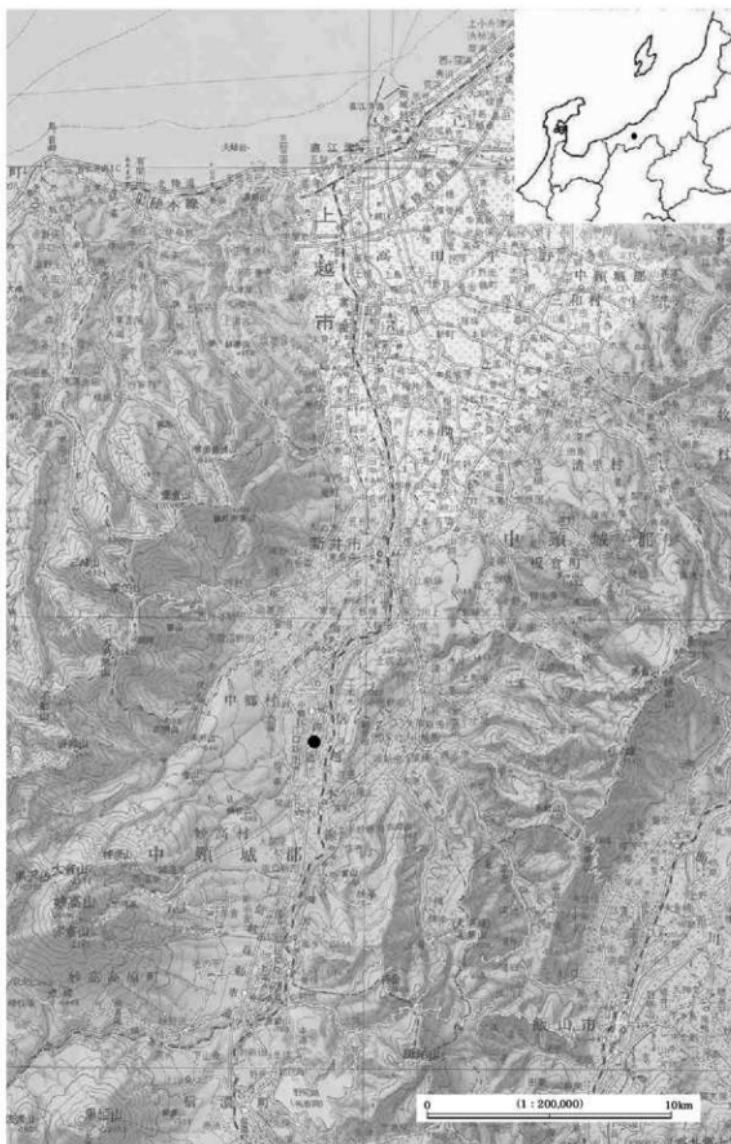
A 一 次 調 査

平成元年9月4日から同月13日の間、22,850m²を対象に確認調査を実施した。31基のトレーナ（第3図）を調査した結果、陥れ穴土坑2基、早期中葉・前期後葉を中心とする縄文土器、石器・陶磁器など2箱を発見し、約11,200m²の範囲について発掘調査が必要である旨回答している。

B 二 次 調 査

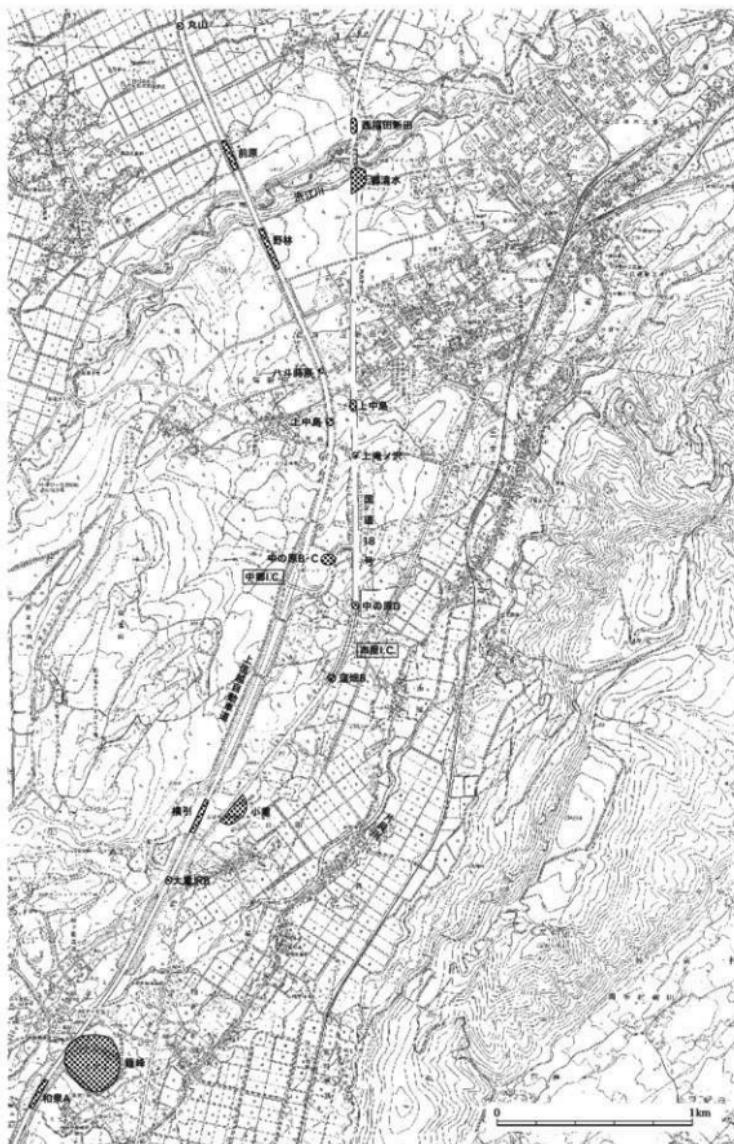
平成2年5月8日から同年11月16日の間に発掘調査を実施した。5月14日から31日、確認調査で遺物の出土がなかった調査区域の南端部と国道18号に沿う幅約20mの範囲で、2.5×10mのトレーナ67基を

2 調査経過



第1図 小重遺跡の位置

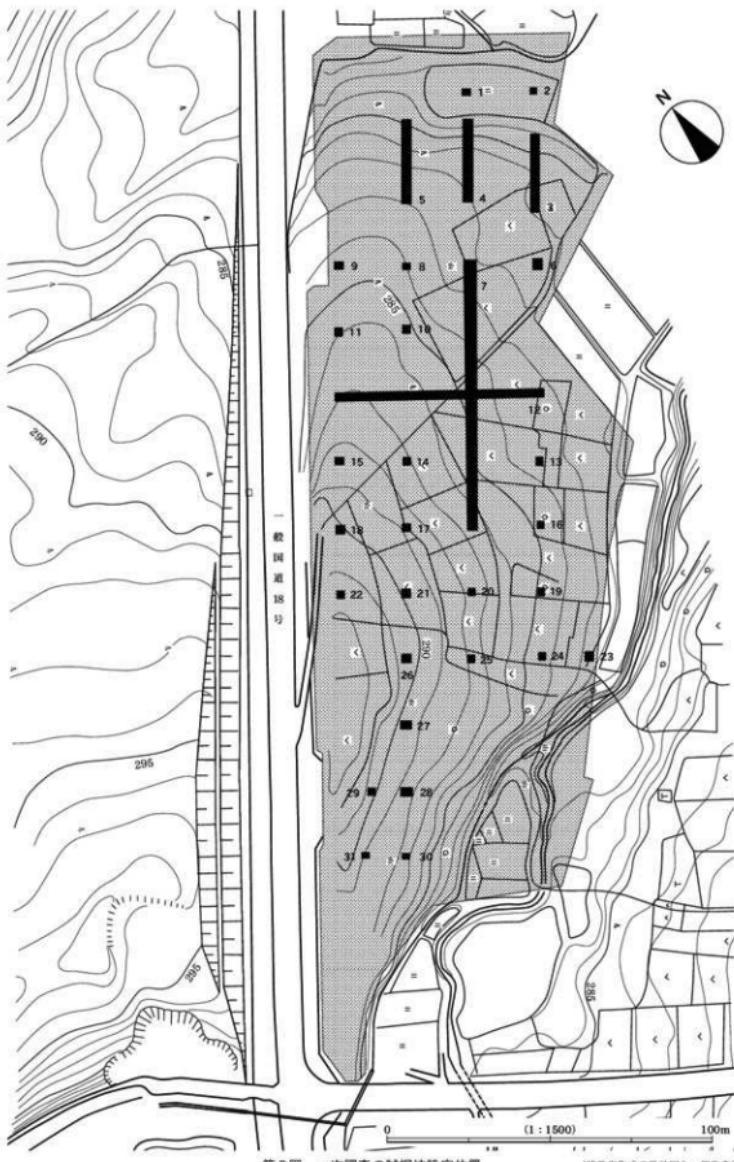
国土地理院 平成10年発行 1:200,000基盤図



第2図 上信越自動車道・国道18号に関する小重遺跡周辺の遺跡

(中郷村役場作成「中郷村全国2」 平成5年修正 1:10,000原図)

2 調査経過



調査し（図版55）、その結果を基に調査予定範囲の北西隅と南東隅を調査範囲から除外した。最終的な調査面積は8,800 m²である。

6月14日、重機で10 Gグリッドを表土除去していた折、埋納銭造構（15号土坑）を発見し、確認調査では予想しなかった中世遺構にも注意させられることになった。したがって土層が明瞭に区分できる区域では、縄文時代中期後半以降の層、主に前期後葉の層、早期中葉から前期中葉の層の計3枚の土層を調査することになった。しかし、中世と断定できる遺構は15号土坑のほかには見出せなかった。

3 調 査 体 制

平成元（'89）年度【一次調査】

主 体	新潟県教育委員会（教育長 田中邦正）	
総 括	大鷗 圭己（新潟県教育庁文化行政課長）	
管 理	矢部 亮（〃	課長補佐）
庶 務	近 文蔵（〃	主任）
調査指導	中島 栄一（〃	埋蔵文化財係長）
調査担当	山本 幸俊（〃	埋蔵文化財係文化財専門員）
調査職員	高橋 保雄（〃	埋蔵文化財係文化財主事）

平成2（'90）年度【二次調査】

主 体	新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）	
総 括	大鷗 圭己（新潟県教育庁文化行政課長）	
管 理	吉倉 長幸（〃	文化行政課長補佐）
庶 務	境原 信夫（〃	文化行政課埋蔵文化財第一係主事）
調査指導	本間 信昭（〃	文化行政課埋蔵文化財第二係長）
	寺崎 裕助（〃	第一係主任）
調査担当	山本 幸俊（〃	第二係文化財主事）
調査職員	鈴木 後成（〃	第一係文化財専門員）
	岩崎 均（〃	第二係文化財専門員）
	小田由美子（〃	第二係文化財調査員）

4 整 理 作 業

遺物の水洗・註記や遺構図面の整理などの基礎作業は発掘調査年度内に終了した。報告書に関わる本格的な整理作業は、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が新潟県から委託を受けて平成13年4月から10月に行なった。体制は以下のとおりである。

主 体	新潟県教育委員会（教育長：板屋越 麟一）	
整理受託	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査埋文事業団（理事長：板屋越 麟一）	
總 括	須田 益輝（事務局長）	

3 調査体制

管 理 長谷川司郎（総務課長）
庶 務 植谷 久雄（総務課主任）
整理總括 岡本 郁栄（調査課長）
整理指導 北村 亮（調査課整理担当課長代理）
整理担当 小池 義人（調査課主任調査員）
作 業 柳谷 栄子（調査課嘱託：土器の復元・実測・トレース、拓影等）
 東條シゲ子（調査課嘱託：土器の復元・実測・トレース、拓影等）
 笹川 陽子（調査課嘱託：土器の復元）
 鈴木 芳子（調査課嘱託：土器の復元・実測・トレース、表編集、拓影等）

版下作成から印刷製本にかかる業務については、出版業界のデジタル化に適応して従前の手法を転換し、トレースの一部と版構成作業を株式会社セビアスに委託するとともに、印刷業者の作業を印刷製本に限定した。委託した業務は遺構図面等のコンピュータトレースと從来印刷業者が行っていた版構成作業一般であり、埋文事業団は本文・図版のレイアウトを含む編集作業を行い、以下の資料を（株）セビアスに支給した。

本文・挿図：Adobe社Pagemaker形式・テキスト形式・Microsoft社Excel形式のデータ、貼り込み版下

遺構図面図版：原図コピー・レイアウト図案・文字データ

遺物図面図版：個々のトレース図・レイアウト図案・拓影・文字データ等

遺構写真図版：個々のモノクロプリント写真・レイアウト図案

遺物写真図版：モノクロプリント写真の貼り込み版下

第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境

1 地理歴史環境

頸城三山の東端に位置する妙高山は、高田平野に向かった北東側と東側に広大な山麓緩斜面を形成しており、ここを矢代川・渋江川・片貝川・大田切川・白田切川などが下り、それらを集めて関川が北流している。この緩斜面は西側を西頸城丘陵、東側を関田山脈とそれに連なる丘陵に挟まれ、新井市街地付近で高田平野に接する。

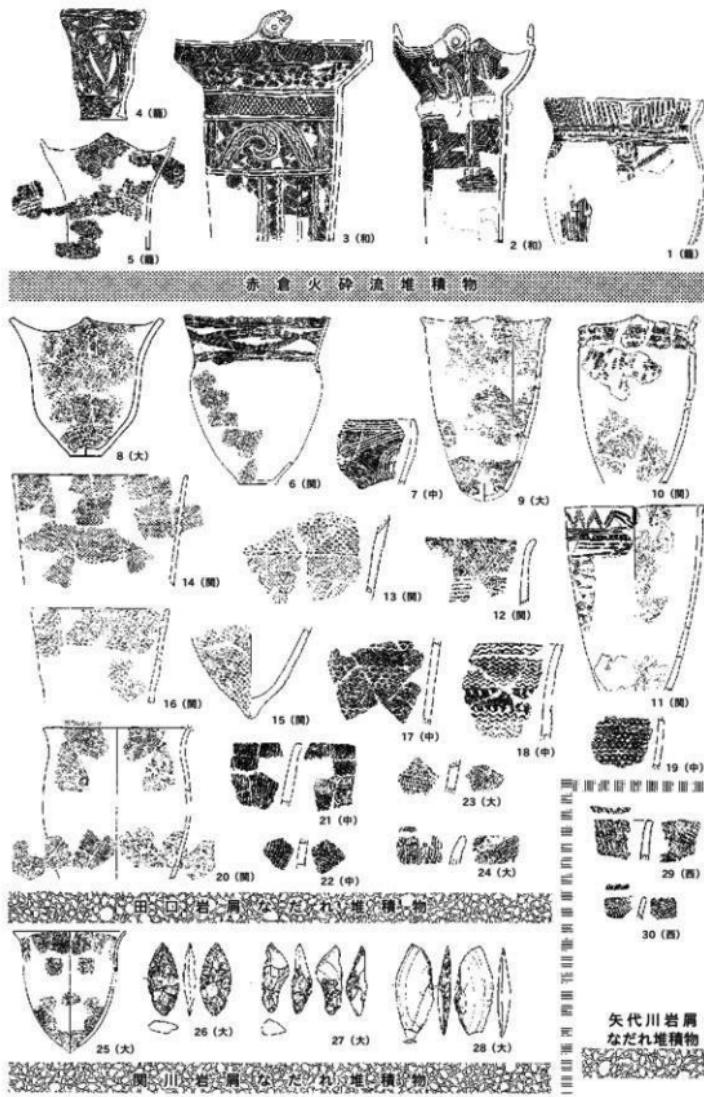
山麓緩斜面の西縁は、古くから交通の要地として重要な位置を占めており、現在では旧北国街道、国道18号、県道新井中郷線（旧国道18号）、鉄道信越本線が平行して南北に走っている。中世文書には妙高村の関山三社権現（現・関山神社）に立ち寄った京都常光院の発願文印の記事があり、上杉謙信の支配下では関山周辺が信濃國との交通の要衝であったことが知られている。また、古代には野尻湖畔に比定される東山道支道の沼沿駅から越後国府に至る道が、北国街道付近を通っていた可能性が高いと推定される。

近世の北国街道は妙高山麓に相当する部分を中山道と呼び、通過する新井・二本木・松崎・関山・二俣・田切・上原・関川の宿場を中山八宿と総称している。近世中期以降になると飛躍的に商品流通が発達して北国街道は信越を結ぶ大動脈として機能し、中山八宿も輸送物資の駄賃収入や宿泊料を經營の基盤とした。しかし、越後・信濃を越える物資は、新井宿から関田山地の平丸峠・富倉峠・涌井峠を通過して飯山方面に至る脇街道経由の物量が増加するにつれ、二本木・関川間の宿場は高田城下の問屋および他宿との間で絶えず争業を繰り返していた。

中世以前に關田山地の脇街道が担っていた交通は、頸南地域に存在する中世城館から多少は窺い知ることができる。新井市域の城館は富倉街道と北国街道の分岐にある鳥坂城（大字姫川原）から大瀬城（大字大瀬）、上馬場城（大字上馬場）、除戸城（大字除戸）、長沢城、長沢原城（大字長沢）と関田山地方向に連続しており、妙高村域の樽本城（大字下樽）、小倉山城（大字桶海）、滝常館（大字大庭）も関川の西方、関田山地側に存在する。妙高高原町域にある田切城（大字田切）、孤城（大字二俣）、関川館（大字関川）の3居館と蔵々城はいずれも明瞭な遺構を伴っていない。また、中郷村域に城館は存在しない。関田山地越えの脇街道が近世に中山八宿との軋轢から整備されたとしても、中世以前からこのルートも信越を強く結んでいたことは明らかであろう。なお、北国街道沿いの中郷村大字片貝の南田遺跡では約30棟の掘立柱建物が【親跡1988】、北国街道から花房山を越えた東方の妙高村大字花房の上ッ平遺跡では約50棟の掘立柱建物が検出されており【親跡1995】、中世後期に大きな規模の町が存在したことを推定させている。

2 妙高火山群由来の堆積物と遺跡の年代

妙高山は数十万年前から現在に至るまで4回の活動期と、活動期に挟まれる3回の休止期があり、その間噴火と崩壊・浸食を繰り返しながら今日見られるような複式成層火山となった。このうち、発掘調査で認められる堆積物は第4回目の活動期（第IV期）に堆積したものが主体である。第IV期は約3万年前のシブタミ川火砕流の発生に始まり、現在はその終末期にあたる【早津1985】。小重遺跡に存在する大田切川



(和): 中郷村龍崎遺跡 (大): 中郷村和泉A遺跡 (大): 妙高高原町大坂遺跡
(中): 妙高高原町中ノ沢遺跡 (西): 妙高高原町関川谷内遺跡 (西): 中郷村西畠田新田遺跡

第4図 妙高山麓における火山性堆積物と遺物の層位関係

火山灰・赤倉火山灰もこの第IV期の噴出物である。

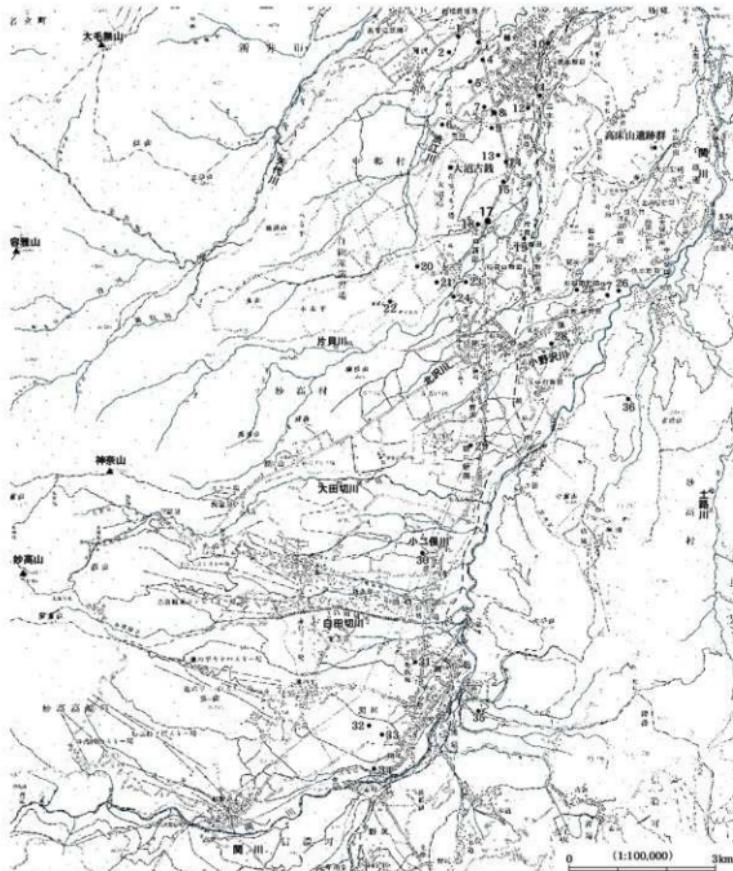
大田切川火砕流堆積物（以下、OT-p）は妙高山の東方から北東にかけての、小二俣川・関川・片貝川流域に分布する。時期は考古遺物との関係では縄文時代中期末～後期初頭が考えられているが〔早津・小島1985〕。実年代は¹⁴C年代の測定値にはばらつきがあるため、約4,000～4,500年前という幅をもった値が示されている。上信越自動車道・国道に関する調査では、これをより正確に補足する資料が得られていない。かつて新井市原通りハツ塚でOT-pが中期の新保・新崎式土器を含む黒色土を覆っているとの報告がなされたが〔小野・古川ほか1982〕、その堆積物は赤倉火砕流堆積物であると訂正されている〔早津・小島1985〕。なお、妙高山南東麓にはこれに関係して噴出された大田切川火山灰（以下、OT-a）のみが分布している。

赤倉火砕流堆積物（以下、AK-p）は、妙高山の東麓に広く分布し、北は片貝川から南は妙高高原町大字関川までの範囲で認められる。また、赤倉火山灰層（以下、AK-a）も山麓の広範囲に堆積している。AK-pは関川を越えて対岸の妙高村中古遺跡にも30cm程度が堆積している。〔室岡・早津ほか1986〕。考古遺物からみた時期は、從来縄文時代早期末から前期初頭と考えられてきた。ところが、関川谷内遺跡でAK-pが前期中葉の有尾式土器を包含する層を覆っているのが確認され、從来の認識を改める必要が出てきた〔小島1995、小池・江口1998〕。¹⁴C年代値は $5,880 \pm 190$ y.B.P. (Gak-7543) [早津・古川1981]、 $5,710 \pm 140$ y.B.P. (Gak-11393) [早津1985] が得られていたが、妙高村道添遺跡で $5,310$ y.B.P. (I-17,943) の測定値が得出された〔早津1995〕。この測定結果と遺物の出土層位との関係から、AK-pの堆積時期については從来よりも若干新しい時期、つまり有尾式より新しく、諸磯式並行期よりは古い時期、実年代では約5,300年前と捉え直すのが妥当と考えられている〔早津1995〕。

田口岩屑なだれ堆積物・関川岩屑なだれ堆積物は、大堀遺跡の調査によって再定義されているものだが〔早津1994a〕、妙高高原町妙高インターチェンジ付近に近接する大堀遺跡〔立木ほか1996〕・中ノ沢遺跡〔立木・寺崎ほか1997〕・関川谷内遺跡〔小池・江口1998〕の表裏縄文との関係に年代上の問題を孕む。ちなみに前者の堆積物は $7,780 \pm 160$ y.B.P. (Gak-7545) [早津・古川1981] (引用文献中では田口泥流堆積物上層部)、後者の堆積物は $19,600 \pm 600$ y.B.P. (Gak-409) という¹⁴C年代値が得られている〔早津1985〕。中ノ沢・関川谷内では田口岩屑なだれ堆積物上面が発掘限界であるので、表裏縄文がこれより新しいことは明らかである。一方、大堀では関川岩屑なだれ堆積物が発掘限界であるものの、部分的に田口岩屑なだれ堆積物が存在し、これより下位のV層と、AK-p (III層) の下位にあたるIV層で表裏縄文（織維痕のないもの）が出土している。報文はAK-pや田口岩屑なだれ堆積物が分布しない地点ではII～V層の区別が困難としており、出土層位の認定に不明瞭さが残るもの、IV層・V層の表裏縄文が同系列であるとすれば、田口岩屑なだれ堆積物は表裏縄文と重複する時期に堆積していることになる。表裏縄文土器は編年上の位置づけが不明瞭で、草創期多縄文系土器に後続するものとも言われるが、妙高山麓においては田口岩屑なだれ堆積物の年代値との整合性を検討する必要があろう。なお、表裏縄文は織維痕のあるものが大堀遺跡に存在し（第4図23など）、それらはAK-pより上のII層と報告されているが、出土地点は土層が区分困難で「3Dグリッド付近で出土した遺物は時期にかかわらずII層として記録・註記した。」との記載もある。織維痕のあるものとないものとに層位的な関係は確認されていないものの、織維痕のあるものが前期末葉に下ることはありえず、AK-pより古いことは疑えない。

小重遺跡付近の基盤の層をなしている矢代川岩屑なだれ堆積物は、1万9,000年前のカルデラ形成期の崩壊によって堆積したもので、 $17,900 \pm 450$ の¹⁴C年代が示されている〔早津1985〕。国道18号・上信越自

2 妙高火山群由來の堆植物と道路の年代



1. 小丸山道跡	純文（後・晚）	13. 中の坂A・C道跡	純文	
2. 前原道跡	純文（中）	14. 中の坂B道跡	純文（早～後）・平安	
3. 西福田新田道跡	純文（早・前）	15. 鹿越口道跡	純文（早～後）・平安	
4. 那須古道跡	純文（前・晚）・平安	16. 斑舟道跡	純文（早）	
5. 野林道跡	純文（前）	17. 小重道跡	純文（早～中）・中世	
6. 大岩道跡	純文（前）	18. 横川道跡	純文（前）・古墳・平安	
7. 八斗石原道跡	純文（早）	19. 南田道跡	純文（中）・中世	
8. 上中島道跡	純文（早・前・晚）	20. 松ヶ平道跡群	純文（早・前）	
9. 南野野村道跡	純文（早・中）	21. 潤の沢道跡群	純文（前・後）	
10. 猿原A道跡	純文（前・中）	22. 勝内山道跡群	純文（前・中）	
11. 北ノ原道跡	純文（中・後）	23. 茅峰道跡	純文（中・晚）	
12. 奥の城西平道跡	純文（後・晚）	24. 和泉人道跡	純文（中・晚）・弥生	
			25. 上ヶ平道跡	純文（晚）・中世
			26. 韮ノ木町道跡	純文（前・中）
			27. 通路道跡	純文（中・後）
			28. 律生道跡	純文（後・晚）
			29. 大洲原C道跡	純文（後）・古墳
			30. 外多道跡	純文（中）
			31. 東浦道跡	純文・平安
			32. 間川谷内道跡	純文（早・前）・平安
			33. 中ノ沢道跡	純文（早・前）・平安
			34. 大坂道跡	旧石器・純文（早・前）
			35. 麻伏D道跡	純文（後）
			36. 中古道跡	純文（早・前）

第5図 間川水系の河川と妙高山麓の道跡

[国土地理院 平成5年発行 「妙高山」「衡山」1:50,000図面]

動車道関係の調査では、片貝川・渋江川間の最古の土器は押型文土器であり、堆積物と遺物の関係については問題がない。

歴史時代の鍵層には、高谷池火山灰グループに含まれる焼山起源のKG-cがあり、これは約1,000年前の降下とされている〔早津1994b〕。KG-cは妙高山麓に多数存在する炭窯の覆土に度々確認され〔立木1999など〕、平安期に山麓が木炭生産地として広く利用されたことが明らかになっている。

3 縄文時代の遺跡

妙高山麓の緩斜面には縄文時代の遺跡が数多く分布しているが、堆積物の状況によって確認される遺跡の時期は地点によって大きく偏っている。上信越自動車道・国道18号妙高高尾バイパス・国道18号上新バイパスに関係する遺跡の調査成果を主体に集約すれば、堆積物と遺跡との関係は以下のように整理できる。

1) 関川上流部～白田切川

AK-p・OT-aの堆積が明瞭で、遺物と土層との関係が明瞭に把握できる区域である。田口岩屑流堆積物・関川岩屑流堆積物など発掘限界となる層までの深度が1m～数mであるため、旧石器時代期に遡る遺跡が見出される。近接しある妙高高原町大堀遺跡〔立木・寺崎ほか1996〕・中ノ沢遺跡〔立木・寺崎ほか1997〕・関川谷内遺跡〔小池・江口1998〕ではまとまった量の押型文土器があるほか、2節に問題点を記述した表裏縄文土器も出土している。

2) 白田切川～小二俣川

OT-pは数十cmであるが、AK-pが厚く調査はそれより上位の層に止まる。外峯遺跡ではOT-p下の黒色土から中期中葉の土器が少量出土している〔(財)新潟県埋文事業団1994〕。このほかに道路関係調査で遺物が出土した遺跡はなく、遺跡の分布が希薄な区域である。

3) 小二俣川～北沢川

OT-pの堆積が地形を規定している区域で、平坦な緩斜面が連続する。その中央を大田切川がV字形の谷を刻んで流下している。OT-pが厚く、調査はそれより上位の層に留まる。大洞原C遺跡で後期後葉の土器が少量出土しているのみである。OT-pが噴出したとされる中期末～後期初頭を遡る遺跡が国道18号以西で発見される可能性はごく低い。しかし、関川本流に近い花房山東方の地域ではOT-pの堆積が比較的薄く、柿ノ木町遺跡〔親跡1992〕・道添遺跡〔室岡・早津ほか1994〕でこれより下位にある前期末・中期前葉の遺跡が調査されている。

4) 片貝川右岸

OT-pは数十cmから数mの厚さを測り、状況によってはこれより下位に存在する前期後葉から中期中葉の遺物包含層に達することができるが、AK-pに厚く覆われているため前期中葉以前の遺跡は知られていない。和泉A遺跡〔荒川・加藤1999〕ではOT-pを挟んで晩期から弥生時代初頭の土坑群と中期前葉の集落が調査された。籠峰遺跡は、後期後葉から晩期中葉を中心とする建物群・配石土坑群が多数検出されているが、片貝川に面した西側区域でのみOT-pが薄く、前期後葉から中期前葉の土器が少量出土している

3 繩文時代の遺跡

【野村編2000・小池1996】。AK-pより古い遺跡がないという点では、上記の道添遺跡周辺もこの区域と同様な状況にある。

5) 片貝川左岸～渋江川

黒色土中に火山灰（OT-a・AK-a）2枚が挟在し、遺物包含層が3枚存在する点では、関川上流部～白田切川間と似た条件にある。両火山灰は小重遺跡・横引遺跡で確認されるもののそれより北方では明らかでなく、やや間隔を置いて大字二本木の上中島遺跡〔立木1999〕で再び確認される。発掘限界となる層は矢代川岩屑なだれ堆積物であり、それまでの深度は1メートル前後であるために早期に遡る遺物が出土する。早期・前期の遺跡の分布が濃い区域で、渋江川左岸の西福田新田遺跡〔立木ほか1999〕では表裏繩文土器も出土している。この地域は火山灰の堆積が厚くないために遺物の出土層位の認定に困難がある。松ヶ峯遺跡群・湯の沢遺跡群については「ローム層」とされる堆積物が不明であるが、2枚の「火山灰土」が堆積しており〔室岡ほか1966〕、小重遺跡などと同様な状況にあると思われる。

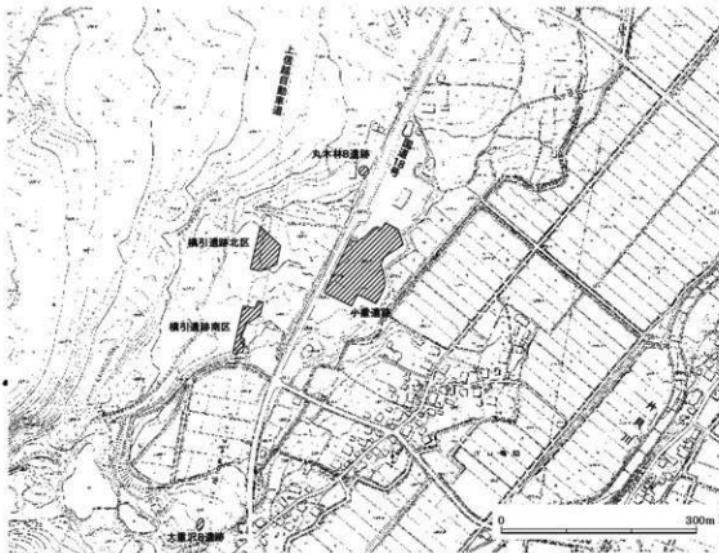
第Ⅲ章 調査の概要

1 隣接する横引遺跡の調査

横引遺跡は国道18号を挟んで小重遺跡に隣接する。「新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カード」による横引遺跡の所在は大字市屋字横引(乙)687-2ほかであり、字丸木林との境界にある。昭和62年に縄文土器片1点・土師器片2点・貝岩フレーク2点ほかを発見して、遺跡発見通知が出されている。おそらく、北側に接する丸木林B遺跡と小重遺跡とを分離して横引遺跡を新規の遺跡としたのでろう。

横引遺跡は、上信越自動車道の建設に伴って平成5(1993)年に発掘調査されている(第6図)。遺構は縄文時代晩期の土坑1基、古代平安期の竪穴建物2基があり、縄文時代の遺物は早期中葉の押型文土器が最古で、前期後葉・中期・後期・晩期の土器が少量ある。また、古墳時代前期の土器がある程度まとまっているほか、平安期の土器・鉄器などが少量ある(第7図)。これらについては、第V章の中で関連するものに言及する。

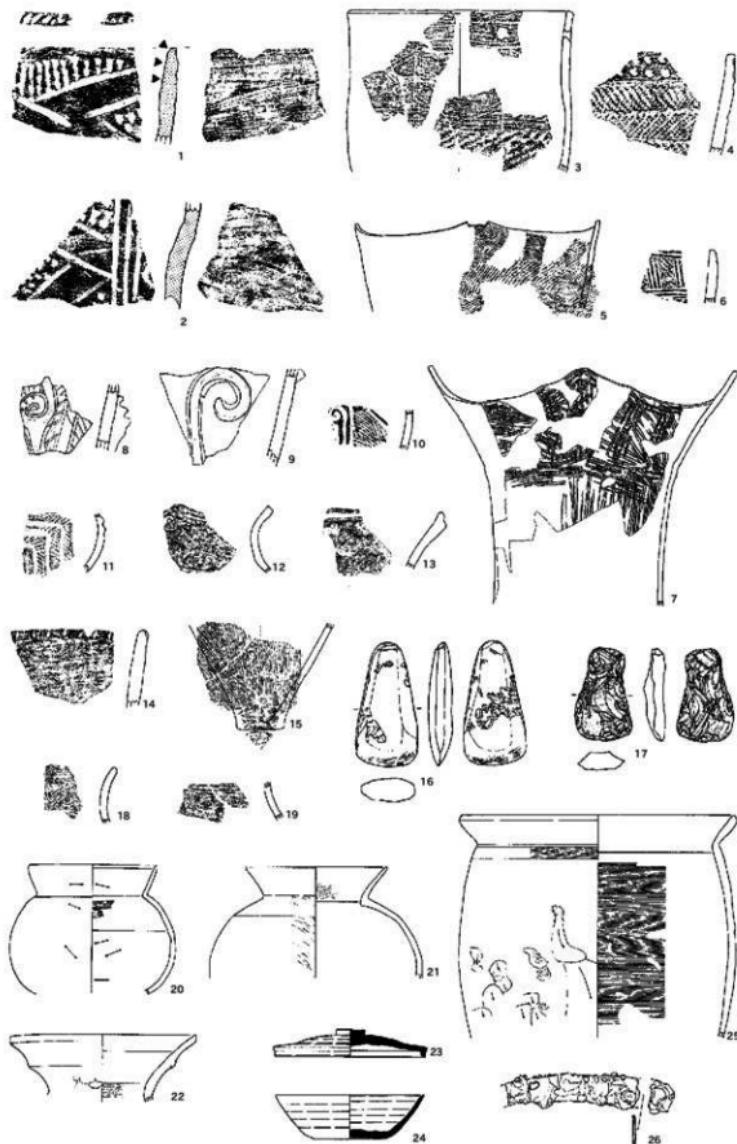
小重・横引の両遺跡は国道に分断されているが、いずれも南西側の松ヶ峯カントリーゴルフ場付近から伸びる通称「雲雀山」の緩斜面にあり、遺物の時期もほぼ重複しているので、同一の遺跡として捉えられる。ただし、横引遺跡では一定量存在した古墳時代前期の土器、古代平安期の土器が小重遺跡では皆無に近い。妙高山麓では、古代集落の建物は散在する傾向にあるので、これは偶然の遺地の結果であろう。



第6図 小重遺跡・横引遺跡の位置関係

(中郷村役場作成「中郷村9」 平成5年修正 1:2500原図)

1) 隣接する横引道跡の調査



第7図 横引道跡の出土物

1・2: [野村1997] 3~26: [立木1996]

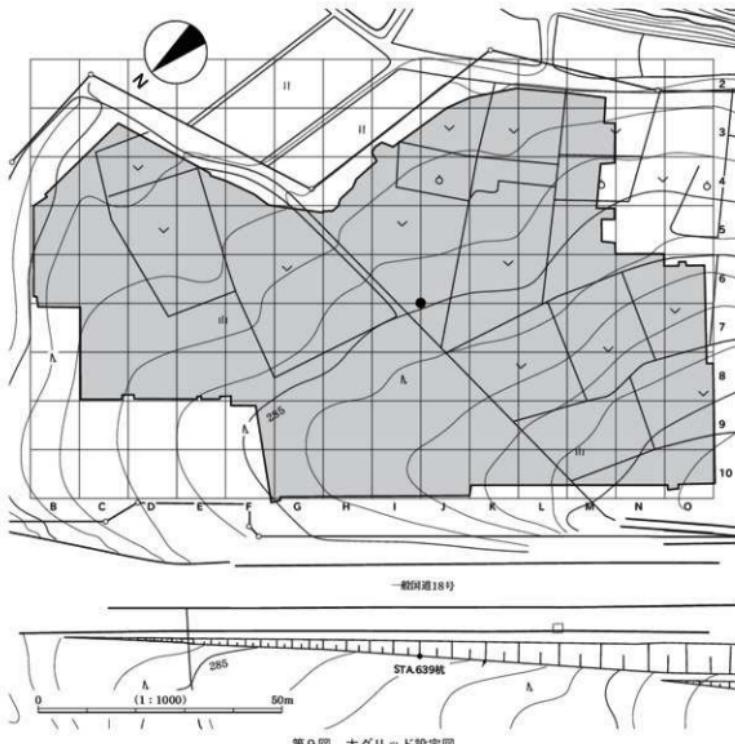
2 グリッドの設定

グリッドの方向は国道18号の方向と一致させるため、国道の路程杭No.639が国道の中心線とほぼ直角に交わる線を東西の基準線として設定し、この線上にある調査区域中央付近の任意の点（国土座標ではX=105,985 Y=24,576）を基準として10m四方の方形を組み、これを大グリッドとした。（第9図）このため、グリッドの長軸方向は真北から約27度東偏している。大グリッドは長軸方向を北からのアルファベット順、短軸方向を東からの算数字順とし、この組み合わせによって表示した。

大グリッドはさらに2m四方に25分割し、北西隅を1、北東隅を5、南東隅を25として小グリッドとし、5D-2のように表記した（第8図）。不合理ながら、大グリッドの算数字の並びと小グリッドのそれは合致していない。

5	10	15	20	25
4				
3				
2				
1	6	11	16	21

第8図 小グリッドの呼称



第9図 大グリッド設定図

3 基本層序

妙高山麓で鍵層となる大田切川火山灰（OT-p）・赤倉火山灰（AK-a）は、小重・横引両遺跡に存在する。横引遺跡ではOT-pが沢地形となる一部でしか確認できないが、逆に横引遺跡では明瞭であったAK-pが小重遺跡では存在しない部分も広く存在する。妙高火山群由来の堆積物については第II章2で記述しており、これを参照されたい。

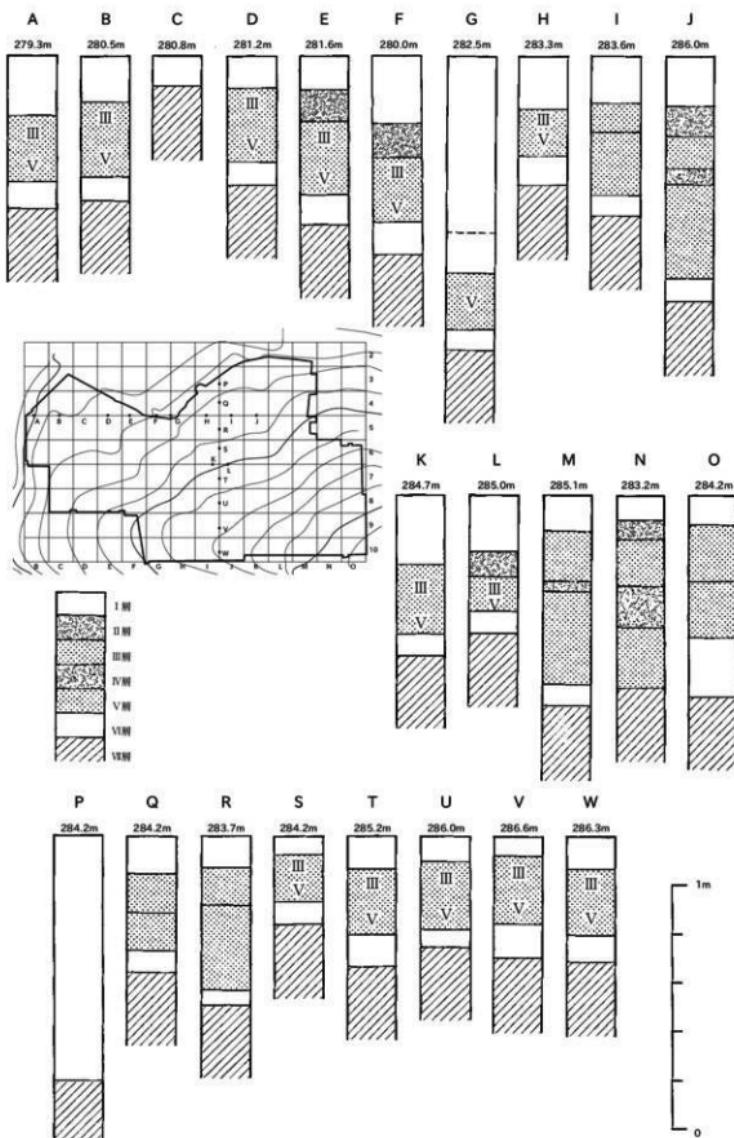
- I 層：現表土である。黒褐色を呈する。焼山由来の灰白色火山灰（KG-c）が見られる地点もある。
- I b 層：人為的な耕作土で調査区域の大半を覆っている。褐色～ぶい黄褐色を呈する。耕作がII層を埋没しているため色調はII層と近似するが、下位の層との境界は明瞭である。調査記録では、I層とI b層を区別せず、両層をI層として扱っている。
- II 層：OT-aを主とする土層である。褐色～黄褐色を呈する。遺物を含むしない。調査区域のほぼ全面に分布するが、耕作を受けている部分はこれがI b層に転化している。
- III 層：黒褐色を呈する。層位的には前期後葉から中期中葉の遺物を含む土層である。
- IV 層：AK-pを含む土層である。褐色～暗褐色を呈する。AK-pは腫げな斑状あるいはブロック状になって黒褐色土に含まれており、上位・下位の土層との境界は不明瞭である。AK-pが分布しない範囲は、それが分布する範囲より広い。
- V 層：黒褐色を呈する。層位的には早期から前期中葉の遺物を含む土層である。小重遺跡における最古の土器は押型文土器である。なお、IV層が存在しない場合、III層・V層の分別は困難なため、第10図では1つの土層内にIII層・V層を併記している。
- VI 層：V層とVII層の漸移層である。黄褐色を呈する。
- VII 層：矢代川岩屑などなれ堆積物である。明褐色を呈し、人頭大を中心とした大小の亜角礫と砂礫が多量に含まれる。礫に阻害され、スコップなど人力で掘削するには多くの労力を要する。

4 遺構の層位と時期

A III層上面の遺構

調査の初めの段階で埋納鉄遺構である15号土坑の発見があったため、III層上面は中世の遺構を検出するという目的で特に注意が払われた。中世の遺構は土層が整合堆積であればII層上面で確認されるところであるが、調査区域の南東側ほぼ半分が畑地で、深度の浅いII層の大半がI bに転化していたため、中世を含むOT-a降下以降の遺構はIII層上面で一括して検出することになった。

III層上面の遺構は、黒褐色土中に褐色系の土が分布するという状況で検出されている。覆土中に土器が全くないという状況で、調査所見はこれらを概ね中世と推測しているが、これを肯定することは困難である。この面での主たる遺構は溝であるが、基本土層の断面図にかかる340号溝・117号溝・113号溝の覆土は、含まれる礫の量などによって分離できるものの、基本的にI b層と同じである旨記録されている。この他の遺構も、記録写真を見る限り褐色系の土粒（OT-a）が多く混じる单層の覆土で、現耕作土であるI b層と区分できない。これに加えて溝の方向が調査以前の地割とよく似ていること、中世・近世陶磁器に16・17世紀代のものがないことを考慮すれば、これらの遺構は18世紀以降の耕作に関係すると考える



第10図 土層柱状図

のが妥当である。これを踏まえて、Ⅲ層上面検出遺構のうち、溝と同様な覆土をもつ土坑・ピットも近世以降と判断した(図版2)。なお、VII層上面で検出された218号溝は覆土が黒色系であるが、近世の陶器が出土していると調査記録にあり、褐色系覆土の遺構のみが新しいと限らないことは留意されるべきことである。

Ⅲ層上面の集石については、集石1が340号溝の覆土上に存在するのでごく新しいと判断し、集石1と同様に土坑を伴わない他の集石も近世以降とした。77号溝付近のグリッドには、本書で取り上げた集石のほかに、一部に川原石を含むらしい「集石」とされる礫も散在して認められるが(『研究紀要』[戸根・鈴木1995]では「配石範囲」)、基本的に搬入されたのではなく耕作などによって深度の浅いVII層から浮き出たものであろう。礫の集積が明瞭なものだけを図化して図版16に取り上げた。近世の集石は妙高高原町閑川関所跡にも調査例がある[小田・三浦1994]。Ⅲ層上面の遺構の中でも60号土坑と106号土坑の集石土坑については、新しいと判断する材料がなく中世以前の遺構に含めた。なお、『研究紀要』で井戸とされているSK66(本書では66号土坑。径57×62cm、深度72cm)については、水成堆積の粘質土が堆積しておらず、他の溝と共通する覆土であるため、井戸とはしない。

前掲『研究紀要』では、16世紀第3四半期頃とする埋納鉄遺構とⅢ層上面の遺構を「時期的に極めて近い関係にあるもの」と推測しているが(本書30頁参照)、これは上述の調査経過に由来する調査時の所見を踏襲したものであろう。近世以降と判断した遺構については、図版2・16に平面図を、図版53・54に一部の写真を示すに止めた。

B VII層・VII層上面の遺構

Ⅲ層以下の遺構はAK-aを含むIV層が明瞭でないために一括してVI層あるいはVII層上面で検出されている。したがって、この面で検出された遺構は縄文時代早期中葉から中世までの広い時間幅を有する(図版1)。竪穴住居と陥し穴土坑は縄文時代であることは明らかであるが、前期後葉に属する一部の竪穴住居を除けば、遺構の時期を特定する資料に恵まれていない。

覆土の遺物が1点のみの陥し穴土坑についても同様であるが、AK-aを含むIV層に覆われているものが1基(25号土坑)あり、これを含む土坑列(D列)は前期中葉以前の時期を与えられる。これに近接し、列が交わらない土坑列も前期中葉以前に構築された可能性が高い。土坑・集石土坑については、溝のように覆土が褐色系でない中世以前としたが、時代時期とともに不明である。縄文時代後期・晚期の可能性も考えられる。ともすれば埋納鉄遺構との関連を推定したい掘立柱建物についても、時代時期は不明である。

第IV章 遺構

1 概要

第III章で記述したように、小重跡では2枚の面で遺構が確認されている。このうち、Ⅳ層上面の遺構については近世以降の耕作等によるものと判断し、図版2に平面図を掲載しているが、ここでは記述しないこととする。近世以降と判断した溝・集石・土坑・小ピットを除くと、小重跡の遺構総数は竪穴住居9基、陥地穴状土坑7群24基、掘立柱建物1基、集石土坑19基（集石土坑列1条・集石土坑2基）、土坑10基、埋納鉢造構1基である。遺構の時期は縄文時代～中世の時期幅をもつが、以下、時代時期に関わらず遺構の種類ごとに概要を記述する。

2 竪穴住居

9基の竪穴はいずれも床面がⅦ層を明確に掘り込んでいないために、竪穴構造を欠いているが竪穴住居と判断して記述する。なお、「竪穴住居」の語は、建物の性格を限定しない「掘立柱建物」と同列に扱うことが不合理であり、竪穴構造の有無を分別の基準として「竪穴建物」「掘立柱建物」とするのが適当と思われるが、考古学の用語として定着している「竪穴住居」の語を用いる。

Ⅴ層中で存在が確認された2号竪穴を除けば、竪穴はⅦ層上面で存在が認識されており、掘り込まれた面または土層は不明である。後述するように、集落を前期後葉前後に仮定すると、竪穴は2号竪穴も含めてAK-aを含むⅣ層より上位から掘り込まれたものとなる。

孤立して存在しピットの配置が明らかな1号と、覆土が残存し遺物がまとまって出土している2号、中心部に炭化物が存在する3号・4号はひとつの建物と断定できるが、このほかは円形または円形の平面形を推定できるピット群を抜きだして認識したものである。したがって、ピットが密集する部分の竪穴建物においては、関係性の窓のピットを多く含めて図化し、調査時に竪穴に関係ないと判断され名称を与えられていないものは、P5D（5号竪穴のDピット）のように竪穴の号数にアルファベットを組み合わせて新たに名称を付けた。

竪穴住居とピット群は、孤立する1号竪穴以外、61グリッドの遺構空白区域を中心にして環状に分布しており、ある一定期間存続した「環状集落」と見ることができる。2号竪穴・4号竪穴が前期後葉であることからすれば、伴出遺物のない3号から9号の竪穴も概ねこの時期に存在したものと推測する。調査区域内に点在する倒木痕は、集落部分とほぼ重ならず分布しており、すべての倒木痕が1回の自然事象で形成されたのではないにしても、集落の存続中か、集落が廃絶して森林が復原しない時間にまとまった倒木が起きたと考えられる。このような集落と倒木痕の関係は中郷村龍峰遺跡〔野村編2000〕でも見られることである。

9基の竪穴建物は以下のように分類できる。ピット群の長軸上両端にピットが位置するAグループ（3号・6号・9号）、ピット群の長軸上一端にピットが位置するBグループ（1号）、ピット群長軸上にピットがなく浅い土坑を伴うC1グループ（2号・4号）、ピット群の長軸上に柱穴がなく土坑を伴わないC2

2 竪穴住居

グループ（5号・8号）、ビットの配置が不明のグループ（7号）である。不明の7号を除けば、いずれのグループもビット群の長軸と直交する方向に3対あるいは4対のビットが配置される。

1号竪穴

4D・3Dグリッドに位置する。馬蹄形にめぐるビットのみが検出された。長軸上にあるP19を除くと6基のビットは整然とした対をなす。覆土は確認されておらず遺物はない。

2号竪穴

7Jグリッドに位置する。前期後葉の竪穴住居である。ビット群に土坑が近接する例は4号竪穴にもあり、ビット群南東側の140号土坑は本竪穴に伴うものと判断した。炉はない。V層下部で存在が確認されたため、竪穴中央部に10数cmの覆土が残存し、器体の全容を知り得る深鉢2点（図版22-62・63）と漆彩文のある浅鉢1点（図版21-49）などが出土した。純文地文の深鉢も見られる（図版21-56・58・59）。石器にトゥールはないが、頁岩の小剥片が17点まとまっている。V層下部で存在が確認されたものの、覆土とV層の区別が困難だったためか、壁面の検出は行われていない。

3号竪穴

7Kグリッドに位置する。ビット群の中心からやや北寄りの位置に、炉と見られる炭化物の堆積したビットがある。覆土は確認されておらず遺物はない。

4号竪穴

4H・4Iグリッドに位置する。前期後葉の竪穴住居である。2号竪穴と同様に土坑が付随するものと認識する。4対のビットが規則的に並び、その中央に炉と見られる炭化物の堆積がある。炭化物の底面に赤化・硬化は見られない。中央部がわずかに窪んでいるため数cmの覆土が残存し、ここに深鉢の底部2点（図版22-64・65）があるほか、竪穴の付隨施設と見られる197号土坑でも土器片が1点（図版20-44）出土している。

5号竪穴

8I・8Jグリッドに位置する。P-5AとP246を結ぶ線と直交する方向に竪穴の長軸を想定した。複数の竪穴が重複している、もしくは建物の改変がなされた可能性がある。ビット群のほぼ中心に位置するP-5Jに焼土・炭化物等の堆積はなく、他のビットとの関連は不明である。覆土は確認されておらず遺物はない。

6号竪穴

7Jグリッドに位置する。ビット群の中心から西側へ寄った位置にあるP-6Fに焼土・炭化物等の堆積はなく、他のビットとの関連は不明である。覆土は確認されておらず遺物はない。

7号竪穴

孤立して存在するビット群であるため、建物の認識に問題はないと思われるが、倒木痕が広がっており全容は不明である。覆土は確認されておらず遺物はない。

8号竪穴

5Jグリッドに位置する。4対の柱穴が認められるが、P364とP361を結ぶ線の方向が他とはやや異なる。覆土は確認されておらず遺物はない。

9号竪穴

G6・G7グリッドにあり、西縁部が集石土坑列と重複する。集石土坑は本竪穴と重複する部分が擾乱されていないことからすれば、9号竪穴が古く、集石土坑が新しいと認められる。覆土は確認されておらず遺物はない。

3 挖立柱建物

1号掘立柱建物の1基のみである。東側桁行のピットを欠くが、建物と認識した。VII層上面で検出されたが、掘り込まれた面あるいは層は不明である。覆土は近世以降の溝・ピットとは明らかに異なる黒色系である。縄文時代から中世までの可能性がある。

4 陥し穴土坑

24基の土坑を7列の群として認識した。覆土中の遺物は37号の前期中葉土器1点(22)のみであり、時期を知り得る遺物は乏しい。37号がこの土器より古いとは断定できず、土器が土坑掘削より古い時期の包含層から流入したこと否定できない。しかし、AK-aを含むIV層に覆われていることが明らかな25号土坑があり、これに連なるD列土坑群は前期中葉以前の時期を与える。一般に、狩猟施設である陥し穴土坑が集落の至近に存在することは不自然であり、前期末葉前後と見られる集落と陥し穴土坑の時期が合致しないことは矛盾なく理解できる。覆土は概ね黒色土で、しばしば灰褐色系の土が挟在するが、これはAK-aと考えられよう。なお、明褐色系のVII層土を深く掘り込んでいるにも関わらず、VII層土が覆土に流入した例は少数である。

土坑の平面形は不整梢円形もしくは不整方形であるが、形態が整っていないのはVII層が屢々多く含んでいて掘削が困難であることによるもので、24基の土坑を平面形で分類することはあまり意味をなさないであろう。また、深度は検出面であるVII層上面からの値であり、深度の違いは掘り込み面と見られるV層の厚さにも左右される。しかし、列ごとの断面形・深度などの差異は比較的明瞭である。

平面形の数値は、第11図で示すとおり主軸を基に最大値を計測した。しかし、底面は下端の認識に主観が入りやすく客観性の低いデータとなるため計測していない。土坑の深度・坑底部小ピットの深度は断面図での最大値とした。また、主軸は底面の形態を優先して設定し、真北からの振幅を計測した。計測値は第1表に示す。

A列(17号・37号土坑)

B列にはほぼ平行する。2基の間隔は長く17mを測る。いずれも長軸方向の壁面に傾斜があり、断面形は台形状を呈する。37号土坑覆土の土器(20)は前期中葉に属する。

B列(16号・18号・22号土坑)

A列にはほぼ平行するが、A列に比べて深度は大きく、壁面の角度も垂直に近い。22号は壁面・底面をVII層中の屢に規定されながらも不整の方形を作り出している。

C列(23号・24号・27号・175号・221号・228号)

列は等高線に直交して整然と弧を描く。底面の小ピットの深度には大きなばらつきがある。壁面の角度は垂直に近い。23号は壁面の屢の下部を抉り出して底面の形態を確保している。

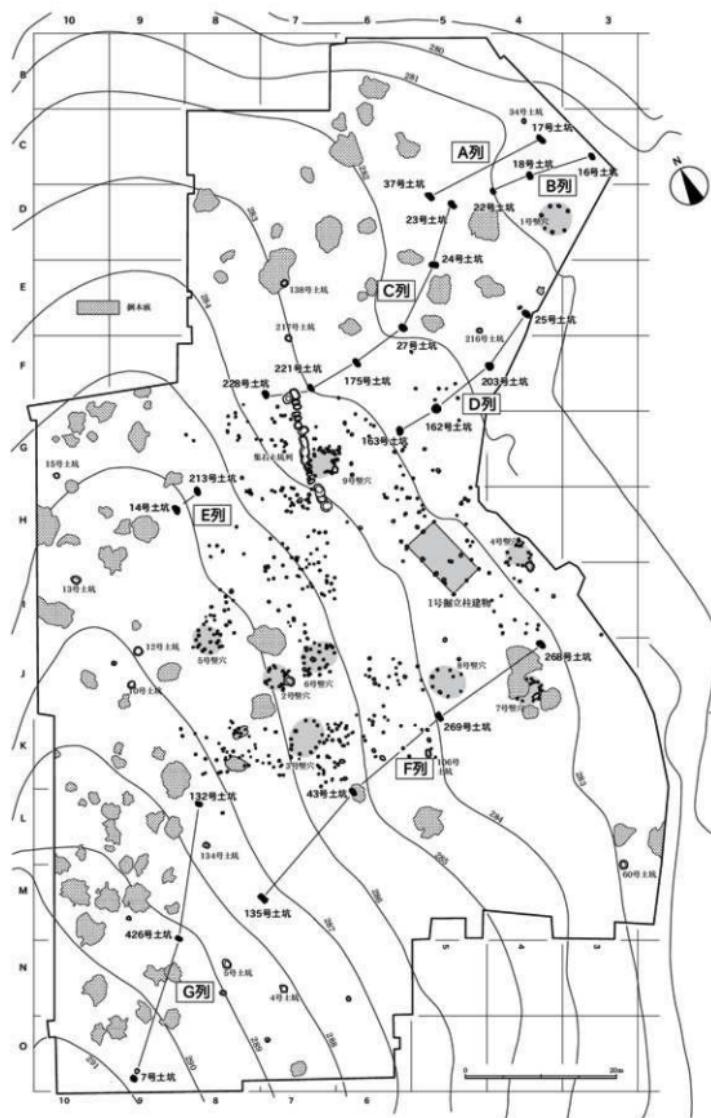
D列(25号・203号・162号・163号土坑)

列はC列にはほぼ平行して弧を描く。C列に比較して深度は小さく、断面形は概して台形状を呈する。上端は開いて掘り込まれ、下端の平面形は梢円形を呈する。



第11図
陥し穴土坑の計測法

4 陥し穴土坑



第12図 陥し穴土坑の配置

第1表 陥し穴土坑一覧

単位はcm

土坑名	群別	大グリッド	主軸方向	土坑長径	土坑短径	土坑深度	ビット深度	備考
17号土坑	A列	4 C	N-17-W	137	69	93	30/12	覆土中に火山灰。
37号土坑	A列	5 D	N-25-W	134	82	86	29	覆土中に火山灰。
16号土坑	B列	3 C	N-4-W	96	62	113	32	覆土中に火山灰。
18号土坑	B列	4 C	N-2-E	104	75	123	24	
22号土坑	B列	4 D	N	85	56	110	18	
23号土坑	C列	5 D	N-15-W	118	78	108	71	
24号土坑	C列	5 E	N-63-W	113	77	125	22	覆土下底にVII層土。
27号土坑	C列	6 E	N-18-W	112	87	120	48	
175号土坑	C列	6 F	N-11-W	119	65	88	39	
221号土坑	C列	7 F	N-28-W	103	68	101	33	
228号土坑	C列	7 F	N-2-W	105	75	85	22	
25号土坑	D列	4 E	N-32-W	113	82	57	44	V層に覆われる。覆土下底にVII層土。
203号土坑	D列	4 F	N-18-W	107	98	58	37	
162号土坑	D列	5 F	N-31-W	116	110	69	38/25	覆土中に火山灰。
163号土坑	D列	6 G	N-10-W	107	87	52	35	
213号土坑	E列	8 H	N-3-W	109	76	90	37	
14号土坑	E列	9 H	N-4-W	129	84	83	37	
268号土坑	F列	4 J	N-20-W	125	76	57	16	
269号土坑	F列	5 K	N-7-W	125	69	57	35	
43号土坑	F列	6 K/6 L	—	—	—	43	—	
135号土坑	F列	7 M/8 M	N-19-W	139	74	40	27	
132号土坑	G列	8 L	N-47-W	97	58	50	15	
426号土坑	G列	9 M	N-36-W	94	52	46	21	
7号土坑	G列	9 O	N-20-W	95	75	65	40	

E列 (213号・14号土坑)

3.6 mの距離で近接する2基である。14号の断面形は長軸・短軸方向とも上端に向かって広がる。

F列 (268号・269号・43号・135号土坑)

269号はVII層中の躰に底面を規定されて比較的浅い。その他の土坑についても、V層中に掘削されたと推測される分の深さを考慮しても、深度は小さい。43号はそれより古い時期の倒木痕中に構築されており、全容は不明である。

G列 (132号・426号・7号土坑)

他の列に比べて規模は明らかに小さい。426号・7号は小ビットの位置がVII層中の躰に規定される。

5 土 坑

豊穴住居に付随する2基の土坑を除いて10基がある。いずれもVII層上面で検出されたが、掘り込まれた面あるいは屑は不明である。覆土は近世以降の溝・ビットとは明らかに異なる黒色系である。縄文時代から中世までの可能性がある。

6 集 石 土 坑

III層上面で確認された集石（集石1～集石7）は、第II章で前述したとおり近世以降と判断したのでここでは詳述せず、図版11下部に平面図を掲載するに止めた。

集石土坑列【428号～444号土坑】

7F・7G・7Hグリッドに位置する。428号～444号土坑の17基からなる。この付近はII層（OT-aを含む層）・IV層（AK-aを含む層）が存在しないので、遺構の掘り込み面が不明である。集石の上位にあるIb層はこれに接すことなく覆っており、集石はIII層に対応するレベルにあるが、土坑が掘り込まれた面は不明である。礫は土坑の上面を覆うようになり、土坑中には存在しない。礫は安山岩の亜角礫であり、VII層土中から産出したものであろうが、磨石類2点（96・110）が混在する。土坑の覆土はIII層・V層と同様な黒褐色系である。土坑の底面は深度の小さい443号・444号を除いてVI層に達している。上層の不明瞭さに加えて土坑の覆土に土器が皆無であるため、時代時期は不明であるが、これと重複する9号竪穴より新しく、近世に下らないことは明らかである。縄文時代後期・晚期の集石土坑、あるいは中世の集石墓がこの土坑列に類似しうるが、磨石類2点は集石土坑構築に近い時期のものが混入したと見る方が自然であろう。

106号土坑

5Kグリッドに位置する。安山岩の亜角礫が底面まで充填される。

60号土坑

3L・3Mグリッド境界に位置する。安山岩の亜角礫が底面まで充填される。土坑の平面形は記録されていない。

7 埋納錢遺構

二次調査着手の当初、調査対象範囲を見直す目的で調査範囲の西側（9・10ライン付近）と南側（N・Oライン付近）に50%のトレンチ調査を行っているが（第1章2節B参照、図版55）15号土坑が存在する位置とトレンチは偶然に一致していなかった。その後、9・10ラインの南半部は全面的な調査が必要と判断され、10Gグリッドにある15号土坑は、重機による表土・遺物包含層掘削中に地表下約0.5mで銭貨塊が発見された。重機が慎重な操作を行っていたために遺構は損壊せず、上面の銭貨數十点が多少移動したに止まる。銭貨の発見はV層中であるが、機械掘削中に「不整形の搅乱がある」と認識されたため、土坑の記録は銭貨が発見された面以下の部分に限定される。曲物容器は蓋を被されていたと思われるが、蓋の底板は発見されていない。機械掘削土は十分に探査しており、発見時すでに木製の蓋は腐朽していたものと思われる。

土坑は長径約70cmを測る不整円形で、その南寄りの位置に曲物容器が設置されている。銭貨は底面附近がサシをなさないバラ銭、中位が100点前後単位のサシ、上面が数十点単位のサシとバラ銭という区分で曲物容器に納められ、いずれの部位にも銭貨の間隙に粉殻を含む土が充满していた。曲物容器およびサシの薬紐はほとんど腐朽せず埋納当時の現状をよく止めている。特に薬紐は現代の製品かと思われるほど生々しい。低湿地でないにもかかわらず、木質遺物が残存しているのは、おそらく酸化銅成分の保護によるものであろう。曲物容器の底面は土坑底面に接し、土坑底面は容器の形状のとおり明瞭に黒ずんでいた。

第V章 遺物

1 概況

小重遺跡の遺物は、縄文時代早期中葉から近・現代におよぶ。このうち主体をなすのは縄文時代前期後半の土器と縄文時代の石器、中世埋納鉄造構の銭貨約29,000枚である。土器は平箱11箱、石器等は平箱4箱程度である。このほかに銭貨を収納していた曲物1点などある。縄文土器は草創期・晩期を除く各時期のものがあり、ほかに古墳時代前期・古代平安期、中世、近世以降の遺物が少量存在する。弥生時代の遺物は皆無である。

小重遺跡は西側に隣接する横引遺跡と同一の緩斜面にあるため、ほぼ同様の時期の遺物が見られるものの（14頁、第7図参照）、横引遺跡に一定量存在した古墳時代・古代平安期の遺物が絶対的に少なく、逆に横引遺跡で少なかった縄文時代早期中葉・前期後葉の土器が小重遺跡にまとまって存在している。

2 縄文土器

A 早期中葉（1～14）

押型文土器と無文土器があり、大グリッドの4～7、C～Hの範囲にまとまって出土している。総重量は2,240gである。押型文土器には、無文帯を持つ山形文の施文（1～8）、無文帯を持たない楕円文の施文（9～11）、楕円押捺文と沈線文の併用（12）の3種がある。ほかに押型文系土器と見られる無文の土器（13・14）がある。隣接する横引遺跡には、楕円文と山形文の小片が各1点出土している。

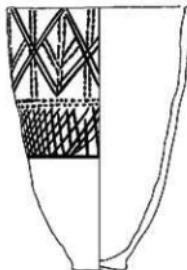
1・3は同一個体であるが、相互の位置関係が明らかでないので別図としている。4は原体による施文をなで消すという手法で、やや異なった山形文を描出している。外面の山形文は、1条の山形文と無文部が交互に見えるが、長さ19mm程度の原体による2段の回転押捺である。破片上下で無文に見える部分には山形文が薄く残っており、山形文は回転押捺の後になで消されたと観察できる。したがって、破片中央部の無文部が、施文されていない無文帯である。口縁端面の山形文は外面のそれより細く、別の原体による。5は施文原体の下端部を回転押捺した後、口縁外側をなでている。12は上位の梯子段状モチーフの両側が沈線で、沈線内は楕円押捺文と見られる。下位は楕円押捺文である。これは妙高高原町閑川谷内遺跡〔小池・江口1998〕で一定の出土量がある押型文土器終末から沈線文土器初期のもの（8頁、第4図12など）と同類であろう。口縁部以下が無文の13・14も押型文系土器であろう。掲載したほかにビニール袋1包程度の土器がある。その大半は楕円文と胴部の無文破片であり、山形文・無文は少ない。

B 早期後葉（15～20）

大グリッドの5～9、J～Lの長細い範囲にまとまって出土している。総重量は1,810gである。

15は終端や屈折点に刺突をもつた沈線で文様区画を描き、背面竹管の列点を充填する。野村が報告した横引遺跡の土器（第7図1・2）〔野村1997〕によく近似するものである。関東地方の鶴ヶ島台式に相

当しよう。口縁部が2回屈折する器形で屈折部に縦の刻みが廻る。20も葛ヶ島台式に併行するものであろう。復原される文様構成は第13図のとおりである。上部文様帶は沈線2条による菱形のモチーフを連続させ、菱形の頂点と、沈線が交差する位置に2条単位の縦位押し曳き線を配置する。さらに菱形内部に2条単位の押し曳き線で「V」字を加えている。口縁を含む破片の左端には3条の沈線があるため、菱形内部は連続して「V」字を加えると見られる。上下の文様帶を区別しているのは半截竹管腹面側を用いた2列の刺突であるが、部分的に背面の押し曳き線を用いている。下部文様帶は単沈線で斜格子目を描く。使用している施文具はすべて同一であろう。16~19は絡条体圧痕を施すものである。掲載したほかにビニール袋1包程度の条痕文土器があるが、多くは掲載土器と同一個体で、個体数は5前後である。



第13図
土器20の文様概念図 (1/6)

C 前期中葉 (21~26)

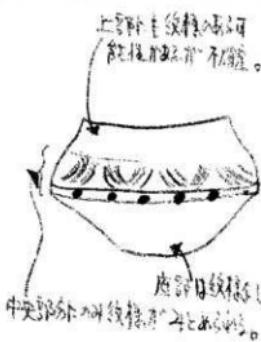
10点に満たない織維土器がある。21・22は有尾式に相当しよう。22は2種類の竹管を用い、背面・腹面を使い分けている。口縁は小波状をなすと見られる。

D 前期後葉 (27~67)

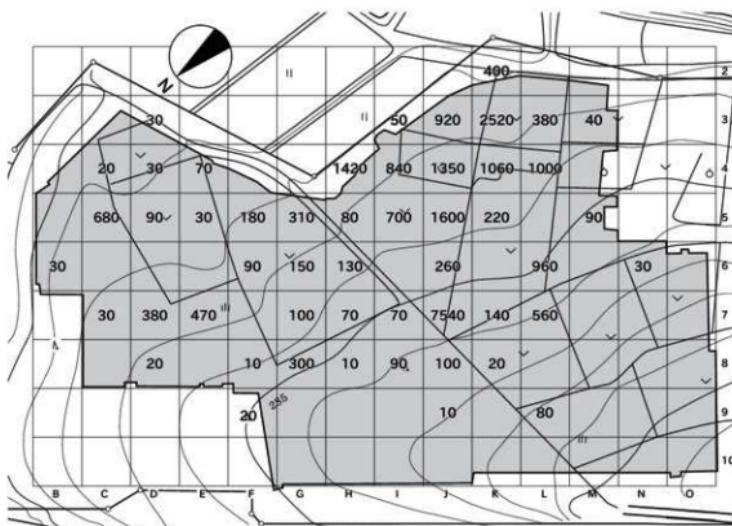
調査区域の北縁・西縁・南縁を除いてほぼ全面で出土している。重量分布の密度は竪穴住居群の配置とほぼ重複し(第15図)、大グリッドの3~7、I~Kの範囲に集中している。ただし、単独に存在する1号竪穴周辺にはめだった分布がない。総重量は26.4kgである。

27~30は諸磯b式の浮線文系である。28は口縁部の屈折が強い、いわゆる「靴先形」の断面を呈するもので、浮線文(貼りつけられた弧線状の粘土帶)に矢羽状の文様を緻密に描く。屈折点から下は文様のない浮線文も使われる。浮線文の土器は群馬県境に近い塩沢町古峰遺跡【細矢・佐藤1990】・湯沢町川久保遺跡【佐藤雅ほか1987】などでやまとまとめた量があるものの、頸城地方では妙高村湯の沢遺跡【室岡ほか1986】・吉川町古町B遺跡【秦ほか1992】に散見できる程度である。

31・32は諸磯c式に比定できる。ともに竹管刺突された棒状の貼付文と指頭背面による器面の押し込みが見られる。33~37は純文地に半截竹管による半隆起線あるいは平行沈線で曲線・直線の文様を描く、いわゆる「大倉崎類型」(飯山市大倉崎遺跡を標準とする)の一群である。新潟県城でも刈羽村刈羽貝塚などで多く見られるもので、諸磯b式に併行するものとされる【寺崎1999】。横引遺跡の6(第7図)は中期と報告されているが、同類であろう。39~47は福浦上層式、あるいは鍋屋町式に相当する。主たるモチーフはC字状の竹管文を施した渦巻き状の集合半隆起線である。ただし、45のみ半隆起線上に条線である。半隆起線で文様を描くものは、小島俊彰が鍋屋町系の第3期と位置づけており、富山県と石川県に発見例が多いという【小島1989】。底部を除く器体のは全体があるにも関わらず、竪穴住居群の分布位置には出土していない。48は



第14図 土器49の文様メモ



第15図 前期後葉土器のグリッド別重量分布

単位:g

指頭押曳き状の凹線が平行して描かれるもので、蜆ヶ森式に類似する。

49は漆の彩文が施された浅鉢である。平成3年3月から同4年1月の間、国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授（平成3年度当時）の永島正春氏に鑑定を依頼し、次のような回答を受けている。「器面はベンガラ（酸化第二鉄）漆で赤色彫りされ、その後に暗褐色系の漆で細い平行線が描かれている。平行線はごく繊細なもので特筆すべきことである。木器の場合は色漆を重ね塗りする場合が多いが、土器の場合は重ね塗りは少なく、当遺物も一回塗りである。」現在、この彩文の大半は失われているので、調査担当者による当時のメモを第14図に掲載する。図版の破片写真は鑑定依頼直前に撮影されたものである。

50～67は縄文地文を主とする深鉢である。この類は報告したほかに平箱4箱程度がある。これらに中期中葉の土器が含まれる可能性もあるが、一般に胎土は前期後葉の土器と共通する。口縁部破片は平縁が多く、ほとんどは小波状をなす。62・63などは大倉崎遺跡B地点1号住居跡〔高橋・中島・金井1976〕の深鉢に形態が近似する。

E 中期・後期 (68～83)

中期の土器は出土範囲がまとまっておらず、調査区域内に散在している。総重量は3,370gである。

前期後葉が土器の大半を占めるにもかかわらず、その直後の前期最終末～中期初頭の土器を欠く。75は中部高地方面の唐草文系土器で、隣接する横引遺跡でも同様なものが出土している（14頁、第7図）。

後期の土器は10数点の破片があるのみである。

F 縄文土器以外の土器・陶磁器 (84～93・137)

古墳時代は前期の土師器片が数点ある。古代は平安期の土師器片十数点と須恵器杯の破片1点がある。

3 石器・土製品

中世の陶器・磁器の出土量はごく少なく、掲載したほかに珠洲焼片7点、青磁片1点がある。珠洲焼と青磁の時期は14世紀前後である。これらは116号溝などが並走す区域にのみ存在し、掘立柱建物との重複はない。137の珠洲焼片は研磨具として転用されているために土製品として扱った。

3 石器・土製品

石器は平箱にして4箱があり、このうち3箱分を図版に掲載している。土器の出土比率から見れば、石器の主体は前期後葉であろうが、AK-aを含むIV層が明瞭でなかったために多くの石器は出土層位であるIII層・V層の分別がなされていない。したがって、前期後葉を主とするIII層の石器構成を抽出することはできない。石器の出土位置は竪穴建物が存在する区域と概ね一致しており、それ以外の区域ではほとんど存在しない。掲載した石器は巻末の一覧表に法量などを記載しているが、若干の説明を加えておく。

磨石類（94～101、102～112）

掲載した17点のほかに1点がある。主に礫の側面を作業面とする磨石と、いわゆる凹石の2つがある。また、前者の磨石には、断面形が三角形あるいは四角形を呈する亜円礫を用いる稜磨石（一般に「特殊磨石」と称されるもの）と偏平精円の円礫を用いるものがある。稜磨石は妙高高原町の中ノ沢遺跡・関川谷内遺跡で、V層相当の上層に多く出土しているが、中期前葉を主とする中郷村和泉A遺跡下層では稜磨石の出土が皆無であり【加藤・荒川1999】、前期後葉には漸次減少したものと推測される。したがって、99・98などの磨石はV層の石器である可能性が高い。103・104は稜磨石の素材の礫であろう。107は摩耗した面はないが、礫の両端を敲打する稜磨石は多くあり磨石類に含める。112は正面・裏面が特に滑らかで、側面はややざらついた感触である。摩耗は水磨など自然の營力によるものではないと判断した。

砥石・石皿・台石（113～117・138）

掲載したほかに摩耗面をもつ5点の砂岩破碎片がある。138は側面にノミ状工具による切削痕があり中世以降のものであろう。

石槍（118・119）・石匙（120）

掲載した2点のほかに基部の破損した石槍1点がある。

磨製石斧（121～129）・打製石斧（130～133）

掲載した9点のほかに、研磨面のある蛇紋岩小破片が2点ある。妙高高原町中ノ沢遺跡・関川谷内遺跡のV層相当層には小型のものしかなく、中・大形で定型化している125～128はIII層の石器であろう。127は整形剥離ではない研磨後の剥離が刃部付近になされており、刃部再生を意図したものと思われる。129は特異な石器であるが磨製石斧に含めておく。刃部には擦痕と稜の摩耗があり打製石斧として使用されているが、基部は鋭角に磨き出し、両側面・正面中間部も磨いている。打製石斧を基部刃部が逆転した磨製石斧あるいはノミ状の石器に転用していると見られる。打製石斧は掲載した4点のみである。131・132は中ノ沢・関川谷内のV層相当層にはない短冊形のもので、III層の石器であろう。

不定形石器（134）

134は2側縁の片面だけに押圧剥離を加えたものである。掲載したほかに2点がある。

石核・剥片（135）

剥片は計57点ある。石材は無斑晶質安山岩・頁岩が多数を占め、チャート・鉄石英・黒曜石・玉髓が少量混じる。黒曜石は1点に過ぎない。2号竪穴では頁岩の小剥片が17点出土しているが、石器製作を窺

わせる碎片はない。石核は無斑晶質安山岩の1点（132）とチャート石材の4点がある。チャートの石核は鶴卵大以下の亜円碌でいずれも裸面をもつ。

石鍤（136）

1点のみ存在する。礫端部を利用した敲打具の可能性もある。

搬入礫

妙高山起源の火碎流・岩屑流に含まれる安山岩礫が平箱にして5箱程度ある。安山岩のほかには砂岩・頁岩・チャートなどが少量見られる。

転用研磨具（137）

珠洲焼壙の破片を転用した研磨具である。

4 錢貨

A 既出報告の整理

15号土坑出土の銭貨については、埋文事業団の『研究紀要』〔戸根・鈴木1995〕（以下、『紀要』）と『中世の出土銭』補遺Ⅰ〔永井編1996〕（以下、『出土銭』）、『出土銭貨』第14号〔戸根2000b〕においてすでに報告がなされているが、内容に多少の混乱があるので整理しておきたい。

まず、前掲文献内に県教委・事業団が混在しているのは、小重遺跡が平成2（1990）年に県教委によって発掘調査がなされ、埋文事業団が設立された平成4（1992）年以降は発掘調査・整理の実質業務が県教委から事業団に移管したためであり、発見から『出土銭』までの間、継続的に銭貨の分類・整理を担当していたのは県教委に在籍していた戸根（現、新潟県立歴史博物館）である。したがって本書の記述も戸根の作業成果をもとにしている。

『紀要』が基礎にしている銭貨の点数は完形銭が28,559、破損銭が427で、総計28,986点である。完形銭のうち、戸根が銭名を分別していたものは28,183点で、戸根が「不明古銭」としていた完形銭376点と「クズ古銭」427点について、平成7年に東京都埋蔵文化財センターの竹尾氏から分別（X線撮影など）に協力いただいている。『紀要』108頁の「表1 小重遺跡出土古銭（竹尾 進氏作成）」にある「サシバラ」列は戸根が分別した完形銭、「不明古銭」列は戸根が分別しえなかった完形銭、「クズ古銭」列はサシ以外の破損銭をそれぞれ意味し、後2者は竹尾氏がX線撮影によって分別したものの点数であるが、『紀要』ではこのことの記述がなく表を理解しない。この混乱を整理するために、第3表では「サシバラ」列と「不明古銭」列の計を「完形銭」と改めて表記し、『紀要』と『出土銭』を再構成した。

銭種およびその数量については『紀要』刊行後に永井久美男氏が実見し、その時点で確認された訂正が『出土銭』に公表されている。『紀要』の完形銭の銭名別数量は、第4表下端の註のように加減すれば『出土銭』と完全に一致している。なお、竹尾氏が「判読不可」とした122点と「摩耗が著しく、銘字の有無を確認できない（銘字有無不明）」とした79点、および一部を判読した39点（第4表末尾部分）の完形銭計240点は、『出土銭』では「判読不能」と一括して扱っている。また、本書では、『紀要』の本文・表中に混在している「判読不可（表1）」「銭名不詳（本文）」「銭名不詳」に、「摩耗が著しく、銘字の有無を確認できないもの（表1）」「無文（表2）」「無文」に統一した。

『紀要』には上記のような説明不足と一部の誤記があるので、表を除いた『紀要』本文を原文どおり転載した上でこれを補足整理しておきたい。なお、転載文中の（註）は本書編者が加えたものである。

以下、『紀要』転載

小重遺跡出土の備蓄銭について

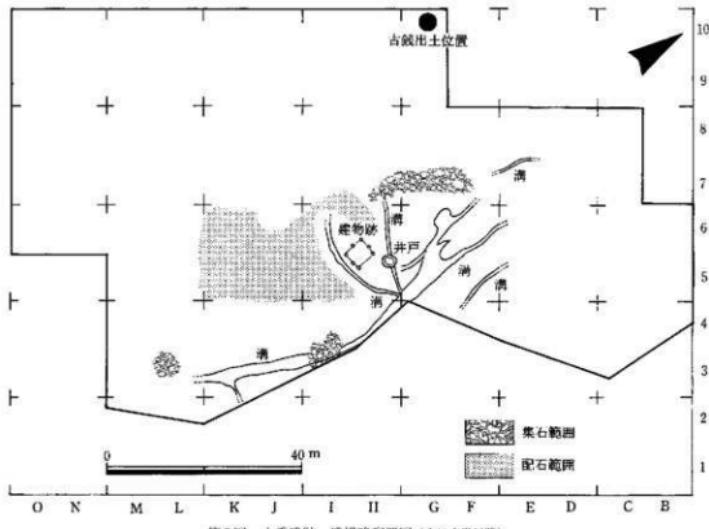
戸根与八郎・鈴木俊成

1 はじめに

出土銭貨の研究は郷土史の解明につながるばかりでなく、当時の広域的な経済活動及び埋納の状態から推測される民俗学的思考・行動を解明する上で貴重な資料を提供してくれる。しかしながら、出土銭貨の多くは工事等により偶然発見される場合が多く、出土状態から古銭埋納の様子までを記録にとどめるものは少ない。このようにして出土したものは、貴重な資料であるにもかかわらず情報量が極めて少ないとえよう。

本誌で紹介する小重遺跡の備蓄銭は、遺跡の発掘調査により出土したもので、出土から取り上げまで記録化され、その後の基礎整理においても、さし単位の数量・銭貨名を一覧化することができた。ここに基礎データを広く公開し、研究の早期進展をはかるため、本報告の前に本誌をかりて速報としたい。なお、基礎データの集計は主に平成2年に行っている。

報告するにあたって慶應大学の鈴木公雄先生、東京都埋蔵文化財センターの竹尾 進氏から貴重なご教示をいただいた。特に竹尾氏からは銭貨の判読について御協力並びに御指導いただき、その成果の一部を掲載させていただいた。記して感謝申し上げる。



第2図 小重遺跡 遺構略配置図（主に中世以降）

2 遺跡の概要と備蓄銭の出土状況^(註1)

遺跡は長野県との県境に近い中頭城郡中郷村大字市屋字横引に所在する。遺跡周辺は南西に位置する妙高山の火砕流により、起伏のある緩斜面を成す。遺跡の標高は約280mで南に大きく傾斜し、東に流れる小河川に区切られ、舌状の地形をなしている。

調査は上新バイパス建設^(註2)に伴い平成元年・2年の2か年にわたり実施され、約11,200m²を調査した。遺跡の時期は縄文時代前期と中近世に大きく2分されるが、ここでは古鉢を中心とした中近世に絞り、その概要を説明する。

調査区のほぼ中央には、掘立柱建物1棟と井戸・溝が発見され、その北西には集石墓群^(註3)と考えられる該期の遺構が検出された(第2図)。遺物は散発的であるが、珠洲焼片・青磁片等が出土している。これらの遺構と備蓄銭の関係は本格的な整理を待たなければ明らかにはならないが、時期的には極めて近い関係にあるものと考えられる^(註4)。

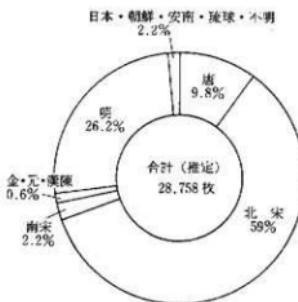
備蓄銭の出土位置は前記した遺構群の中心から約40mの距離を隔てている。周辺には関連する遺構ではなく、備蓄銭は砂利混じりの火砕流^(註5)を掘り込んだ穴に埋められた曲物(長径36.3cm・短径32.2cm・深さ37.3cmの楕円形曲物)に納められていた。曲物は桿皮結合で側板の結合部分には漆が部分的に残り、接着剤として用いられたと考えられる。蓋は発見できなかったが、内容物の遺存状態は良好で曲物を密閉した可能性が高い。また、曲物の材は杉と考えられる。銭貨はさしに通された状態で出土したものが多く、サシに用いた軽くよった藁も生きしい。銭貨の埋納状態は曲物底部付近にバラの銭貨が湿気防止のためと考えられる多量の粉殼と混合され、その上位にサシに通された銭貨が曲物の口まで埋納されていた。また、銭貨自体の腐食は少なく銭名が容易に判読できるもの多かった。

3 まとめ

本遺跡出土の銭貨はすべて銅銭で、表1に示すとおり86種以上(無文を含む)、28,758枚以上を数える。この分類は銭貨名のみによる分類で、書体及び後鑄・私鑄などの分類を行えばさらに種類は多くなる。銭名不詳としたものは、銭面が磨滅しているために銭名が判読できないものである。また、無文としたものは打ちヒラメの鋏錢や方孔四方にタガネ状のもので切り込み傷をつけた「星形孔銭」も混入しているが、その数量・銭種については未整理である。

銭貨の比率を鑄造国別に見ると、北宋銭が最も多く、26種16,932枚で全体の59%を占めている。次は、絶対量は少ないが明銭で5種7,546枚で26.2%、唐銭が2種2,817枚で9.8%、南宋銭19種638枚で2.2%の比率を示している。このほかに比率では極めて小さい値を示すが、日本銭2種3枚、安南銭2種2枚、琉球銭2種20枚、朝鮮銭1種261枚など^(註6)、中国以外で鋳造された銭貨も含まれる。

銭名別で見た場合、唐の開元通宝が9.3%、北宋の熙寧元宝が7.1%、元祐通宝が7.2%・元祐通宝が6%、明の洪武通宝が11.8%、永樂通宝が12.5%で、全体に占める比率も大きい。唐の開元通宝が9.3%が多いのは、中国におい



第7図 銭貨の比率(鑄造国別)

て産出した銅銭の絶対量の多寡に影響を受けた結果と考えられる。また、永楽通宝と洪武通宝の流通については、永楽通宝が東国に、洪武通宝が西日本・九州にとりわけ流通する傾向があると言われているが、永楽通宝と洪武通宝の出土比率が近似している点は注目に値するものと思われる。

サシの状態で発見された枚数は12,765枚^(註7)で、総枚数の44.7%である。総計121連確認されたが、90から100枚の範疇にはいるものは41連で、全体の34%を占め、100枚一サシのものは1連1例のみである。このうち97枚一サシのものは18連あり、サシ全体から見ると、97枚一サシのものは約15%を占めるに過ぎない。調査時の取り扱いの不慣れ、ないしは一サシの結び目の欠失等から枚数の多寡があるのであろう。しかし、一サシの枚数がすべて同数であるという類例は、国内では現在知られていない。このため一サシの枚数に多寡があってもよいものと思われるが、あまりにも枚数に差があるのは調査時の取り扱い不慣れに起因するものであろう。

一サシの中で使用されている銭種は、限定されておらず混在している。また、サシのものとバラになっていたものとの銭種の比は76：75で大差がない。両者での銭種もほぼ同じものが多いが、枚数に差がある。バラにあってサシにないものは海東通宝・紹熙通宝^(註8)・大宋元宝・至正通宝・大義通宝・宣和通宝・万国通宝^(註9)・熙寧重宝・宋聖開宝^(註10)の9種が、逆にサシにあってバラにないものは富寿神宝・天漢元宝・天聖通宝^(註11)・紹興通宝・開慶通宝・咸元通宝^(註12)・紹平通宝^(註13)・弘治通宝・紹平寧宝^(註14)・天盛元宝・太平興寶・大治通宝・治聖元宝^(註15)の13種あるがいずれも枚数は少ない。

出土した銭貨の上限はバラおよびサシであっても唐の開元通宝（初鑄年1488年）^(註16)である。下限はバラで琉球の世高通宝（初鑄年1461年）、サシでは明の弘治通宝（初鑄年1488年）である。弘治通宝は明の孝宗^(註17)の代（1488～1503年）に鋳造されている。埋納容器内の銭の納置状況から時期差があるのかも知れないが、ここでは同時期のものと考えておきたい。とすれば本資料は鈴木公雄氏の分類によると、8期に該当し、16世紀の第3四半期の備蓄銭である。今後、周辺の環境を総合的に調査しより良い結論を出して行きたい。

引用参考 文献

出土銭貨研究会 1993『出土銭貨 一創刊準備号ー』

山本幸俊 1991『上新バイパス 小重遺跡発掘調査の概要』（業務報告）

新潟県教育庁 文化行政課

鈴木公雄 1992『出土銭貨と中世後期の銭貨流通』『史学第61卷第3・4号』

網野善彦・石井 進・福田豊彦 1990『沈黙の中世』平凡社

以上、『紀要』転載

（註1） この時点では、新潟県教育庁文化行政課の事務文書である業務報告をもとに記述がなされている。

（註2） 小重遺跡はバイパス区間にはない。「国道18号改築工事」である。

（註3） 第2図中で「配石範囲」として示されるものは岩屑堆積物中の礫、あるいはそれが人為的に移動されたものである。搬入された川原石等もごくわずかに含まれるというが礫の明確な集中ではなく、配石とは判断しない。

（註4） 第III章4節で記載しているとおり、溝や井戸などの遺構が掘立柱建物と近接した時期にあるとは考へていない。掘立柱建物の規模・位置も本書とは異なる。

（註5） 矢代川岩屑なだれ堆積物である。

(註6) 第4表の註にしたがって銭名を訂正すれば、以下のようになる。なお、数量はクズ古銭を含めた枚数である。「北宋銭31種16,931枚、明銭5種7,548枚、南宋銭19種、640枚、安南銭3種3枚」

(註7) 『紀要』表2の点数を総計すると、12,761となる。加算の誤りであろう。

(註8) 『紀要』刊行後に訂正され、存在しない銭貨。第4表の註参照。

(註9) 『紀要』刊行後に訂正され、存在しない銭貨。第4表の註参照。

(註10) 『紀要』刊行後に訂正され、存在しない銭貨。第4表の註参照。

(註11) 『紀要』刊行後に訂正され、存在しない銭貨。第4表の註参照。

(註12) 『紀要』刊行後に訂正され、存在しない銭貨。第4表の註参照。

(註13) 『紀要』刊行後に訂正され、存在しない銭貨。第4表の註参照。

(註14) 『紀要』の表には出現しない銭貨。いずれかの銭貨を誤ったものか。

(註15) 『紀要』の表には出現しない銭貨。いずれかの銭貨を誤ったものか。

註7から註15を訂正すると、「バラにあってサシにないものは海東通宝・大宋元宝・至正通宝・大義通宝・宣和元宝・熙寧重宝の6種が、逆にサシにあってバラにないものは富寿神宝・天漢元宝・紹興通宝・開慶通宝・弘治通宝・天盛元宝・大平興宝・大治通宝の8種ある」となる。ただし、折二銭を区分しない場合である。

(註16) 621年の誤り。

(註17) 孝宗の誤り。

B 銭名別の数量

破損銭427点については、竹尾氏が133の銭名を分別されているが、すべての銭貨に共通する「宝」を有するものが199点あるため、破損銭は最低でも199点の個体があると理解できる。したがって、15号土坑に存在する銭貨の枚数は最低で28,758点（完形銭28,559 + 199）、すべての破損銭を別個体と仮定すれば28,986点（完形銭28,559 + 427）点となる。銭貨の概要については転載した『紀要』がすでに報告しているとおりであり、本書が加えた註を考慮されれば十分であるが、銭貨別の点数は本書が再構成した第2表～第5表を最終的なデータとする。

完形銭（サシ剥離作業中に破損したものを含む）の銭種別数量は、『出土銭』の記載事項に拠りつつ、破損銭も加えて第2表に整理した。変更点は宋通元宝としていた1点（369）をあらたに島銭に変更したこと、また、『出土銭』にはなかった政和通宝・宣和通宝・建炎通宝・紹興元宝・咸淳元宝の折二銭、乾元重宝の当五十銭を小平銭と区別したことである。

サシを構成していた銭貨の総計は12,761点である。各サシの銭貨別数量については、保管の現状と『紀要』表2の統計とに若干の齟齬があるが、それは『紀要』の誤記ではなく、収納時の混乱によるものと考えた。第5表は『紀要』表2の加算の誤りを訂正し、『紀要』刊行後の銭種改訂を反映させて再構成したものである。なお、上述した折二銭・当五十銭のあらたな分別は、『紀要』との混乱をさけるため第5表の一覧に反映させていないが、それらの所在は以下のとおりである。

乾元重宝当五十銭 1点のみ。バラに含まれる。

熙寧重宝折二銭 1点のみ。バラに含まれる。

政和通宝折二銭 2点があり、いずれもバラに含まれる。

宣和通宝折二銭 12点がある。サシの折二銭は12③・25・32・33・40・68に各1点存在する。

建炎通宝折二銭 2点があり、いずれもバラに含まれる。

紹興元宝折二銭 1点のみで、バラに含まれる。

紹興通宝折二銭 1点のみで、サシ63に含まれる。

咸淳元宝折二銭 7点の折二銭がある。サシの折二銭は3・12①・73・81・117に各1点存在する。

完形銭におけるサシとバラの比率は44：55であるので、サシを構成する銭貨に作為が働かなければ、絶対量が少ない銭貨を除いてバラの方が多いのが自然である。第3表ではこの傾向が正しく反映されているが、太平通宝のみがサシ87点、バラ38点と逆転している。ただ太平通宝がサシに多用される銭貨であるかというと、これを用いているサシは全124サシ中59であり積極的に肯定できない。

C 錢貨各説

本書では『出土銭』が収録した拓影の大半を再録しつつ、存在するすべての銭種を掲載した。ただし、天福鎮宝についてはX線分析でかろうじて判読できた不鮮明なものであるため掲載せず、『出土銭』が75頁に「本邦模鋳銭」として掲載している淳熙元宝1点と永楽通宝1点も掲載していない。また、模鋳銭・正規銭の識別は困難であるため、本書ではそれらを分別して掲載してはいない。拓影は、書体の相違、銭径の違い、微妙な字体の変化、裏面の文字・文様などを考慮して掲載しており、拓影および写真の縮尺は、折二銭と小平銭の分別、正規銭と模鋳銭の分別、字体の詳細な観察を考慮して原寸大とした。また、銭貨裏面は、文字記号はもとより、表面の拓影からは分からぬ外輪の有無、方孔のズレなど模鋳銭に関わる多くの情報をもっているので、文字記号の有無にかかわらず全点に裏面の拓影を添えた。以下、特筆されるもののみ若干の説明を加えるが、掲載した銭貨の詳細は巻末の一覧表を参照されたい。なお、銭の計測を厚さのみに限り基本的に省略したことは、写真・拓影の原寸提示と引き替えることとして、ご容赦願いたい。

『出土銭』は、紹興通宝折二銭（262）と背面に「桂一」銘をもつ大中通宝（337）を特筆すべき銭種とし、20点の検出をみた琉球銭も貴重な出土例と記述している。このほかに乾元重宝の当五十銭（143）も出土例の少ないものであろう。しかし、これは径が小さく、裏面の重輪も明瞭ではない。おそらく鉄写しで小型になった私鋳銭であろう。

皇朝十二銭（365～367）

神功開宝と富寿神宝の2種が含まれる。皇朝十二銭は新潟県城で小重遺跡出土分を含めて200点が出土しており、このうち53点が現存している〔戸根2000〕。中世の埋納銭に皇朝十二銭が含まれていた例は、湯沢町石臼の伝・泉福寺遺跡〔池田・佐藤1976〕・長岡市下道遺跡〔駒形1996〕にもある。なお、古代の埋納銭には、和同開珎が150枚ほど須恵器の短頭壺に入って出土した南蒲原郡田上町の若荷谷遺跡例、掘立柱建物柱穴推定部から20枚がまとまって出土した新潟市西堀遺跡の例がある。

鳥銭（368～370）

鳥銭とは古銭収集界の通称で、「出所素性がはつきりしない怪しげな物」であるが〔永井1994〕、3点が認められる。いずれも地金の薄さが顕著である。370は太平通宝を模したもので、銘字が不明瞭で粗雑である。裏面の外縁も円が不整に歪んでいる。太平通宝は「太平」が吉祥符であるために比較的多く検出されるという〔永井1996〕。368は宋聖開宝と読めるが存在しない銭種である。書体もタガネで打ったような直線的なものである。369は宋淳元宝を模しているが、「宋」のウカムリの下が「未」となっており、その3角目が右方向にハネられている点や書体のくずれから鳥銭とすべきものであろう。

無文銭（371～374）

『紀要』表1で「摩耗が著しく、銘字の有無を確認できないもの」と分類されている79点を、本書では無文銭としておく。銭名不詳としたものとの分別は微妙であるが、銭名不詳の銭貨ははじて径が大きく厚みがある。『紀要』表2では、サシの銭貨数に「銭名不詳」と区別して「無文」が39点あるので、バラ銭貨に含まれていた無文銭は40点となる。

これら無文銭には、鋤写しの模鋤銭で判読不能のもの、無文を意図して鑄造された狹義の無文銭の2者が含まれると思われる。しかし、前者と判断されるものは6点と判断する。ただ、無文銭が、渡来銭の鋤写しを繰り返すことによって収縮、無文化したもの〔永井1994〕とすれば、模鋤銭と無文銭は厳密に区分しうるものではない。図版では後者の無文銭のうち、径が小さく薄いものを掲載した。374は最小規模の無文銭で径20.8mm、厚さ0.6mmを測る。縁辺には「湯道バリ」とみられる突起が残る。後者の無文銭は多くに「湯道バリ」や枝鉢から切り離した際のカケが見られ、径20.1～23.4mm、厚さ0.6～1.0mmを測る。なお、無文銭のうち8点は鶴谷和彦氏から蛍光X線分析・中性子放射化分析をしたいとの依頼があり、竹尾氏分析番号の1・2・5・6・8～11を平成9年10月から11年6月に貸与した。このうち1点は銭貨の1/6程度を切り取って中性子放射化分析がなされた。

模鋤銭

銭名不詳の完形銭124点（『紀要』では「判読不可」と、竹尾氏がX線分析によって銭名を決定した完形銭は、その多くが模鋤銭である可能性が高い。ただし、これらについては摩耗や錆着・腐食による判読困難として考慮の外に置いていたと、竹尾氏分析資料が永らく別箱に収納されていたため、報告書作業の終盤までこのような認識に至らなかった。また、銭名の明らかな銭貨の中には、裏面の外輪が不鮮明なもの、薄さが際立っているもの、方孔の向きが正裏異なるものなど、模鋤銭と疑われるものが存在するが、文字の明瞭さという点については、錆着分離の結果文字が損なわれたもの、腐食が進行したもの、流通によって摩耗したものが含まれるため、模鋤銭との区別は微妙である。このため、埋納銭の今日的課題となっている模鋤銭・無文銭については十分な検討をなし得なかつたが、別表3には正規銭と模鋤銭を区別する一要素である銭貨の厚さを掲載しているのでこれを参照されたい。なお、『出土銭』には淳熙元宝・永樂通宝各1点の拓影が模鋤銭として掲載されている。

5 草・木製品

15号土坑の銭貨をサシで結束していた繩はすべてワラ繩で、42本のサシに径5mm程度の繩が残存していた（表5参照）。繩の燃りはすべてしてある。また、サシの末端は写真記録を見る限り、単純な一重結びである。曲物内に銭貨と混合していた粉殻は一握りほどが採集されている。このような粉殻の使用例は新井市高柳字前田出土銭〔高橋1986〕、吉田町米輪津出土銭貨にもあり、後者では「温氣を防止し、銭貨の錆着を防ぐため」と考えられている〔吉田町2000〕。本土坑の粉殻が曲物の内部全体に存在することからすれば、錆着防止と、収納状態を安定させる緩衝剤・充填材とも思われる。埋納銭に見られる粉殻については、戸根の考察がある〔戸根2000b〕。

銭貨を収納していた曲物（375）は上半部のみが二重構造になっているが、調査当時すでに全周の半分程度が腐朽していた。板目材の底板は楕円形で、2001年9月現在、長径35.5cm、短径31.5cmを測る（『紀要』の記載にある「長径36.3cm・短径32.2cm・深さ37.3cm」は当時の外形の法量であろうか）。ま

た、底板の厚さを減じた内面の器高は最大で35.0cmである。したがって、容量は約31リットルである（長径1/2×短径1/2×π×高さ）。図は発掘調査年の1990年に作成されたもので、側板の開口部は正円に近い梢円形である。保存処理されていないので、底板は材の経年取縮があると思われる。なお、『出土鉢』159頁に記載されている曲物の数値は『紀要』とも多少異なっている。スギと見られる側板は板目材で、材を曲げるためのケビキは、内面では整然とした縦方向であるが、外面は斜格子を散在させている。

第2表 15号土坑出土銭貨 銭別点数

No.	銭貨名	国・王朝	年號年	形別銭	被割銭	合	比
1	開元通宝	唐	621	2,661	26	2,687	0.99270
2	乾元重宝	唐	758	129	129	0.00445	
3	乾元重宝当五十	唐	758	1	1	0.00003	
4	大漢元通宝	前 葉	917	3	3	0.00010	
5	乾德通宝	前 葉	918	2	2	0.00007	
6	咸淳元宝	前 葉	919	4	4	0.00014	
7	周通宝	後 周	955	8	8	0.00028	
8	唐國通宝	南 唐	959	22	22	0.00076	
9	宋通宝	北 宋	960	63	63	0.00217	
10	太祖通宝	北 宋	976	125	1	126	0.00435
11	淳化元宝	北 宋	990	139	1	140	0.00483
12	至道通宝	北 宋	995	252	2	253	0.00899
13	咸平元宝	北 宋	998	330	1	331	0.01142
14	景德通宝	宋	1004	406	1	407	0.01040
15	祥符元宝	北 宋	1009	504	1	505	0.01742
16	祥符元宝	北 宋	1009	329	1	330	0.01138
17	天禧通宝	北 宋	1013	379	1	380	0.01511
18	大观通宝	大观	1023	568	5	913	0.03150
19	明道通宝	宋	1023	86	86	0.00997	
20	景祐通宝	北 宋	1034	282	2	283	0.00973
21	皇宋通宝	宋	1038	2,366	31	2,397	0.02870
22	太平通宝	北 宋	1054	209	2	209	0.00721
23	祐聖通宝	北 宋	1054	49	1	50	0.00172
24	嘉祐通宝	北 宋	1056	230	1	231	0.00797
25	嘉祐通宝	北 宋	1056	429	2	431	0.01487
26	治平元宝	北 宋	1064	384	1	385	0.01328
27	治平通宝	北 宋	1064	62	62	0.00214	
28	熙寧通宝	北 宋	1068	2,055	1	2,056	0.07093
29	熙寧重宝	北 宋	1071	1	1	0.00003	
30	元豐通宝	北 宋	1078	2,061	12	2,073	0.07152
31	元祐通宝	宋	1086	1,712	10	1,722	0.05941
32	紹聖重宝	北 宋	1094	703	8	801	0.02763
33	紹聖重宝	北 宋	1094	2	2	0.00007	
34	元符通宝	北 宋	1098	259	1	260	0.00897
35	聖宋元宝	北 宋	1101	773	14	787	0.02715
36	大觀通宝	北 宋	1107	484	1	484	0.01670
37	政和通宝	宋	1111	1,024	2	1,026	0.03540
38	宣和通宝	宋	1111	2	2	0.00007	
39	宣和通宝	北 宋	1112	1	1	0.00003	
40	哲宗通宝	宋	1113	1	1	0.00003	
41	徽宗通宝	宋	1127	12	13	0.00041	
42	紹興通宝	宋	1127	2	3	0.00007	
43	紹興通宝	宋	1130	10	10	0.00034	
44	紹興通宝	宋	1131	1	1	0.00003	
45	紹興通宝	宋	1131	1	1	0.00003	
46	淳熙通宝	宋	1174	92	1	93	0.00321
47	紹熙通宝	宋	1190	54	1	54	0.0186
48	慶元通宝	宋	1195	36	36	0.00124	
49	嘉泰通宝	宋	1201	31	31	0.00107	
50	開禧通宝	宋	1205	12	1	13	0.00045
51	嘉定通宝	宋	1208	91	2	93	0.00321
52	宋	1225	3	3	0.00010		
53	紹定通宝	宋	1228	50	50	0.00172	
54	端平通宝	宋	1234	14	14	0.00048	
55	嘉熙通宝	宋	1237	8	8	0.00028	
56	淳祐通宝	宋	1241	61	61	0.02010	
57	皇宋通宝	宋	1253	33	1	34	0.00117
58	開寶通宝	宋	1259	1	1	0.00003	
59	太平通宝	宋	1265	59	59	0.00204	
60	大中通宝	宋	1265	7	7	0.00024	
61	大中通宝	宋	1270	2	2	0.00007	
62	嘉祐通宝	宋	1277	93	93	0.00321	
63	紹聖通宝	宋	1278	50	50	0.00172	
64	元祐通宝	宋	1284	14	14	0.00048	
65	元祐通宝	宋	1284	6	6	0.00021	
66	元祐通宝	宋	1285	1	1	0.00003	
67	紹聖通宝	宋	1285	1	1	0.00003	
68	崇寧通宝	宋	1295	59	59	0.00204	
69	崇寧通宝	宋	1295	6	6	0.00020	
70	紹聖通宝	宋	1295	2	2	0.00007	
71	崇寧通宝	宋	1295	1	1	0.00003	
72	紹聖通宝	宋	1295	1	1	0.00003	
73	人平通宝	宋	1350	13	13	0.00045	
74	天禧通宝	宋	1359	2	2	0.00007	
75	大中通宝	宋	1360	1	1	0.00003	
76	人中通宝	宋	1361	52	52	0.020179	
77	洪武通宝	明	1368	3,293	2	3,295	0.11713
78	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
79	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
80	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
81	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
82	金	1448	50	50	0.00172		
83	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
84	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
85	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
86	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
87	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
88	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
89	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
90	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
91	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
92	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
93	金	1448	50	50	0.00172		
94	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
95	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
96	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
97	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
98	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
99	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
100	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
101	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
102	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
103	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
104	金	1448	50	50	0.00172		
105	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
106	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
107	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
108	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
109	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
110	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
111	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
112	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
113	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
114	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
115	金	1448	50	50	0.00172		
116	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
117	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
118	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
119	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
120	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
121	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
122	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
123	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
124	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
125	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
126	金	1448	50	50	0.00172		
127	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
128	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
129	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
130	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
131	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
132	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
133	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
134	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
135	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
136	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
137	金	1448	50	50	0.00172		
138	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
139	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
140	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
141	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
142	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
143	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
144	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
145	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
146	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
147	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
148	金	1448	50	50	0.00172		
149	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
150	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
151	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
152	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
153	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
154	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
155	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
156	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
157	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
158	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
159	金	1448	50	50	0.00172		
160	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
161	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
162	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
163	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
164	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
165	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
166	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
167	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
168	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
169	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
170	金	1448	50	50	0.00172		
171	大中通宝	元	1310	19	19	0.00066	
172	大中通宝	元	1350	13	13	0.00045	
173	大中通宝	元	1359	2	2	0.00007	
174	大中通宝	元	1360	1	1	0.00003	
175	大中通宝	元	1361	52	52	0.020179	
176	大中通宝	元	1368	3,293	2	3,295	0.11713
177	永樂通宝	明	1408	3,587	3	3,590	0.12385
178	宣德通宝	明	1403	509	509	0.01576	
179	弘治通宝	明	1448	2	2	0.00007	
180	嘉靖通宝	明	1448	2	2	0.00007	
181	金	1448	50	50	0.00172		

第5-1表 15号土坑出土銭貨 各サシの銭名別点数 (1)

第5-2表 15号土坑出土銭貨 各サシの銀名別点数(2)

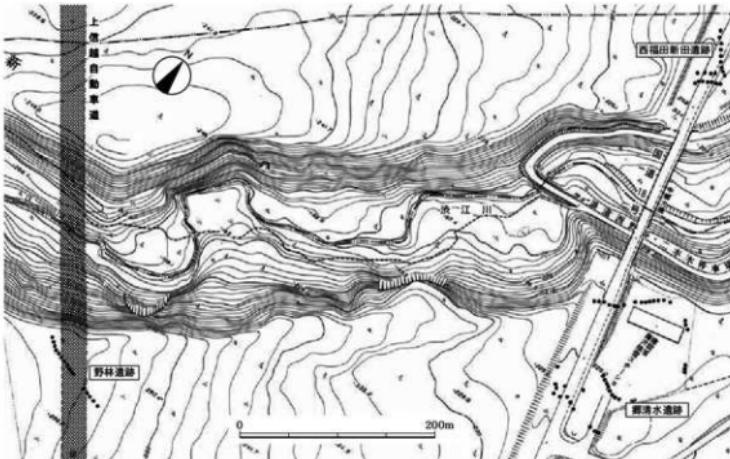
銀 名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116

第VI章 ま　と　め

1 妙高山麓の陥し穴土坑について

新井市街地より南方の妙高山麓では、国道18号・上信越自動車道に関わる近年の調査で陥し穴土坑の検出例が大幅に増加している。これらを列挙すれば、妙高高原町大塚遺跡13基〔立木・寺崎ほか1996〕・同町中ノ沢遺跡16基〔立木・寺崎ほか1997〕、和泉A遺跡2基〔加藤・荒川1999〕、中郷村小重遺跡24基〔本書〕、同村大重沢B遺跡2基〔(財)新潟県埋文事業団1993〕、同村中の原B・C遺跡9基〔(財)新潟県埋文事業団1993〕、同村野林遺跡16基〔飯坂ほか2000〕、同村郷清水遺跡42基〔立木1999〕、同村西福田新田遺跡20基〔立木1999〕、新井市萩清水遺跡157基〔新井市教委2000・立木1997b〕、同市三本木新田B遺跡1基〔立木1997b〕、同市ハッ塚遺跡1基〔小野・古川ほか1982〕の計303基である。頸城平野周辺を含めれば、上越市下馬場遺跡15基〔小池1998〕、同市黒田古墳群6基〔田海1998〕、同市大塚遺跡8基〔山田1996〕、同市蛇谷遺跡9基〔星1997〕、板倉町峯山B遺跡114基〔秦・岡本ほか1986〕が存在している。

陥し穴土坑の形態については、岩原I遺跡の分類〔佐藤ほか1990〕を用いて整理しておく。主体となる形態は、長方形あるいは不整の長楕円形で底面が平坦となるD類型であり、小重遺跡の24基もこの形態である。D類型以外の形態をあげれば、大塚にA類型(円錐台形)13基、野林遺跡にB類型(フラスコ状の円筒形)16基、萩清水遺跡にF類型(溝状)1基とC類型(円筒形)15基前後、下馬場遺跡にC類型5基、大塚遺跡にA類型8基、蛇谷遺跡にF類型9基、峯山B遺跡にF類73基がある。平面が梢円で円錐台形状を呈する中ノ沢の6基(報文ではII類)は、合致する類型を欠くがD類型に近いもの(以下、亜D類型)である。これらのうち、層位的な関係が明らかなものは、田口岩屑なれ堆積物に覆われた大塚遺



第16図 野林遺跡・郷清水遺跡・西福田新田遺跡の陥し穴土坑配置

(中郷村役場作成 中郷村6・7 1:2,500)

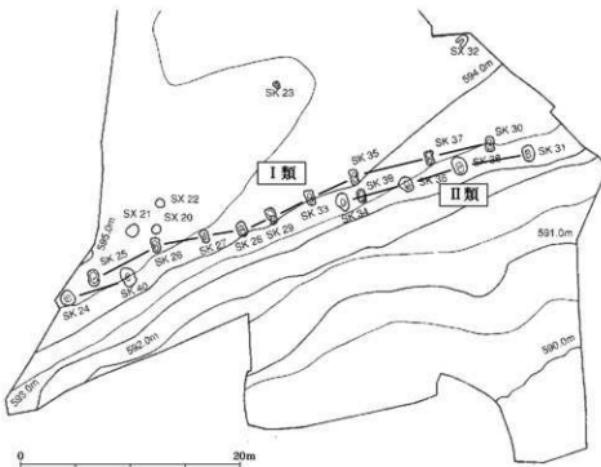
跡のA類13基、赤倉火砕流堆積物より古く田口岩屑なだれ堆積物より新しい中ノ沢遺跡のD類型および亜D類型の16基¹⁾、堆積物との関係からすれば、前者は早期の押型文土器以前、後者は表裏縄文・押型文土器以降、有尾式以前の時期を与えられる。また、峯山B遺跡では、F類1基が前期末葉から中期初頭の竪穴の炉跡の下部に存在していることが明らかである²⁾。小重遺跡の24基については、土坑中の火山灰層が赤倉火砕流と同時期の赤倉火山灰の可能性があると推測するが、分析の機会を逸しており明確にできなかった。これら以外の土坑については、土器が欠落する時期に構築を推測するなど、各遺跡での出土遺物から総合的に時期を推測するほかないが、A類型は早期の遺跡と、D類型は主に前期の遺跡と、F類型は中期の遺跡と関係を見ることができ、頸城平野周辺でも岩原I遺跡における分析と同様に概ねアルファベット順の変遷があるものと考えられる。

妙高山麓では、妙高火山に由来する堆積物が広大な緩斜面を形成しているために地形的な変化に乏しく、土坑の配列と地形について明瞭な関係を見るこはできない。多数が検出されている郷清水遺跡・西福田新田遺跡でも等高線と土坑の配列との関係に一定の規則性は存在しない。ただ、両遺跡には渋江川の崖際に沿って並ぶ列があり（第16図）、中ノ沢遺跡でも土坑が沢の肩に連続して配置されることを見ると、緩斜面が河川によって断ち切られるその縁辺に偏在する傾向はあろう。小重遺跡も片貝川に面した位置にある（第6図）。

さて、D類型のみで構成される柏崎市呑作G遺跡の陥し穴土坑は、覆土の観察からきわめて具体的な陥穴狐の記述がなされている〔品田1997〕。ここでは、覆土下層部における黒色土層と地山再堆積土層の明瞭な交互堆積を、天井を覆い隠した土砂の崩落が要因であると考え、2つの層1組が陥穴の機能した回数、あるいは天井を覆う仕掛けの数に相当すると推測している。また、互層をなさない上層部の埋土は自然堆積土としている。呑作G遺跡と同様な互層の堆積は岩原I遺跡にも見られることであるが、妙高山麓の遺跡ではないものであり、この現象の差異について若干言及しておきたい。

妙高山麓の遺跡の地山（発掘限界の地層）は、野林遺跡以北の北部地域と上中島遺跡以南の南部地域（位置については第2回参照）に大きく区分できる。北部地域はローム質の粘質土で³⁾、南部地域の地山は関川・田口・矢代川の各岩屑なだれ堆積物である。田口・矢代川の両岩屑なだれ堆積物は、亜角礫を多く混在させている特に堅固なものであるが、大堀遺跡がのある関川岩屑なだれ堆積物の上面は礫の混在が少ないローム質土である。大堀遺跡をのぞく南部地域の遺跡では、土坑内にまとまった地山土は認められず、基本的に黒色土のみが堆積しており、「埋土は基本的に黒色土で、黄褐色等の混入は全くない」という中の原B・C遺跡の例〔(財)新潟県埋文事業団1993〕がその典型である。呑作G遺跡の仮説を適用すれば、これらは天井を覆う仕掛けに掘削土ではなく、敢えて黒色土を用いたということになろう。しかし、陥し穴という覗が度々機能する過程で、土坑の深度が減少し擂鉢化するのをよしとして、構築当初の設計を復元することなく使用を続けるという、呑作G遺跡の推考を敷衍することは困難である。埋土の堆積とともに土坑に与えられる意図が変化する、あるいは深度の減少を予め考慮して土坑が掘削されるということであろうか。

埋土を除去せず継続的に使用する呑作G遺跡の仮説は、土坑下層部土の自然堆積を否定した上に成り立っているが、一定の意図に基づいて設計された構築物が、当初の段階のみその意図に従うというのには難しい解釈である。少なくとも山麓南部では、多大な労働力が投下された土坑を埋没するに任せて利用するということは発想しえず、土坑は利用が継続している期間（断続的なものであろうが）は埋土を除去する等の保守管理がなされ、放棄された時点から埋土の自然堆積が始まるものと考える。また、山麓南部のD



第17図 中ノ沢遺跡の陥し穴土坑

【立木・寺崎a=1997を一部改変】

類型には、上部と底面に大きな形状差のあるものが存在しないので、呑作G遺跡を含めて形状差があるものは、構造的に弱い長辺側の上縁部が崩壊した可能性が高いと考える。山麓北部の遺跡に地山土の堆積がある程度見られるのは、単に地山土が山麓南部ほど堅固でないことに因るのであろう。呑作G遺跡に見られる上層部「自然堆積」・下層部「人為堆積」の区分については、以上のように疑問を呈しておきたい。

中ノ沢遺跡の土坑群は、上述の保守管理という問題に関係して、興味深い例である。土坑群の形成について報文は、D類型（報文のI類）が構築される時には、以前に掘削された亜D（報文のII類）類型が「手を加えず使用できる状態」にあり（埋没しきていなかった）の表現も並存）、両者が補完して等間隔で陥穴が並ぶようにD類型が配置されたと推定している〔立木1997a〕。「手を加えず」の表現は亞D類型を古いと仮定し、それらに掘り返しの痕跡が観察されなかつたことによるが、両者の新旧関係とタイムラグを認めるとすれば、既存の土坑「跡」をそのまま利用したのではなく、利用するに際して埋土を除去する、形状を一部改変する等の「再生」行為がなされたと解釈することも可能であろう。

2 縄文時代前期の集落と土器について

竪穴住居は9基を認識したが、これらに関わる資料はあまりに少ない。出土遺物があるのは、わずかに底面付近の覆土を調査できた2号・4号竪穴のみである。これは赤倉火碎流より上位で掘り込まれたであろう竪穴が判別困難な黒色土層にあったためで、厚い黒色土中に火碎流堆積物や明瞭な火山灰層がない地点では避けられないことである。

環状に配置される8基の竪穴群は、前期後葉土器の分布から見て諸磕b式前後の時期を与えられる。諸磕c式土器は隣接する横引遺跡を含めても出土量は僅かで、また、鍋屋町式土器（あるいは福浦上層土器）は7号竪穴南方の3・4-K・Lのグリッドのみに偏在しているので、諸磕c式土器・鍋屋町式土器

3 15号土坑の埋納銭について

は竪穴群とは基本的に関係しないものと考える。新潟県域の前期後葉の竪穴は、塩沢町万條寺林遺跡に2または3基〔池田・荒木ほか1988〕、中里村鷹之巣遺跡に1基〔島田ほか1986〕、十日町市赤羽根遺跡に7基〔十日町市1996〕、吉川町古町B遺跡に5基〔秦ほか1992〕、柏崎市大宮遺跡に2基〔中野1999〕が検出されており、集落の規模が小さい当該期にあって小重遺跡の集落は例外的な環状集落である。竪穴の構造については多くを知り得ないが、土坑を伴う2基が古町B遺跡・長野県大倉崎遺跡と共通することが注目される。

土器については、近年、寺崎・中野が刈羽式と諸磯b式・「大倉崎類型」との関係を論点とした論考を重ねている〔寺崎1997、中野1997・1999など〕。「大倉崎類型」〔鈴木1996〕を刈羽式の一要素とするか否かには検討する余地があるが、小重遺跡では、刈羽式に特徴的な格子目文土器・隆起線文土器がない一方で、諸磯b式の浮線文土器と大倉崎遺跡の縄文地文深鉢に近似するものでほぼ占められている。この状況は新井市萩清水遺跡〔立木1997b〕でも同様で、妙高山麓は海岸部とは異なった状況にある。なお、赤倉火碎流が堆積している地点では、火碎流発生以降のもっとも古い土器が妙高高原町閑川谷内遺跡〔小池・江口1998〕の諸磯c式古段階〔今村2000〕の土器であり、これは火碎流によって消滅した植生が長期間回復しなかったことを示しているものと思われる。鍋屋町式土器は遺構からの出土ではないものの、一括性の高い資料である。主な文様要素は鍋屋町遺跡に典型的な結節浮線文ではなく、爪形文を連続押捺した半隆起線と条線を描いた半隆起線である。この違いが小島の指摘〔小島1989〕のように地域差の問題であるのか検討する必要があろう。中郷村野林遺跡では福浦上層式（あるいは鍋屋町式）土器と十三菩提式土器が供出しており、妙高山麓の資料はごく限られているが、この時期には諸磯b式の時期のように海の土器と山の土器が分布域を異なるという状況ではないようである。

3 15号土坑の埋納銭について

小重遺跡の資料が発掘調査による数少ない発見例であつただけに、埋納銭遺構と周囲の遺構（掘立柱建物・溝群・井戸・集石墓群）との関係性に希望的な推測がなされたが、整理によって中世の遺構と確認できたものは全くない（第Ⅲ章4参照）。溝群のすべて、井戸（66号土坑）、集石の一部は近世以降であり、掘立柱建物と集石は中世の可能性を残しながらも時代を特定できない。「配石」はそもそも遺構と認識できぬものであった。また、中世遺物の出土地点は116号溝などが並走する区域にのみ存在し、掘立柱建物との重複はない。発掘調査における遺構の時期の誤認は、溝などの覆土がI b層と同質であることを認めながらもI b層が現耕作土であるという認識を欠いていたことと、埋納銭に関する遺構を過度に期待したことにある。

新潟県域にはこれまでに約70の埋納銭発見例があり、最新銭が明らかな30か所については、すでに戸根によって集成整理されている〔戸根1999〕。中郷村には小重遺跡の北西方向約2kmに大沼の埋納銭があり⁴⁾、麻紐で200枚単位に結ばれた銭貨約25,000点が曲物容器に埋納されていた〔平野1978〕。大沼の最新銭は宣徳通宝で時期は小重遺跡より古いが、埋納状況・銭貨枚数は小重遺跡に近似している上、両遺跡は通称雲雀山と呼ばれる半独立丘の縁辺部に位置するという地形的な共通点もある。小重遺跡の埋納銭を遺跡内で関連づけることが難しくなった現状では、約30棟の掘立柱建物がある南田遺跡など、北国街道沿いに分布する中世遺跡（村落・里）と雲雀山（山）という関係を追求すべきであろう。北国街道からは少し逸れるが、関川本流側の妙高村上ツ平遺跡でも約50棟の掘立柱建物があり、関山三社権現を除け

ば考慮の外にあった頸南の中世遺跡を十分に検討する必要がある。

15号土坑の埋納銭を構成する銭貨の種類と点数については、本報告書で一応の再整理がなされたと思うが、模鋲銭と無文銭の問題が残されている。銭名を判読された銭貨の中で、裏面の外輪が不鮮明なもの、薄さが際立っているもの、方孔の向きが正裏異なるものなどは模鋲銭と疑われる。また、銭名不詳と分類されたものには、銹着したサシを分離した結果文字が損なわれたもの、腐食が進行したもの、流通によって摩耗したものが含まれるため、これらの中から模鋲銭を抽出することは困難である。模鋲銭の問題は、実際の最新銭が何であるかという年代観と結びついているところにある。模鋲銭が最新銭とされる銭貨より新しいものもありえることで、模鋲銭の存否は時期区分の有効性に影響を及ぼすものである。その点、裏面の拓影は模鋲銭であるか否かを判断する重要な資料であり、文字や記号が存在しないという理由でそれを省略することは望ましいことではない。ちなみに、1454年初鋲の大世通宝以降は検出例が極端に少なく〔永井1996〕、絶対量の少ない例ではそれらが欠落することもある。模鋲銭と不可分の関係にあるといわれる無文銭についても、本書では分析をし得なかった。模鋲銭・無文銭のふたつについては今後の課題としておきたい。

註

- 1) 報文では、垂D類型の1基が赤倉火碎流より下位の黒色土に完全に覆われていたとあるが、隣接する関川谷内遺跡の調査経験に照らせば、この黒色土中で遺構を確認するのは困難である。
- 2) 峯山B遺跡のF類1基が前期末葉から中期初頭の竪穴の壁を切っているという報文は、覆土を除去した状態の「見かけの切り合い関係」であり、土坑と竪穴の覆土の切り合い関係が確認されているわけではない。報告者岡本氏の教示による。
- 3) 萩清水遺跡では、二木本岩屑流堆積物と推定されている。報文11頁。
- 4) 大沼の埋納銭については、『中郷村遺跡詳細分布調査報告書』〔野村2001〕が「松ヶ峯古戻出土地（地点不明）」と記しており（33頁）、また、県立蔵地カードと『中郷村報告書』遺跡一覧表が「市屋古戻出土地（中郷村松崎字市屋856）」としている遺跡は、発見日の記載から大沼の埋納銭を指していると思われる。『中郷村報告書』は小重遺跡と「市屋古戻出土地」を混同してもいる。したがって、戸根の集成では3とある中郷村内の埋納銭遺跡は2である。

要 約

- 1 小重遺跡は新潟県中頸城郡中郷村大字市屋字小重・横引ほかに所在する。
- 2 発掘調査は一般国道18号の改築工事に伴い、平成元年度・2年度に実施した。
- 3 遺跡は縄文時代前期後葉の集落（竪穴住居9基）と縄文時代早期末葉～前期中葉と推定される陥し穴土坑24基、中世の埋納銭遺構1基が主るものである。
- 4 縄文時代前期の環状集落が発掘調査された例は、新潟県域では小重遺跡が初例である。
- 5 出土土器の大半は縄文時代前期後葉のものであり、ほかに縄文時代早期の押型文土器がまとまって出土している。前期後葉の土器には中部高地と日本海沿岸に関係するものがそれぞれ存在する。
- 6 中世の埋納銭遺構は不時発見されることが多く、発掘調査がなされた小重遺跡の例は稀なものである。

引用・参考文献

- 新井市教育委員会 2000 「新井市遺跡発掘10年の歩み」 新潟県新井市教育委員会
- 飯坂盛泰^著 2000 「上信越自動車道関係発掘調査報告書VI 上中島道路・野林遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰 1997 「八斗荷原遺跡・野林遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度
- 池田 亨・佐藤泰治^著 1976 「伝・泉福寺遺跡-石臼中世蓄蓄古鉢の報告書-」 新潟県湯沢町教育委員会
- 池田 亨・荒木勇次^著 1988 「万條寺林遺跡」 新潟県塩谷町教育委員会
- 石川智紀・小池義人 1998 「大潟町下小船津浜遺跡の中世銭貨」『研究紀要』第2号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 今村啓爾 2000 「諸機C式土器の正しい編年」『土曜考古』 土曜考古学研究会
- 小熊博史 1999 「早期」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 小田由美子・三浦泰介 1994 「国道18号線規矩改良工事発掘調査報告書 関川関所跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 昭・古川知明^著 1982 「原通ツ塚昭和56年度重要遺跡確認緊急調査報告書 新潟県新井市原通古墳群(ハツ塚)」 新潟県新井市教育委員会
- 小野 昭^著 1988 「丸山遺跡発掘調査報告書」 新潟県大潟町教育委員会
- 加藤 学・荒川隆史 1999 「上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北村 亮・佐藤俊幸^著 1990 「関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原I遺跡・上林塚遺跡」 新潟県教育委員会
- 小池義人 1996 「龍峰遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書I 横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1998 「下馬場遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度
- 小池義人・江口志麻 1998 「上信越自動車道関係発掘調査報告書II 関川谷内遺跡!」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島俊彰 1989 「十三菩提式土器様式」『绳文土器大観』I 草創期・早期・前期 小学館
- 小島正巳 1993 「松ヶ峯No.237遺跡の绳文時代早期土器」『新潟考古』4 新潟県考古学会
- 小島正巳 1995 「妙高山麓における最近の考古学事情」『妙高火山研究所年報』第3号
- 駒形俊朗 1996 「長岡市内発掘調査報告書-舞台B遺跡・徳平遺跡・下道遺跡-」 新潟県長岡市教育委員会
- 笠沢 浩^著 2001 「豊野町の資料(一)」考古資料 長野県豊野町
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1993 「大重沢B遺跡」『(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1993 「中ノ原B・C遺跡」『(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994 「上信越自動車道関係一次調査の概要」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成5年度
- 佐藤俊幸 1990 「竪穴状土坑について」『関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原I遺跡・上林塚遺跡』 新潟県教育委員会
- 佐藤宏之 1999 「造構研究 竪穴I」『绳文時代』第10号 綱文時代研究会
- 佐藤雅一^著 1987 「川久保遺跡II・宮林B遺跡」 新潟県湯沢町教育委員会
- 畠田高志 1997 「考察 -呑作G遺跡における竪穴群と竪穴孤-」『呑作 -新潟県柏崎市藤橋東遺跡群・呑作G遺跡発掘調査報告書-』 新潟県柏崎市教育委員会
- 島田靖久^著 1986 「鷹之巣遺跡」 新潟県中里村教育委員会

- 鈴木公雄 1992 「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』第六一卷第三・四号 三田史学会
- 鈴木徳雄 1996 「諸畿b式の変化と型式間交渉－文様変化の趣起の累積性と型式間関係の諸相－」『縄文時代』第7号 縄文時代文化研究会
- 高橋 桂・中島庄一・金井正三 1976 「北信濃大倉崎遺跡調査報告」『信濃』第28卷第4号 信濃史学会
- 高橋 勉 1986 『新井市高柳字前田出土波来銭報告書』 新潟県新井市教育委員会
- 谷口康浩 1989 「諸畿式土器様式」『縄文土器大観』I 草創期・早期・前期 小学館
- 親跡 真 1988 『図録 南田遺跡』 新潟県中郷村教育委員会
- 親跡 真 1992 『図録 柿ノ木町遺跡』 新潟県妙高村教育委員会
- 親跡 真 1995 『図録 上ッ平遺跡』 新潟県妙高村教育委員会
- 立木由理子 1996 「横引遺跡」『上信越自動車道発掘調査報告書』 横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木由理子・寺崎裕助 1996 「一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書I 大堀遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木由理子・寺崎裕助 1997 「一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書II 中ノ沢遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木由理子 1997a 「階穴状土坑」『一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書II 中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木由理子 1997b 「上新バイパス関係発掘調査報告書III 萩清水遺跡・三本木新田B遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木由理子 1999 「国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書IV 西福田遺跡・郷清水遺跡・上中鳥遺跡・上流ノ沢遺跡・中の原D遺跡・窪畑B遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1993 「鍋屋町式土器について」『前期終末の諸様相』 縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1997 「吉川町古町B遺跡について -長野県大倉崎遺跡との比較検討-」『新潟考古学談話会会報』第17号
- 寺崎裕助 1999 「新潟県における縄文時代前期の土器」『縄文土器論集』 縄文セミナーの会
- 寺村光晴・室岡博・三井田忠はが 1960 『鍋屋町遺跡』 新潟県柿崎町教育委員会
- 田海義正 1998 「黒田吉墳群」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度
- 田海義正 1999 「狩獵」『新潟県の考古学』 新潟県考古学
- 十日町市 1996 『十日町市史』資料編2 古考・新潟県十日町市
- 戸根与八郎・鈴木俊成 1995 「小重遺跡出土の備蓄銭について」『研究紀要』 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 戸根与八郎 1999 「埋納銭」『新潟県の考古学』 新潟県考古学
- 戸根与八郎 2000a 「越後国」「佐渡国」「畿内・七道からみた古代銭貨」 出土銭貨研究会 第7回研究大会資料集
- 戸根与八郎 2000b 「鞠鉢と埋蔵銭 小重遺跡の埋蔵銭」『出土銭貨』第14号 出土銭貨研究会
- 永井久美男編 1994 「中世の出土銭・出土銭の調査と分類-」 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男編 1996 「中世の出土銭」補遺1 兵庫埋蔵銭研究会
- 中野 純 1997 「北陸における縄文時代前期後葉の土器様相(上) -地域的様相把握へ向けての資料集成-」『柏崎市博物館報』第11号 柏崎市立博物館
- 中野 純 1999 「新潟県における縄文時代前期後半の土器群について」『前期後半の再検討』 縄文セミナーの会
- 野村忠司 1997 「中郷村横引遺跡出土の縄文土器」『越佐補遺些』第2号 越佐補遺些の会
- 野村忠司編 2000 「龍峰遺跡発掘調査報告書II 遺物編」 新潟県中郷村教育委員会
- 野村忠司 2001 「中郷村遺跡詳細分布調査報告書」 新潟県中郷村教育委員会
- 秦 繁治・岡本郁栄 1992 「古町B遺跡」 新潟県吉川町教育委員会
- 秦 繁治・岡本郁栄 1986 「峯山B遺跡」 新潟県板倉町教育委員会

- 早津賢二・古川成光 1981 「妙高山赤倉火砕流堆植物と田口泥流堆植物の¹⁴C年代」『第四紀研究』20 日本第四紀学会
- 早津賢二 1985 「妙高火山群を構成する各火山の地質」『妙高火山群－その地質と活動史－』 第一法規出版
- 早津賢二・小島正巳 1985 「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」『妙高火山群－その地質と活動史－』 第一法規出版
- 早津賢二 1994a 「妙高火山群研究の1993年における新展開と問題点」『妙高火山研究所年報』第2号
- 早津賢二 1994b 「新潟焼山火山の活動と年代－歴史時代のマグマ噴火を中心として－」『地学雑誌』Vol.103 No.2 (社)東京地学協会
- 早津賢二 1995 「妙高火山－赤倉火砕流の¹⁴C年代」『道添遺跡II』 新潟県妙高村教育委員会
- 平野團三 1978 「第III章 古代」『中郷村史』 新潟県中郷村役場
- 星 奈津子 1997 「蛇谷遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度
- 細矢菊治・佐藤雅一 1990 「吉峰遺跡」 新潟県塩沢町教育委員会
- 三ツ井朋子^{ほか} 1997 『上信越自動車道関係発掘調査報告書II 大洞原C遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 室岡 博^{ほか} 1966 「先史・古代の頸南」『頸南-中頸城群南部学術総合調査報告書-』 新潟県教育委員会・頸南地区総合学術調査会
- 室岡 博・早津賢二^{ほか} 1994 『道添遺跡I』 新潟県妙高村教育委員会
- 室岡 博・早津賢二^{ほか} 1986 『中古遺跡』 新潟県妙高村教育委員会
- 八幡一郎^{ほか} 1958 『刈羽貝塚』 新潟県教育委員会
- 山田 聰 1996 「大塚遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度
- 吉田町 2000 「米納津出土銭貨」『吉田町史』資料編1 考古・古代・中世 新潟県吉田町

■別表1 土器觀察表(1)

遺物No.	時代	時期	出土場所	出土地點	層位	性質	色	調	文様・エラーフなど	備考
1	绳文	早期中葉	早原中葉	5D-1	不明	密度高い灰英粗面砂・灰白色角擦 密度高い灰英粗面砂・灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	2と同一個体。	
2	绳文	早期中葉	早原中葉	5D-1	不明	多量の灰英粗面砂・灰白色角擦 多量の灰英粗面砂・灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	1と同一個体、蓋分の文様が部分あり。	
3	绳文	早期中葉	早原中葉	6G-9/14	不明	灰白色角擦・石英砂 灰白色角擦・石英砂	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
4	绳文	早期中葉	早原中葉	5F-14	不明	多量の灰英粗面砂・灰白色角擦 多量の灰英粗面砂・灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
5	绳文	早期中葉	早原中葉	7C-22	不明	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
6	绳文	早期中葉	早原中葉	6E-15	1	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
7	绳文	早期中葉	早原中葉	5D-11	不明	灰白色角擦砂・灰白色砂 灰白色角擦砂	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
8	绳文	早期中葉	早原中葉	6G-9	不明	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
9	绳文	早期中葉	早原中葉	5H-15	不明	灰白色角擦砂 灰白色角擦砂	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
10	绳文	早期中葉	早原中葉	5H-20	III	灰白色角擦砂・灰白色角擦 灰白色角擦砂・灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
11	绳文	早期中葉	早原中葉	6F-10	4明	灰白色角擦砂・灰白色角擦 灰白色角擦砂・灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
12	绳文	早期中葉	5H-20	不明	灰白色角擦砂 灰白色角擦砂	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
13	绳文	中期中葉	P28	4D/4E	1	密度高い灰英粗面砂 密度高い灰英粗面砂	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	P 28は近世以降。	
14	绳文	中期中葉	P28	6E-3	不明	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文		
15	绳文	中期後葉	7L-16	不明	チャード角擦・褐色角擦・織維紋 チャード角擦・褐色角擦・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
16	绳文	中期後葉	8L-3	不明	密度高い灰英砂・雪母・織維紋 密度高い灰英砂・雪母・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	17と同一個体か。		
17	绳文	中期後葉	8K-23	不明	チャード角擦・褐色角擦・織維紋 チャード角擦・褐色角擦・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	16と同一個体か。		
18	绳文	中期後葉	7J-3	不明	チャード角擦・褐色角擦・織維紋 チャード角擦・褐色角擦・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
19	绳文	中期後葉	8K-23	不明	雪母・灰英砂・織維紋 雪母・灰英砂・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	口被織紋・格子体征灰文		
20	绳文	中期後葉	P301	5J/6J/7K-7K	1	チャード角擦・灰英砂・織維紋 チャード角擦・灰英砂・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	次第文・邊縫斜文	
21	绳文	中期中葉	4D/4E	1	チャード角擦・灰英砂・織維紋 チャード角擦・灰英砂・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	通針斜竹文・背竹管斜文 コハクバスク竹管文・单箇RL 单箇BL		
22	绳文	中期中葉	37号土坑	5D-7/2	不明	チャード角擦・灰英砂・織維紋 チャード角擦・灰英砂・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	单箇LR?	
23	绳文	中期中葉	前原中葉	5D-7	不明	角砾石・灰英砂・織維紋 角砾石・灰英砂・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	25と同一個体か。	
24	绳文	中期中葉	前原中葉	6B-15	不明	灰白色角擦・灰白色角擦 灰白色角擦・灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	24と同一個体か。	
25	绳文	中期中葉	7K-4	不明	灰白色角擦・灰白色角擦 灰白色角擦・灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
26	绳文	中期後葉	7K-9	不明	灰白色角擦・織維紋 灰白色角擦・織維紋	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
27	绳文	中期後葉	3J-1	不明	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
28	绳文	中期後葉	7D-24	III	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
29	绳文	中期後葉	6H	不明	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	29と同一個体。		
30	绳文	中期後葉	6H	不明	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	28と同一個体。		
31	绳文	中期後葉	不明	III	灰白色角擦 灰白色角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			
32	绳文	中期後葉	4J-3	不明	チャード角擦 チャード角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文	がタヌク状斜文・横斜平行浮雕文・单箇LR・RL 竹管による平行浮雕文・单箇LR・RL		
33	绳文	中期後葉	7J-4	不明	チャード角擦 チャード角擦	外: 海内・灰褐色 外: 海内・灰褐色	山形文 山形文			

■別表1 土器觀察表(2)

遺物No.	時代	時期	出土遺構	出土地點	位置	層位	混入物等	色	調	文様・モチーフなど	備考
35	绳文	前中期後半		71-23	不明	チャート外腹	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
36	绳文	前中期後半		71-24/16	不明	チャート外腹	外：にぶい黄褐色 内：外・内・灰褐色～褐	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
37	绳文	前中期後半		41-7	不明	チャート外腹	外・内・灰褐色～褐	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
38	绳文	前中期後半		51-15	III	灰褐色色砂 多量の灰白色砂	にぶい黄褐色	竹管による平行線文	竹管による平行線文		
39	绳文	前中期後半		3K-22	不明		端陶一粒	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
40	绳文	前中期後半		3K-23	不明		外・灰褐色/内：にぶい相	平陽起輪上に施燒的骨管	平陽起輪上に施燒的骨管		
41	绳文	前中期後半		31-4	不明	石英砂	外・灰褐色/内：褐	平陽起輪上にヘアリガラス文	平陽起輪上にヘアリガラス文		
42	绳文	前中期後半		4K-9	III		にぶい黄褐色～灰褐色	財/三形輪文	財/三形輪文		
43	绳文	前中期後半		3K-14	不明	灰白色灰質陶	外：にぶい黄褐色/内：灰褐色	平陽起輪上に施燒的骨管	平陽起輪上に施燒的骨管		
44	绳文	前中期後半	197号土坑	41-3	不明	灰白色灰質陶	灰褐色～灰褐色	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
45	绳文	前中期後半		4K-15	III	石英粗粒砂、骨陶片	にぶい黄褐色～灰褐色	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
46	绳文	前中期後半		41-2	不明	灰褐色灰質陶	にぶい黄褐色～灰褐色	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
47	绳文	前中期後半		3K-16	III	チャート粉砂	にぶい黄褐色	竹管による平行線文/直角彎文	竹管による平行線文/直角彎文		
48	绳文	前中期後半		10L-7	不明	灰白色砂	にぶい黄褐色～灰褐色	三角形輪文/竹管起輪上にヘアリガラス文	三角形輪文/竹管起輪上にヘアリガラス文		
49	绳文	前中期後半	2号窓穴	71-11/12	不明	灰白色砂	灰褐色	平行線文あるいは輪條線記録文	平行線文あるいは輪條線記録文		
50	绳文	前中期後半		5G-11	不明		灰褐色～灰褐色	口輪部にテナサウルス文/牛鹿LR-RL	口輪部にテナサウルス文/牛鹿LR-RL		
51	绳文	前中期後半		5G-3	不明	灰白色灰質陶	外・灰褐色/内：灰褐色	口輪部に2個单位の柱状突起文/串筋LR-RL	口輪部に2個单位の柱状突起文/串筋LR-RL		
52	绳文	前中期後半		51-10	III	チャート粉砂	にぶい黄褐色～灰褐色	竹管付付器/口輪部突起文/串筋LR-RL	竹管付付器/口輪部突起文/串筋LR-RL		
53	绳文	前中期後半		41-5/22	不明		にぶい黄褐色	竹管による輪條線原形/平行線原形	竹管による輪條線原形/平行線原形		
54	绳文	前中期後半		4H-23	不明	チャート粉砂	にぶい相	口輪部面部に斜み1/串筋LR-RL	口輪部面部に斜み1/串筋LR-RL		
55	绳文	前中期後半		6F-24	不明	チャート粉砂、灰白色砂	にぶい相	穿孔1カ所/串筋LR-RL	穿孔1カ所/串筋LR-RL		
56	绳文	前中期後半	2号窓穴	71-12	不明	灰白色砂、石英砂	外・灰褐色/内：灰褐色	小波狀口輪	小波狀口輪		
57	绳文	前中期後半		41-4	不明	石英粗粒砂、チャート粉砂	にぶい黄褐色	串筋LR - RL	串筋LR - RL		
58	绳文	前中期後半	2号窓穴	71-16	不明	灰白色砂	外・灰褐色/内：にぶい黄褐色	小波狀口輪	小波狀口輪		
59	绳文	前中期後半	2号窓穴	71-11/12	5I-5	灰白色粗粒砂	にぶい黄褐色	蛇行する貼付文刺繡	蛇行する貼付文刺繡		
60	绳文	前中期後半		4I-3	不明	多量の灰白色灰質陶	同	小波狀口輪	小波狀口輪		
61	绳文	前中期後半		2号窓穴	72-11	灰褐色灰質陶	にぶい黄褐色～灰褐色	串筋LR - RL	串筋LR - RL		
62	绳文	前中期後半	2号窓穴	71-17	多量の灰白色粗粒砂	明視	串筋LR - RL	串筋LR - RL	串筋LR - RL		
63	绳文	前中期後半	4号窓穴	4H-23	不明	灰白色砂	外・灰褐色/内：明視	輪條線文+周囲の云い煙突文	輪條線文+周囲の云い煙突文		
64	绳文	前中期後半	4号窓穴	4H-23	不明	多量の灰白色粗粒砂	明視	串筋LR - RL	串筋LR - RL		
65	绳文	前中期後半	4号窓穴	6L-7	不明	灰白色砂、チャート粉砂	灰褐色～灰白色砂	明視	明視		
66	绳文	前中期後半									

■別表1 土器觀察表(3)

遺物No.	時代	時期	出土遺構	出土地點	層位	性質	混入物等	色	調	文様・玉チーフなど	備考
67	绳文	前中期	中崩後裏	7L16	不明	多量の灰白色軟質砂礫	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	單面LR・RL			
68	绳文	中期後裏	中崩後裏	4H-24	不明	チャート砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	竹青色による平行波文/单面RL			
69	绳文	中期中裏	中崩中裏	9L-11	不明	チャート砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	メガネ状変形/半球状模文			
70	绳文	中期中裏	中崩中裏	9L-11	不明	チャート砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	テラ秋貝による圖案文			
71	绳文	中期中裏	中崩後裏	9M-7	不明	灰白色砂・石英砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	路線状の點状文/これに沿うた海螺貝殻と斜文			
72	绳文	中期後裏	中崩後裏	10L-7	不明	灰白色軟質砂礫	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	単面RL/開口			
73	绳文	中期後裏	中崩後裏	8N-20	不明	チャート砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色～灰褐色	渦巻き状の飾品像文			
74	绳文	中期後裏	中崩後裏	9K-10	不明	灰白色砂礫	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	長方形区画の縁等に切妻口/单面LR			
75	绳文	中期後裏	中崩後裏	4F-16	不明	灰白色砂礫	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	梯形帶/海螺貝殻文	77と同一鉢形。		
76	绳文	中期後裏	中崩後裏	5G-12	不明	灰白色砂礫	明黄褐色～灰褐色 外：灰褐色	梯形帶/海螺貝殻文	76と同一鉢形。		
77	绳文	中期中裏	後中崩	3K-20	不明	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	梯形帶/海螺貝殻文	外周部は半滑なミガ手。		
78	绳文	後中崩	後中崩	3M-16	不明	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	梯形帶/海螺貝殻文			
79	绳文	後中崩	後中崩	4K-19	II	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	梯形帶/单面RL	内外面、平滑なミガ手。		
80	绳文	後	後	4L-12	不明	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	单面LR			
81	绳文	後	後	不明	1	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	单面LR			
82	绳文	後	後	4K-18	II	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	单面LR			
83	绳文	後	後	4M-18	不明	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	单面LR			
84	古墳	前	前	4M-18	不明	灰白色砂	明黄褐色～灰褐色 外：灰黃褐色	单面LR			
85	古代	平安	118号墳	5F-22	不明	1	灰	单面LR	土師器類。内外面、丁寧ナナデ。		
86	古代	平安	118号墳	1	不明	1	灰	单面LR	土師器類。118号墳は世以降。 須弥形。		
87	古代	平安	118号墳	1	不明	1	灰	单面LR	須弥形。		
88	中世	中世	118号墳	不明	不明	1	灰	单面LR	須弥形。		
89	中世	中世	118号墳	4F	不明	4F	灰	单面LR	須弥形。		
90	中世	中世	118号墳	5F-4	不明	1	灰	单面LR	須弥形。		
91	中世	中世	118号墳	4F	1	灰白色砂礫	灰	单面LR	須弥形口跡、S3と同一。		
92	中世	中世	118号墳	7F-23	不明	灰	灰	单面LR	須弥形口跡、S3と同一。		
93	中世	中世	118号墳	4E-23	不明	灰	灰	单面LR	須弥形口跡、S3と同一。		

■別表2 石器・土製品觀察表(1)

報告No.	器種	出土位置	出土遺物	部位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	法量の単位はmmおよび出土位置の[T-O]は平成元(89)年のトレンチ番号		
										備 考		
94	斧	石 鋸	4K-3		安山岩	134	68	42	612			
95	斧	石 鋸	5E-5		安山岩	72	65	49	207			
96	斧	石 鋸	5E-5	集石土坑例	安山岩	144	74	58	898			
97	斧	石 鋸	6E-9		安山岩	131	84	47	679			
98	斧	石 鋸	5E-1		安山岩	102	65	56	441			
99	砲	石 鋸	5D-21		安山岩	154	70	72	935			
100	斧	石 鋸	3L		安山岩	148	69	57	781			
101	斧	石 鋸	3E-21		不明	安山岩	92	79	45	474		
102	斧	石 鋸	7E-2		不明	安山岩	93	79	54	520	右側面から裏面にかけての剥離は放熱によるか。	
103	斧	石 鋸	9H		1 安山岩	148	85	61	901			
104	斧	石 鋸	6F-19		不明	安山岩	177	94	69	1166		
105	斧	石 鋸	6B		不明	安山岩	182	95	61	1380		
106	斧	石 鋸	[74]		不明	安山岩	95	86	45	472		
107	斧	石 鋸	6G	V	安山岩	125	76	68	639			
108	斧	石 鋸	4H-23		不明	安山岩	111	59	26	171		
109	斧	石 鋸	10E-19		不明	安山岩	108	98	67	812		
110	斧	石 鋸		集石土坑例	不明	安山岩	121	77	33	417		
111	斧	石 鋸	5K-10		III 安山岩	96	79	48	452			
112	斧	石 鋸	3K-12		不明	安山岩	105	85	47	637		
113	砥	石 3I			不明	砂岩	146	107	67	1405	正面下部に熱変化あり。	
114	砥	石 [T3]			不明	砂岩	355	134	87	6230		
115	台	石 4K-3			III 安山岩	299	285	100	7440			
116	石 直	不明	1 A4-13[13]	1 砂岩	186	156	77	2670				
117	台	石 7J-12			不明	安山岩	199	155	47	2150		
118	石 椅	7J-12			不明	頁岩	56	22	8	8		
119	石 椅	7J-17			不明	頁岩	69	33	15	28		
120	石 椅	3L-8			不明	チャート	23	39	7	5		
121	磨製石斧	4-1-5			不明	蛇紋岩	59	34	12	38		
122	磨製石斧	33-8			不明	蛇紋岩	61	22	9	18		
123	磨製石斧	6A[T-12]			不明	蛇紋岩	39	26	10	12	正面右・七箇所剥離部に研削あり、再生途上か。	
124	磨製石斧	33-3			不明	蛇紋岩	35	26	8	9	右側面からの剥離は熱変化でなく、研削後。	
125	磨製石斧	4P-11			不明	蛇紋岩	73	47	13	88	刃部は使用による熱変化で、頭部は磨削。	
126	磨製石斧	3L-21			不明	蛇紋岩	92	57	18	138	正面の一部と右側面に研削あり。	
127	磨製石斧	4P-6			不明	蛇紋岩	134	48	25	219	刃部の剥離は熱変化でなく、研削後。	

■別表2 石器・土製品觀察表 (2)

報告No.	器種	出土位置	出土遺物	割位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
128	削製石斧	9.1		不明	燧灰岩	100	44	19	118	
129	削製石斧	44.7		不明	頁岩	125	49	21	165	刮削地面によつて削毛。刃部は斜面を用意して使用するものと想工具有して使用。本形は刃形。頭部は尖形。
130	打製石斧	514.20	V	無斑品質安山岩	頁岩	69	40	20	68	左側面部スクレーパー様の急角度剥離。
131	打製石斧	31.14		不明	頁岩	168	63	30	305	兩側面部敲打によるツバサ形を施す。
132	打製石斧	44.7		不明	頁岩	130	52	21	168	刃部正面に使用による剥離あり。
133	打製石斧	78.4		不明	頁岩	127	57	12	84	刃部は使用によって摩耗。
134	不定形石器	517.3		不明	頁岩	48	88	20	56	
135	石核	57.24		不明	無斑品質安山岩	54	56	21	71	
136	石器	41.18		不明	安山岩	83	83	51	318	飛沫状剥離を施用。
137	軸用研磨具	57.20		不明	燧灰岩	70	90	12	83	右側面部にノミ状工具による整形痕あり。
138	砾石	44.7		不明	燧灰岩(赤色縫)	54	52	13	40	右側面部にノミ状工具による整形痕あり。

■別表3 銭貨觀察表(1)

通貨No.	銘 名	背 体 (mm)	背 面	備 考	通貨No.	銘 名	背 体 (mm)	背 面	備 考
139	開元通宝	1.1			179	祥符通宝	1.2		
140	開元通宝	1.1			180	祥符通宝	1.0		外輪幅大きく偏る。
141	開元通宝	1.2			181	祥符通宝	1.4		
142	開元通宝	1.1	上位に真文。 下位に横文。	「元」は両頭。	182	天祐通宝	1.4		
143	乾元重宝・当五十枚	0.8	真書。		183	天祐通宝	1.1		
144	乾元重宝	1.2	上位に大字の闇文。		184	天慶元宝	1.2		外輪斜輪。
145	乾元重宝	1.2	上位に闇文。		185	天慶元宝	1.0		
146	乾元重宝	1.0	下位に闇文。		186	天慶元宝	1.2		
147	乾元重宝	1.2	下位に真文。 下位に横文。		187	明道元宝	0.9		
148	乾元重宝	0.9	下位に真文。 下位に横文。	外輪は斜輪。 『出典』18-17と同一。	188	明道元宝	1.1		
149	天慶元宝	1.1	左位に真文。	『出典』19-19と同一。サシ17	189	明道元宝	1.4		
150	天慶元宝	1.4	上位に刀文		190	景祐元宝	1.0		
151	乾德元宝	1.0			191	景祐元宝	0.9		
152	乾德元宝	1.2			192	乾祐通宝	1.1		外輪斜輪。
153	乾祐通宝	0.8			193	乾祐通宝	1.3		
154	周通元宝	1.3			194	保宋通宝	1.2		
155	周通元宝	1.4	上位に真文。		195	保宋通宝	1.1		
156	周通元宝	1.4	真書		196	保宋通宝	1.0		
157	宋通元宝	1.1	左位に真文。		197	保宋通宝	1.2		
158	宋通元宝	1.2	左位に真文。 下位に横文。		198	至和元宝	1.0		
159	宋通元宝	1.0	下位に真文。		199	至和元宝	1.1		
160	宋通元宝	1.2	上位に刀文。		200	至和元宝	1.3		
161	太平通宝	1.2			201	至和通宝	0.9		
162	太平通宝	1.4	右位に刀横文。		202	至和通宝	1.2		
163	太平通宝	1.1			203	至和通宝	1.0		
164	淳化元宝	0.8	真書		204	嘉祐元年	1.2		
165	淳化元宝	1.3	行書		205	嘉祐元年	1.1		
166	淳化元宝	0.8	真書		206	嘉祐通宝	1.1		
167	淳化元宝	1.2	真書		207	嘉祐通宝	1.2		
168	聖道元宝	1.1	真書		208	嘉祐通宝	1.1		
169	聖道元宝	1.1	行書		209	治平元年	1.3		
170	聖道元宝	1.1			210	治平元年			
171	至道元宝	0.9	真書		211	治平元年			
172	咸平元宝	1.3			212	治平元年			
173	咸平元宝	1.3			213	治平通宝	1.5		
174	景德元宝	1.2			214	治平通宝	1.1		
175	景德元宝	1.1			215	治平通宝	1.1		
176	景德元宝	1.1			216	熙寧元年	1.2		
177	祥符元宝	1.2			217	熙寧元年	1.4		
178	祥符元宝	1.2			218	熙寧元年	1.3		

■別表3 銭貨鑑定表(2)

通貨No.	規 名	背 面	背 面	備 考
	(mm)	(mm)	(mm)	
219	照應元宝・折二錢	真書 1.4	外輪鉛輪 「出土地」50-19と同一。	孔、算盤玉形、四邊に切り込みがある形。
220	照應元宝	真書 1.5		
221	元祐通宝	行書 1.3		
222	元祐通宝	行書 1.2		
223	元祐通宝	行書 1.1		
224	元祐通宝	行書 1.1		
225	元祐通宝	篆書 1.5		
226	元祐通宝	篆書 1.1		
227	熙豐元寶	行書 1.3		
228	熙豐元寶	行書 1.5		
229	熙豐元寶	篆書 1.2		
230	熙豐元寶	篆書 1.5		
231	熙豐通寶	行書 1.5		
232	元祐通宝	行書 1.2		
233	元祐通宝	行書 1.0		
234	元祐通宝	篆書 1.1		
235	元祐通宝	篆書 1.3		
236	聖宋元宝	行書 1.1		
237	聖宋元宝	行書 1.2		
238	聖宋元宝	篆書 1.0		
239	聖宋元宝	篆書 1.3		
240	大观通宝	1.3		
241	大观通宝	1.5		
242	政和通宝	1.1	右側に長点状文。 裏面、範轍る。	
243	政和通宝・折二錢	篆書 1.3		
244	政和通宝・折二錢	行書 1.1		
245	政和通宝・折二錢	篆書 1.3		
246	宣和通宝	1.3	『出土地』70-5と同一。	
247	宣和通宝	分幅 1.4		
248	宣和通宝・折二錢	篆書 1.1		
249	宣和通宝・折二錢	分幅 1.0		
250	宣和通宝	1.2		
251	宣和通宝・折二錢	篆書 1.3		
252	宣和通宝・折二錢	篆書 1.8	外輪不整形。 サシ-32	
253	宣和通宝・折二錢	篆書 1.1	『出土地』73-3と同一。	
254	建炎通宝	1.1		
255	建炎通宝	1.3		
256	建炎通宝・折二錢	篆書 1.2		
257	建炎通宝・折二錢	篆書 1.2	孔、打刻形。	
258	建炎通宝・折二錢	真書 0.9		
259	紹興通宝	真書 0.8		孔、算盤玉形、四邊に切り込みがある形。
260	紹興通宝・折二錢	真書 1.0		
261	紹興通宝	真書 0.9		
262	紹興通宝・折二錢	真書 1.4	上位に月文、下位に星文。	サシ-33
263	紹興通宝	真書 1.2	上位に月文、下位に星文。	無輪不整形、底輪不整形と同一。サシ-63
264	淳熙元宝	真書 1.3		
265	淳熙元宝	真書 1.0	輪造年「[+/-]」	
266	淳熙元宝	真書 1.2	輪造年「[+/-]」	
267	淳熙元宝	真書 1.4	輪造年「[+/-]」	
268	淳熙元宝	真書 1.2	輪造年「[+/-]」	
269	淳熙元宝	真書 1.2	輪造年「[+/-]」	
270	紹熙通宝	1.4	輪造年「[+/-]」	
271	紹熙元宝	1.5	輪造年「[-]」	
272	紹熙元宝	1.2	輪造年「[-]」	
273	紹熙元宝	1.3	輪造年「[-]」	
274	紹熙元宝	1.5	輪造年「[+]」	
275	慶元通宝	1.2	輪造年「[-]」	
276	慶元通宝	1.2	輪造年「[+]」	
277	慶元通宝	1.4	輪造年「[+]」	
278	嘉泰通宝	1.2	輪造年「[+]」	
279	嘉泰通宝	1.3	輪造年「[-]」	
280	嘉泰通宝	1.2	輪造年「[+]」	
281	嘉泰通宝	1.3	輪造年「[+]」	
282	開禧通宝	1.1	輪造年「[+]」	
283	開禧通宝	1.2	輪造年「[-]」	
284	嘉定通宝	1.2	輪造年「[+]」	
285	嘉定通宝	1.2	輪造年「[+]」	
286	嘉定通宝	1.0	輪造年「[+]」	
287	嘉定通宝	1.2	輪造年「[+]」	
288	嘉定通宝	1.1	輪造年「[+]」	
289	嘉定通宝	1.4	輪造年「[+]」	
290	嘉定通宝	1.4	輪造年「[+]」	
291	嘉定通宝	1.4	輪造年「[+]」	
292	大宋元宝	1.3	輪造年「[+]」	
293	大宋元宝	1.2	輪造年「[+]」	
294	大宋元宝	1.1	輪造年「[+]」	
295	紹定通宝	1.2	輪造年「[+]」	
296	紹定通宝	1.1	輪造年「[+]」	
297	紹定通宝	1.1	輪造年「[+]」	
298	紹定通宝	1.2	輪造年「[+]」	

■別表3 銭貨觀察表(3)

52

通物No.	銘	名	背 体 (mm)	背 面 (mm)	備 考	鑄 名	背 体 (mm)	背 面 (mm)	備 考
299	新記通宝	新記通宝	1.2	輪造年〔六〕		339	洪武通宝	輪造地〔浙〕	
300	端平元宝	端平元宝	1.3	輪造年〔六〕		340	洪武通宝	輪造地〔浙〕	
301	端平元宝	新記通宝	1.3	輪造年〔二〕		341	洪武通宝	輪造地〔浙〕	
302	嘉熙通宝	嘉熙通宝	1.3	輪造年〔二〕		342	洪武通宝	右位に「義」	
303	嘉熙通宝	嘉熙通宝	1.1	輪造年〔三〕		343	洪武通宝	右位に「義文」	
304	淳祐元宝	淳祐元宝	1.5	輪造年〔二〕		344	永樂通宝	左位に「用善文」	
305	淳祐元宝	淳祐元宝	1.2	輪造年〔二〕		345	永樂通宝	左位に「用善文」	
306	淳祐元宝	淳祐元宝	1.1	輪造年〔四〕		346	永樂通宝	右位に「用善文」	
307	淳祐元宝	淳祐元宝	1.2	輪造年〔六〕		347	宜德通宝	137.5と同 ^一	
308	淳祐元宝	淳祐元宝	1.1	輪造年〔八〕		348	宜德通宝	137.4と同 ^一	
309	淳祐元宝	淳祐元宝	1.1	輪造年〔十〕		349	弘治通宝	141.19と同 ^一	
310	皇宋元宝	皇宋元宝	1.1	輪造年〔二〕		350	弘治通宝	141.19と同 ^一	
311	皇宋元宝	皇宋元宝	1.2	輪造年〔四〕		351	永樂通宝	真書	
312	皇宋元宝	皇宋元宝	0.9	輪造年〔五〕		352	永樂通宝	1.0	
313	開寶通宝	開寶通宝	1.3	輪造年〔五〕	サニ60	353	朝鮮通宝	篆書	1.8
314	景德元宝	景德元宝	1.1	輪造年〔五〕		354	朝鮮通宝	1.6	
315	景德元宝	景德元宝	0.9	輪造年〔二〕		355	人平興通宝	上位に「丁」	0.9
316	景德元宝	景德元宝	1.2	輪造年〔三〕		356	大中通宝		
317	咸淳元宝	咸淳元宝	1.2	輪造年〔二〕		357	大世通宝	1.4	
318	咸淳元宝	咸淳元宝	1.1	輪造年〔二〕		358	大世通宝	1.6	
319	咸淳元宝	咸淳元宝	1.4	輪造年〔三〕		359	大世通宝	1.6	
320	咸淳元宝 折二錢	咸淳元宝 折二錢	1.3	輪造年〔三〕		360	大世通宝	重輪	1.4
321	咸淳元宝 折二錢	咸淳元宝 折二錢	1.0	輪造年〔四〕		361	世高通宝	1.0	
322	咸淳元宝 折二錢	咸淳元宝 折二錢	1.1	輪造年〔四〕	サニ81	362	世高通宝	1.5	
323	天禧元宝	天禧元宝	1.1	輪造年〔三〕	サニ27	363	世高通宝	1.4	
324	正隆元宝	正隆元宝	1.4	上位に「中」		364	世高通宝	0.9	
325	正隆元宝	正隆元宝	1.5	上位に「中」		365	神功開寶	1.8	
326	大定通宝	大定通宝	1.5	上位に「中」		366	神功開寶	1.8	
327	大定通宝	大定通宝	1.1	上位に「中」		367	高宗通宝	1.3	
328	大定通宝	大定通宝	1.3	下位に「中」		368	高宗「宋高宗御文」	0.8	
329	至大通宝	至大通宝	1.2	下位に「中」		369	高宗「宋元通宝」	0.9	
330	至大通宝	至大通宝	1.4	上位に「大」		370	高宗「太平通宝」	0.5	
331	至正通宝	至正通宝	1.3	上位に「大」		371	無文錢	0.6	
332	至正通宝	至正通宝	1.2	上位に「大」		372	無文錢	0.7	
333	至正通宝	至正通宝	1.3	輪造年〔二〕		373	無文錢	0.6	
334	大義通宝	大義通宝	1.6	輪造年〔二〕		374	無文錢	0.6	
335	大中通宝	大中通宝	1.6	輪造年〔二〕					漏道(6)
336	大中通宝	大中通宝	1.2	輪造年〔二〕					
337	大中通宝	大中通宝	1.4	輪造年〔二〕					
338	洪武通宝	洪武通宝	1.4	輪造年〔二〕					

図 版

凡 例

1 石器実測図の網がけは、編目状のパターンが摩耗痕、
霜降り状のパターンが敲打痕、斜行する直線と破線が
節理面をそれぞれ表している。

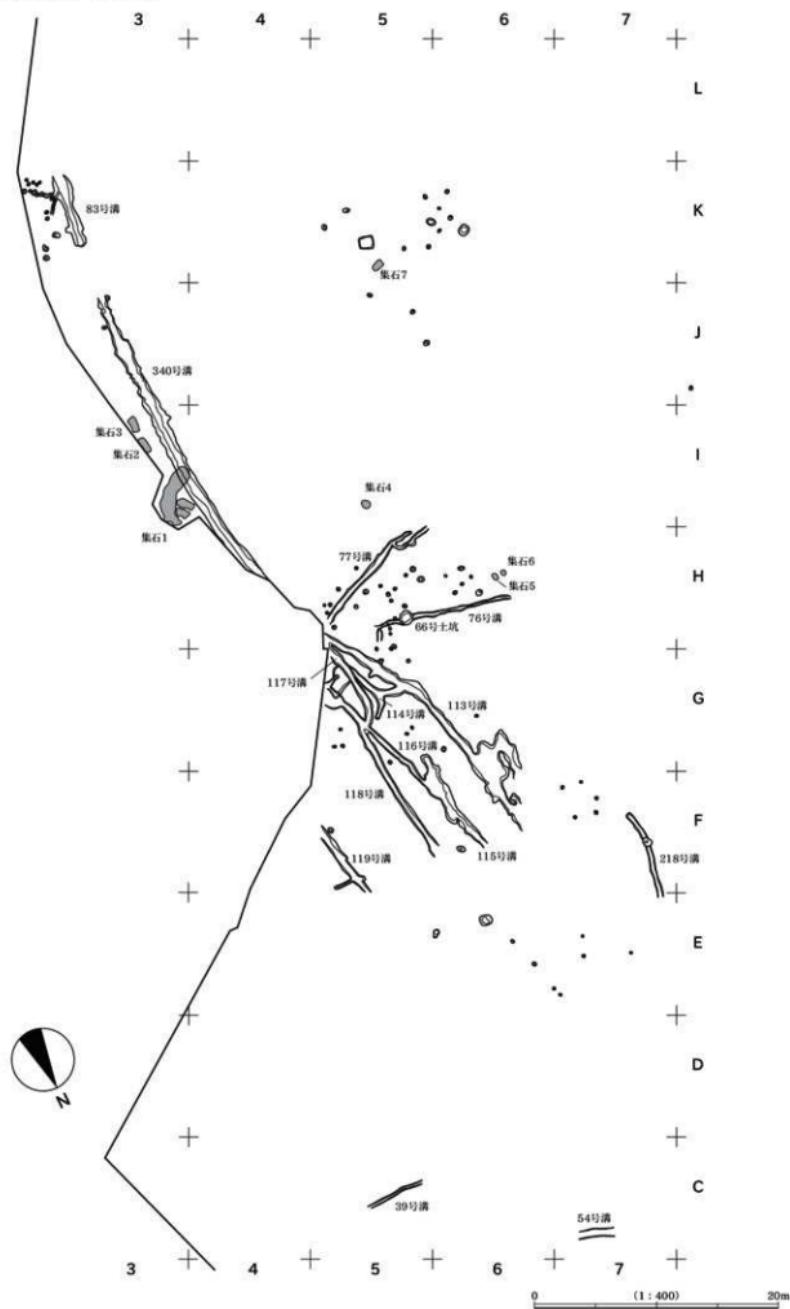
- 2 遺物写真図版の縮尺は以下のとおりである。
土器破片 図面図版と同一
ただし、4～14は1：3
完形・半完形土器 任意
石器・石製品 図面図版と同一
銭貨 1：1
木製品 任意

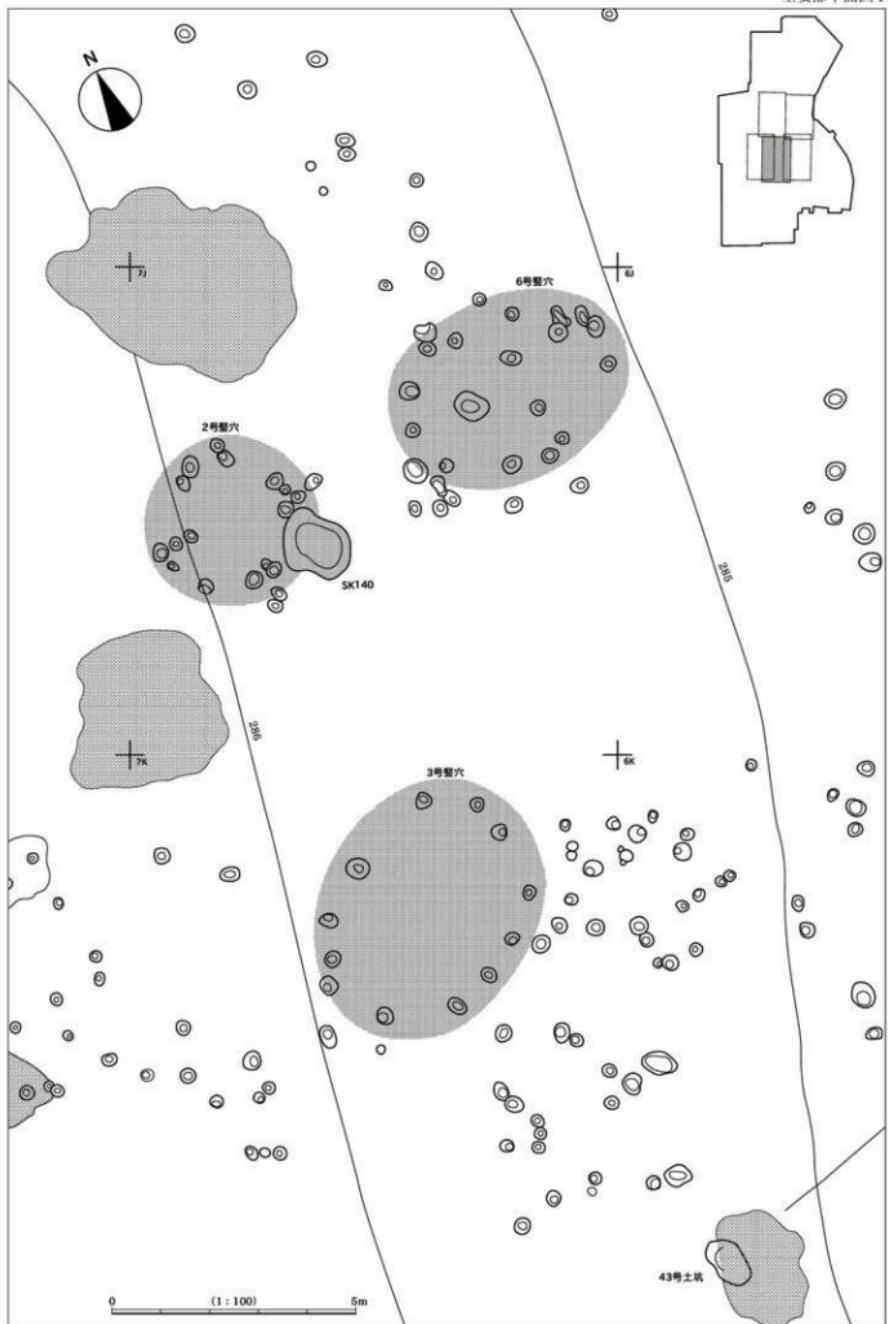
小重遺跡全測図1 繩文～中世

圖 版 1

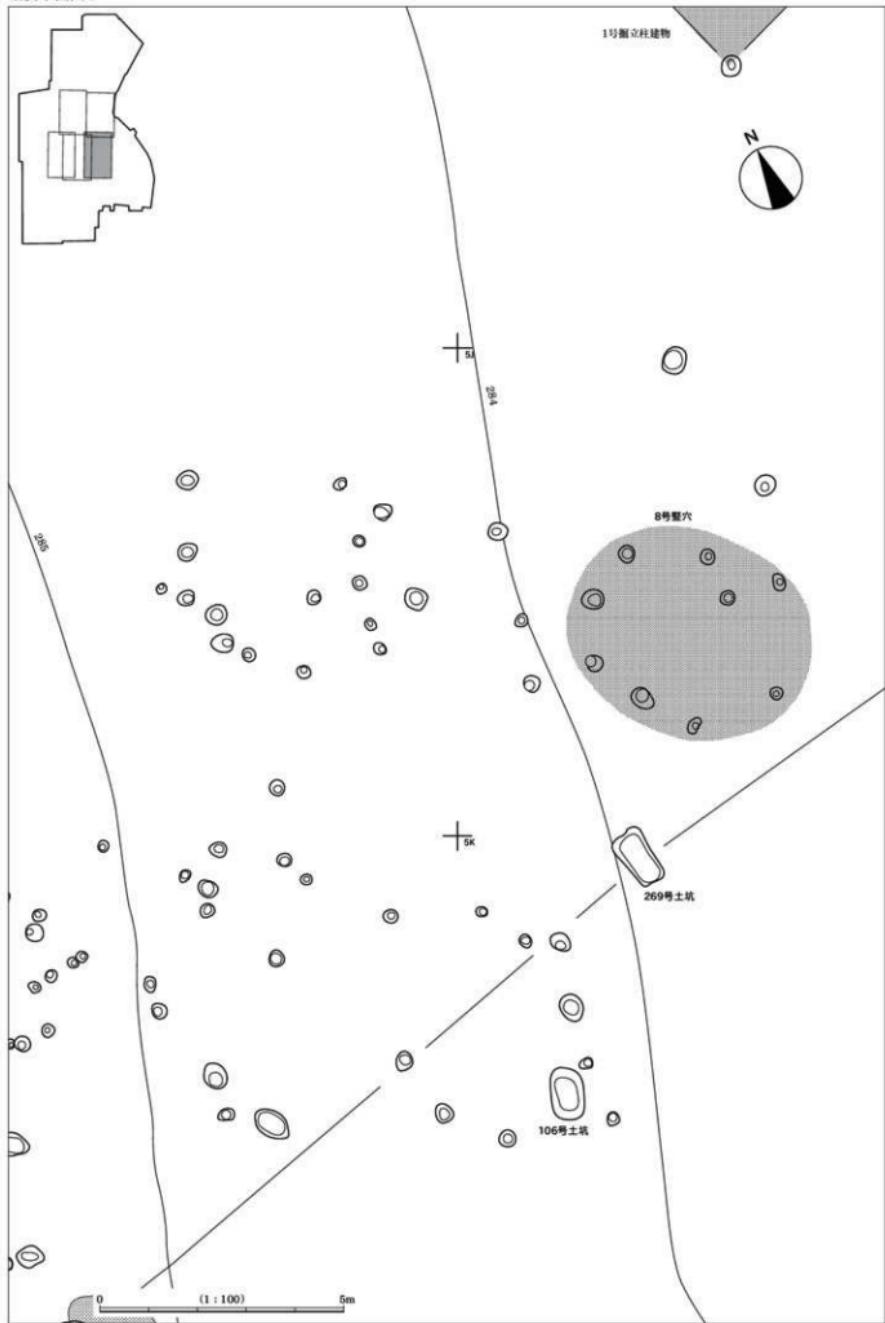


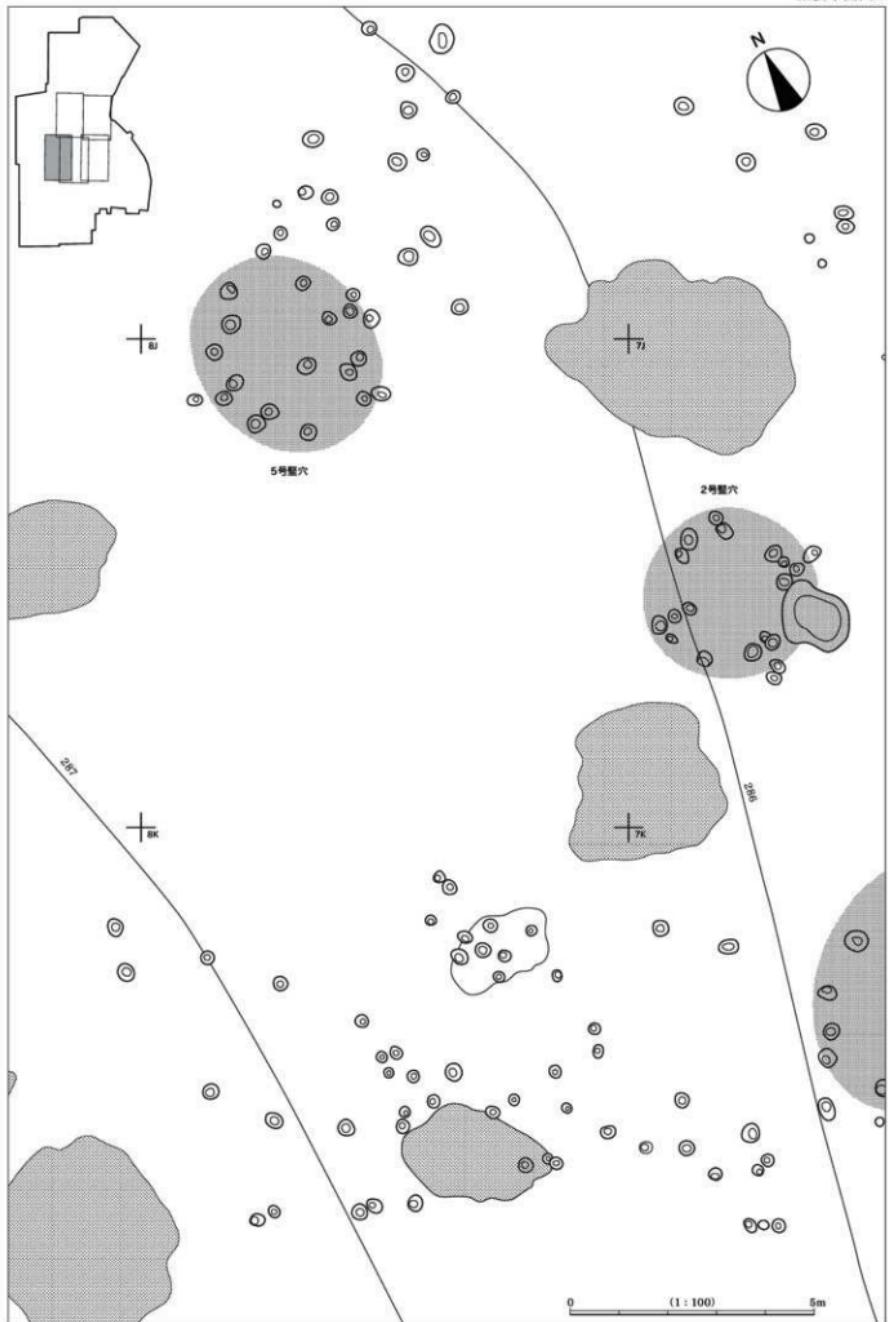
小重遺跡全測図2 近世以降





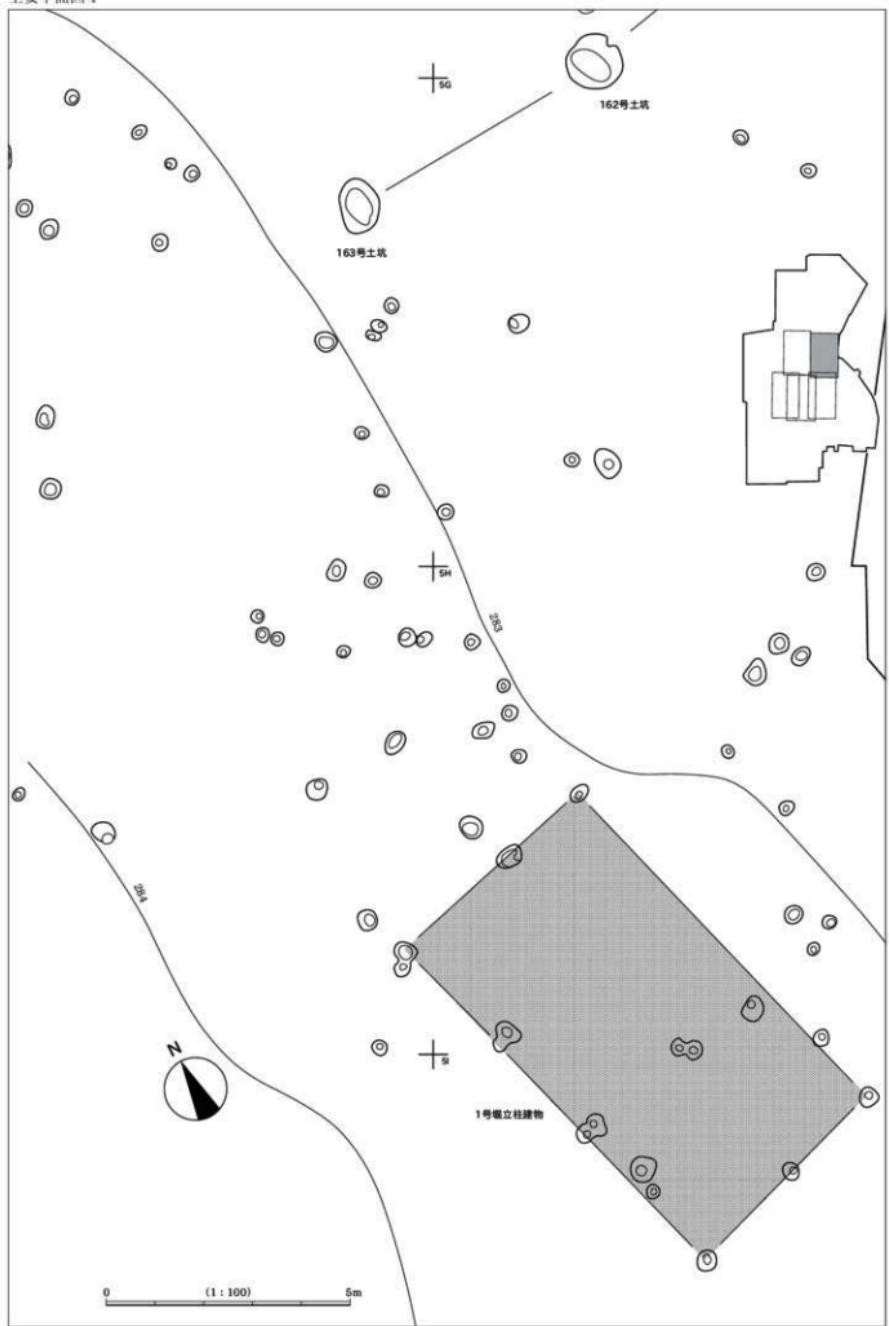
主要平面图2

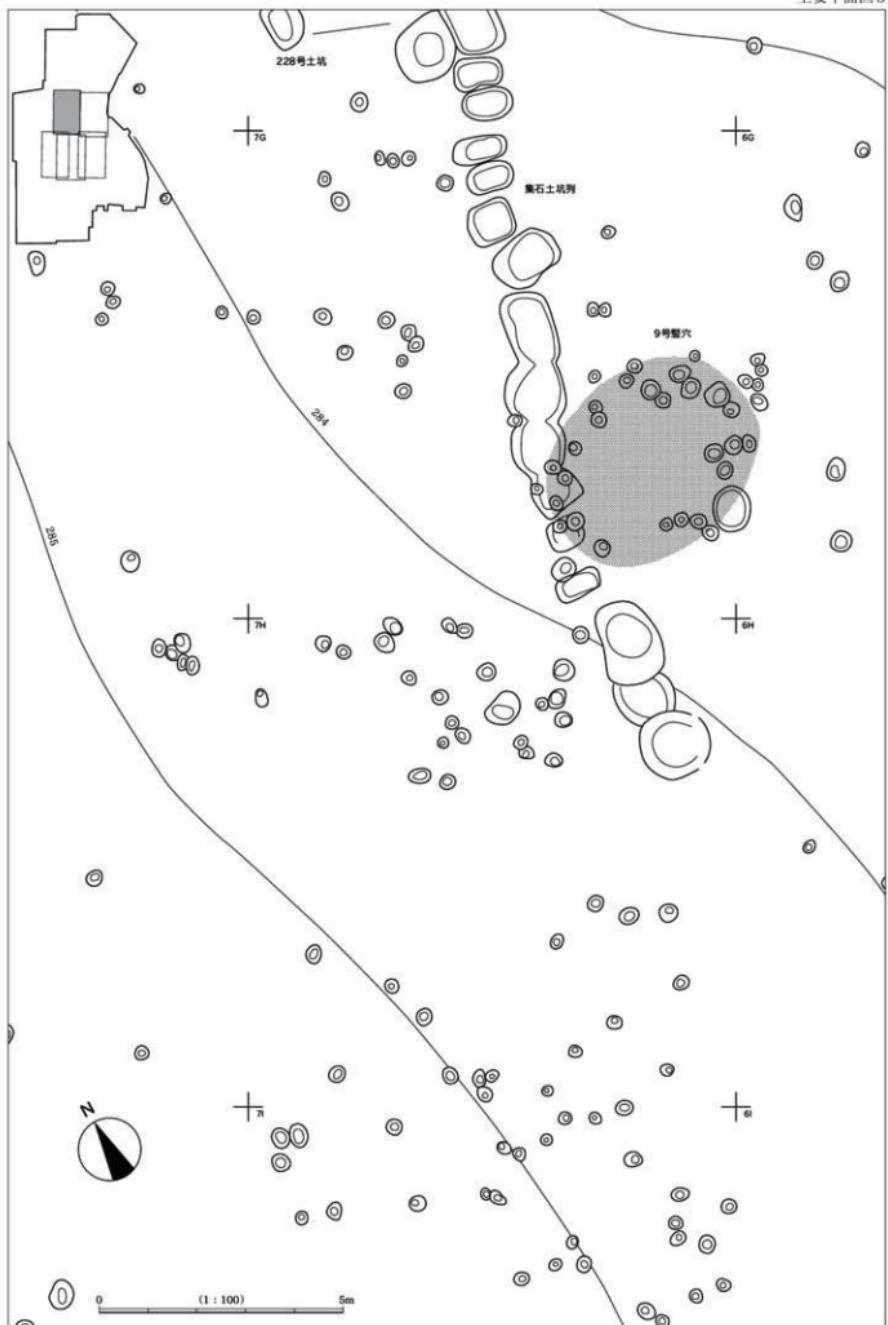




图版 6

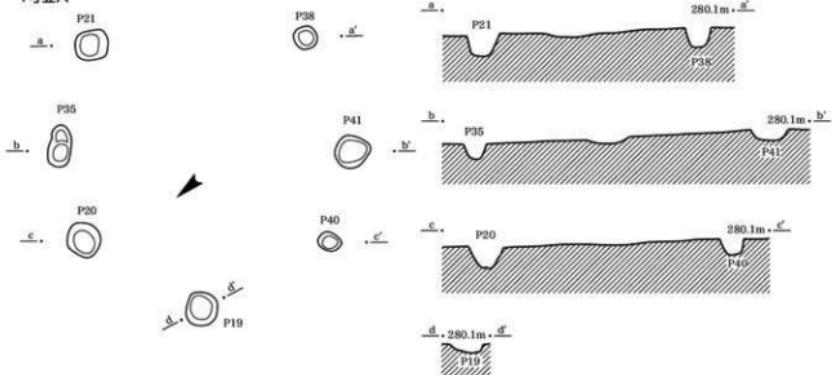
主要平面图4



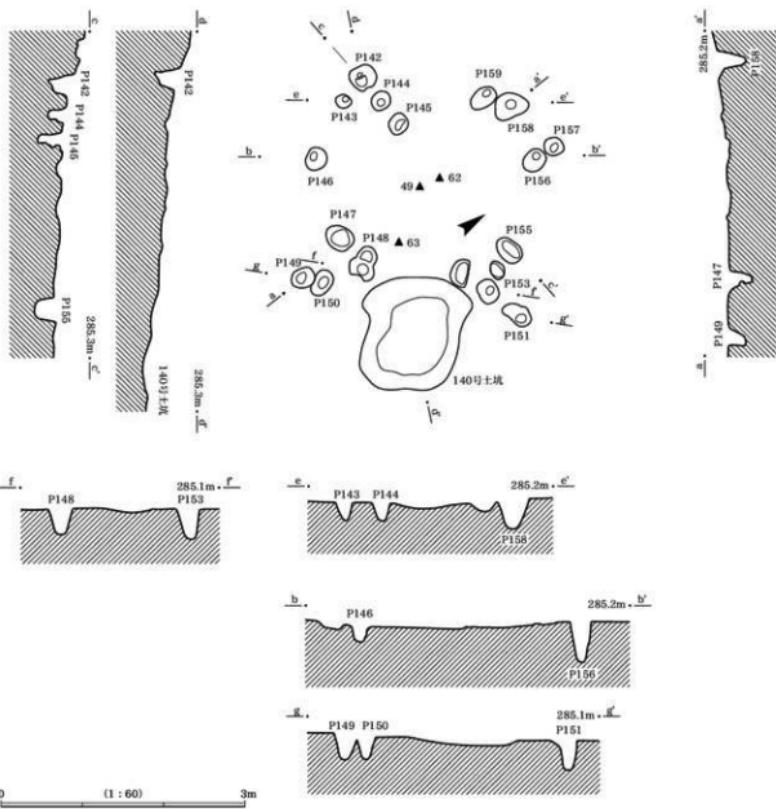


遺構個別図1 竪穴住居（1）

1号竪穴

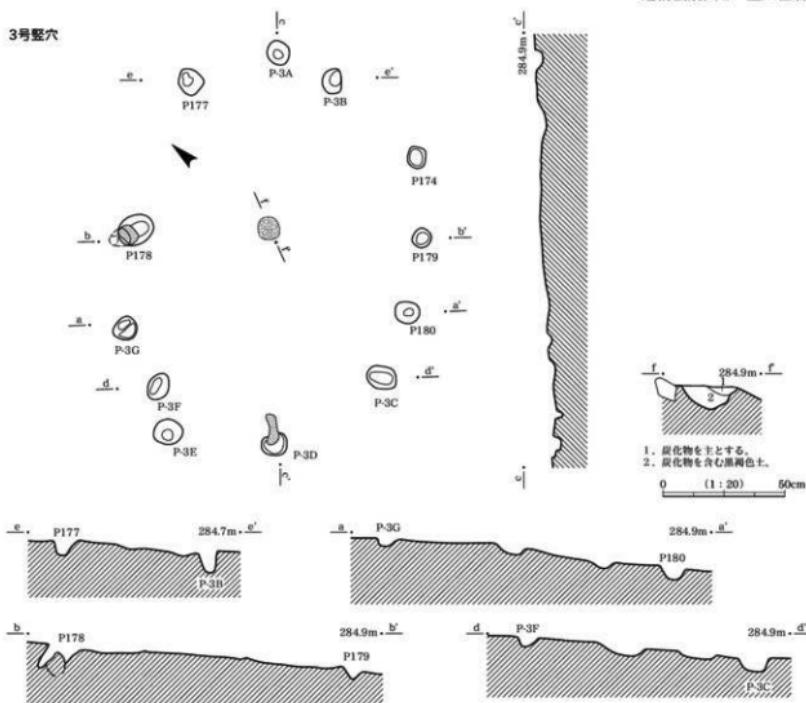


2号竪穴

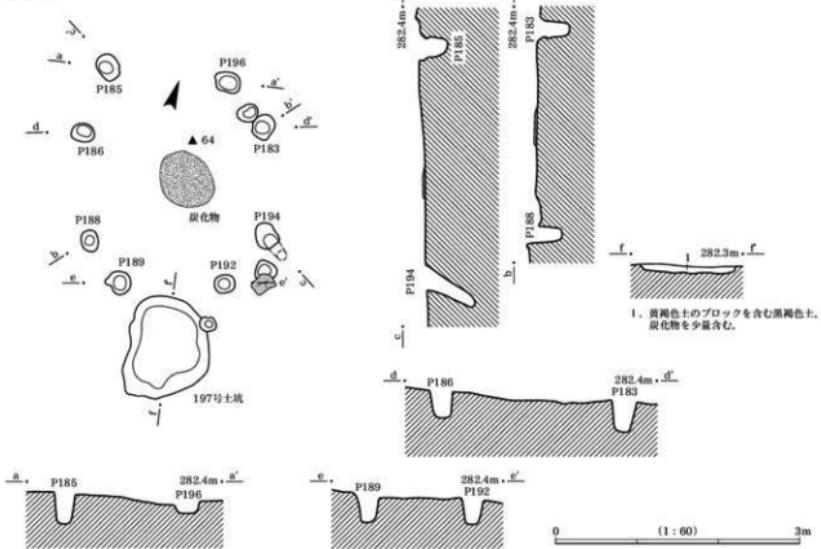


0 (1 : 60) 3m

3号竪穴

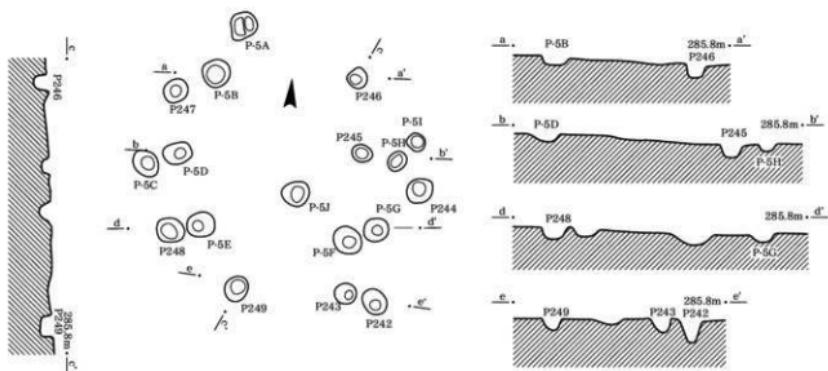


4号竪穴

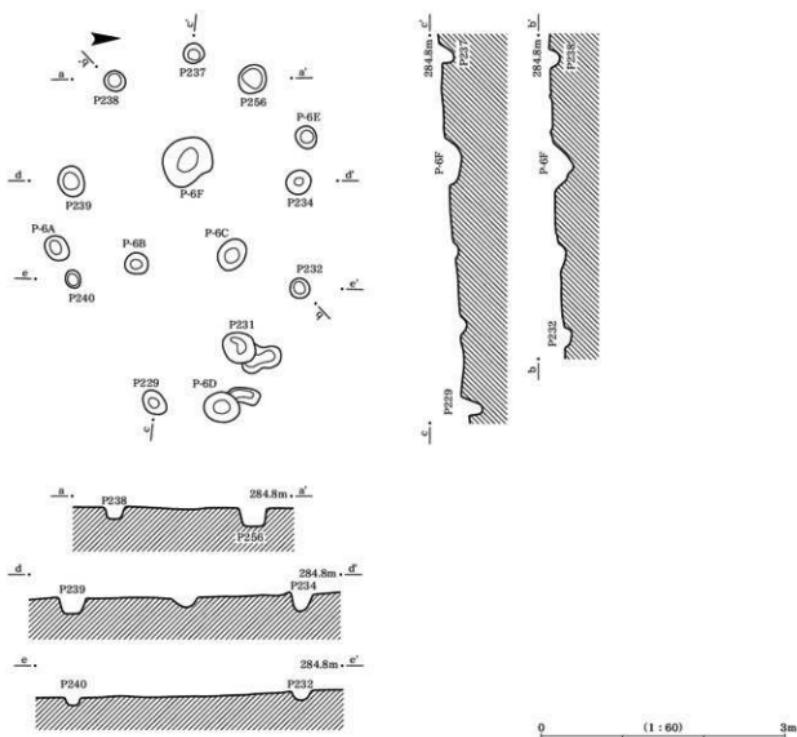


遺構個別図3 竪穴住居（3）

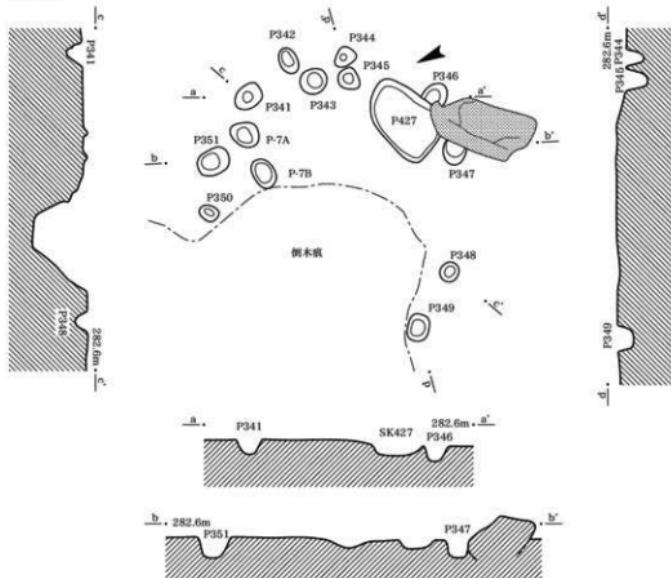
5骨堅穴



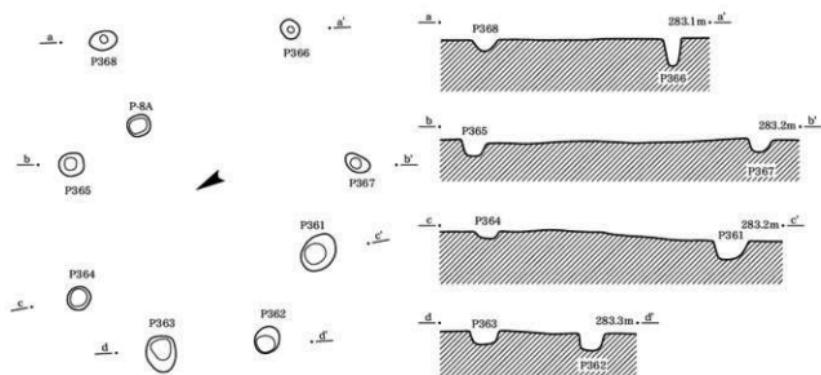
6月聚穴



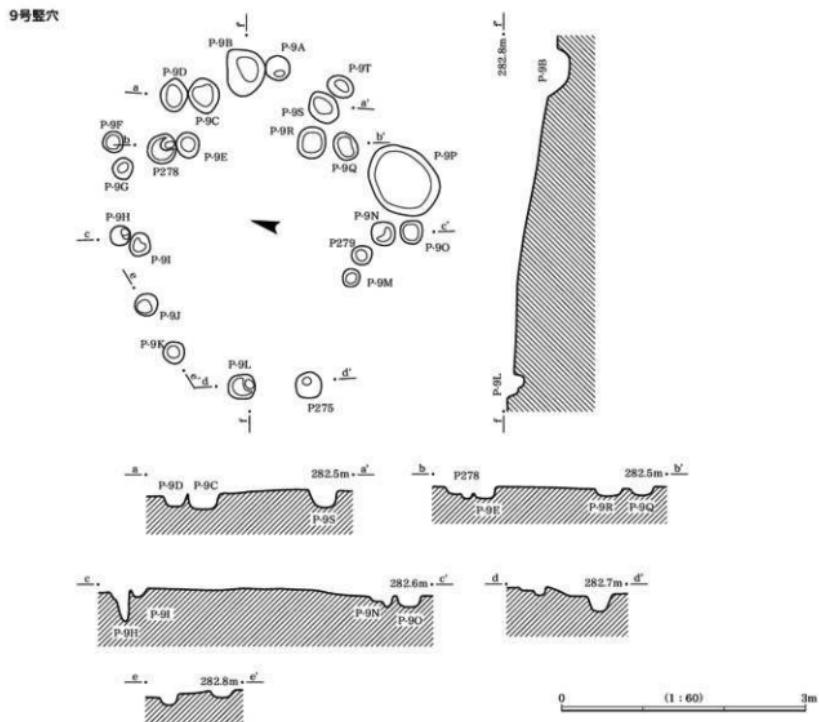
7号聚穴



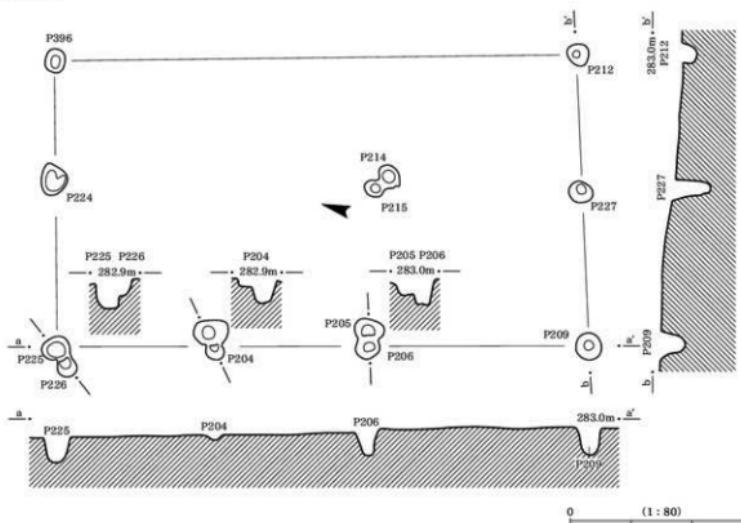
8号聚穴

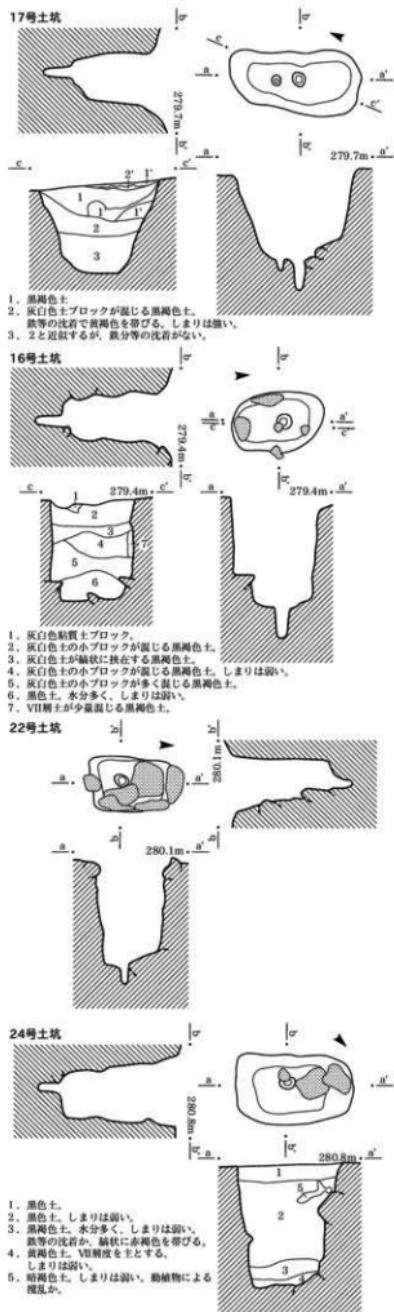


遺構個別図5 竪穴住居（5）・掘立柱建物

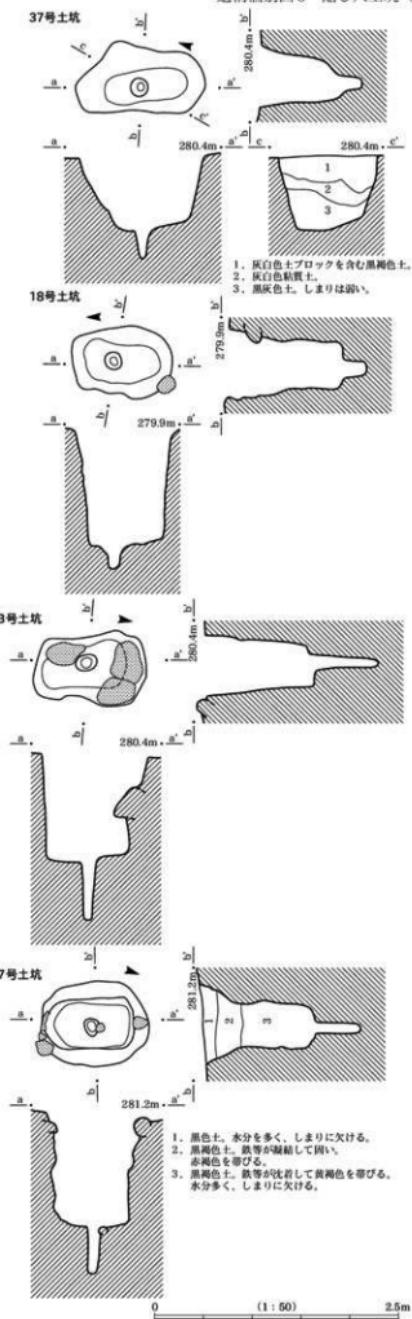


1号掘立柱建物

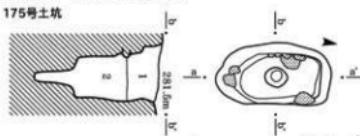




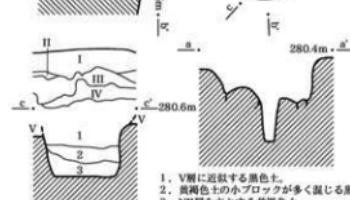
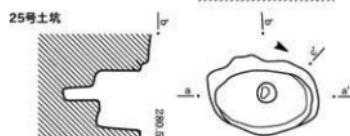
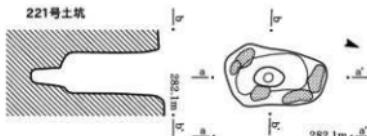
造構個別図6 蔽し穴土坑(1)



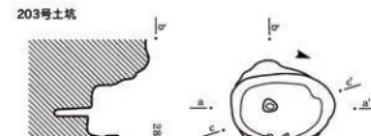
遺構個別図7 陥し穴土坑(2)



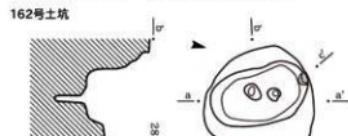
1. 黒褐色土。鉄等が沈着し、
縞状に黄褐色を帯びる。
2. Iに近似する。



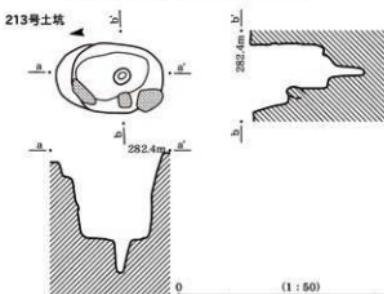
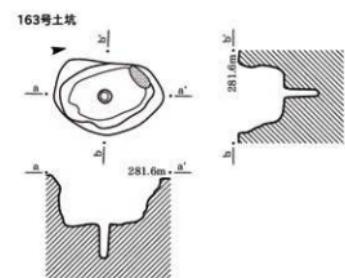
1. V形に近似する黒褐色土。
2. 黄褐色土の小ブロックが多く混じる黒褐色土。
3. VII層を主とする黄褐色土。



1. V形に近似する黒褐色土。
2. 黒褐色土。鉄等が沈着し黄褐色を帯びる。
3. 固くしまる。



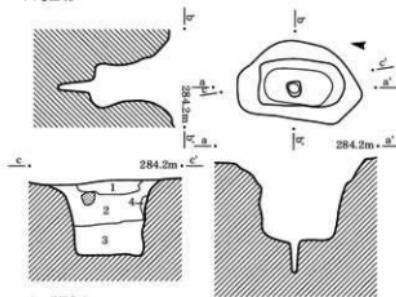
1. 黒褐色土。
2. 黒褐色土。しまりは弱い。
3. 黒褐色土と白褐色粘質土の互層。
4. 黒褐色土。
5. 黒褐色土。鉄等が沈着し、縞状に黄褐色を帯びる。



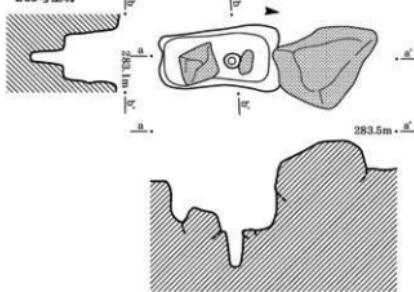
(1 : 50) 2.5m

遺構個別図8 陥し穴土坑(3)・銭貨埋納土坑

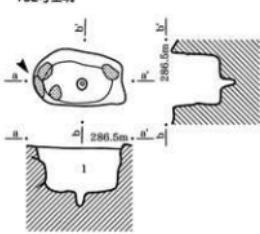
14号土坑



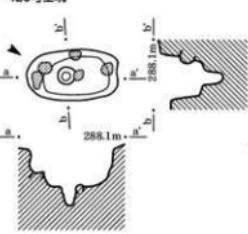
269号土坑



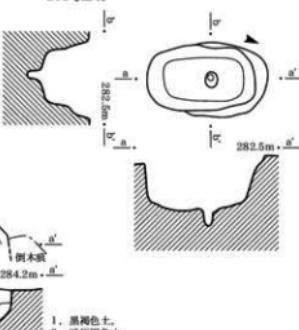
132号土坑



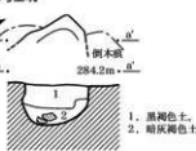
426号土坑



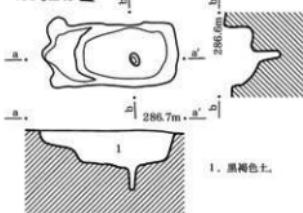
268号土坑



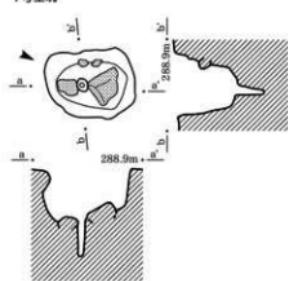
43号土坑



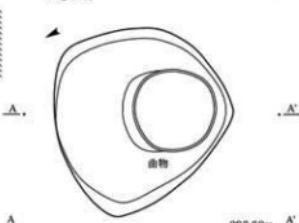
135号土坑



7号土坑



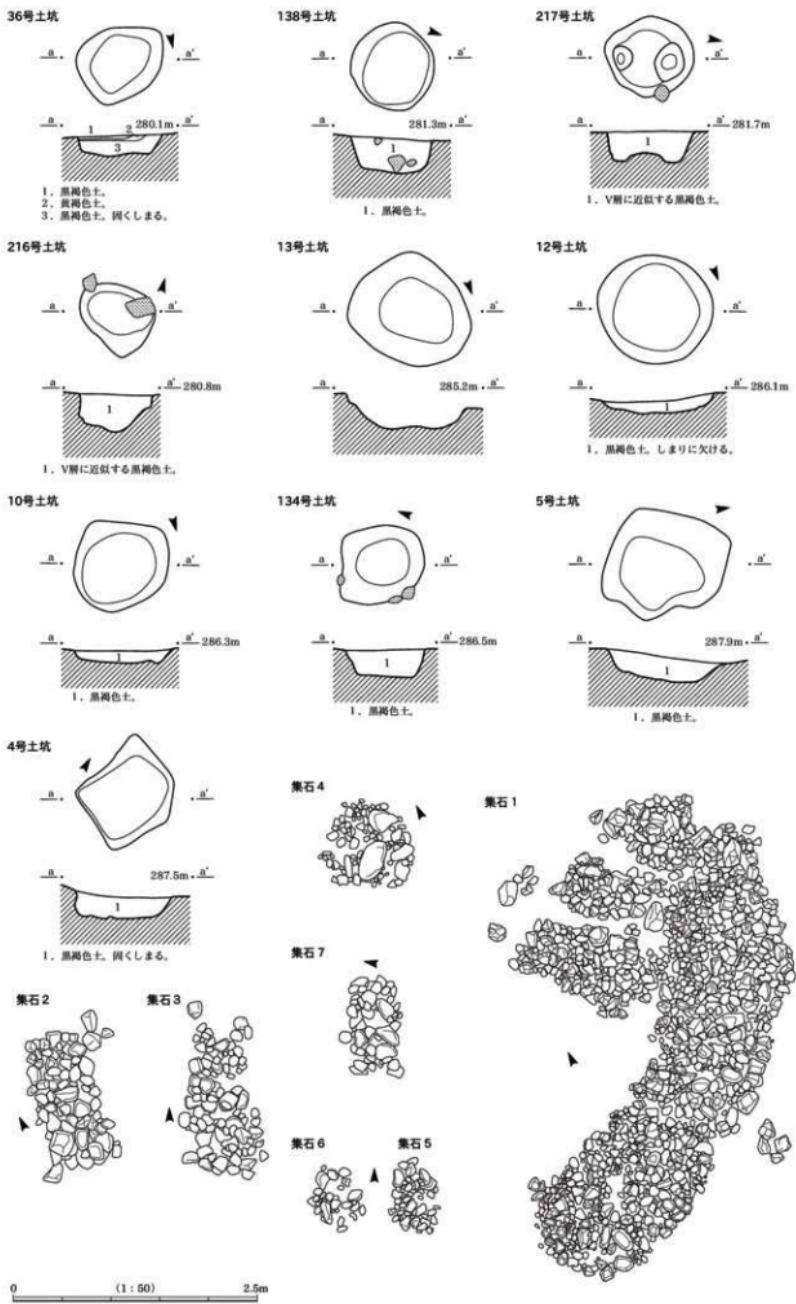
15号土坑



1. VII層上が多く混じる暗褐色土。しまりに欠ける。
2. VII層上に少しある黒色土。

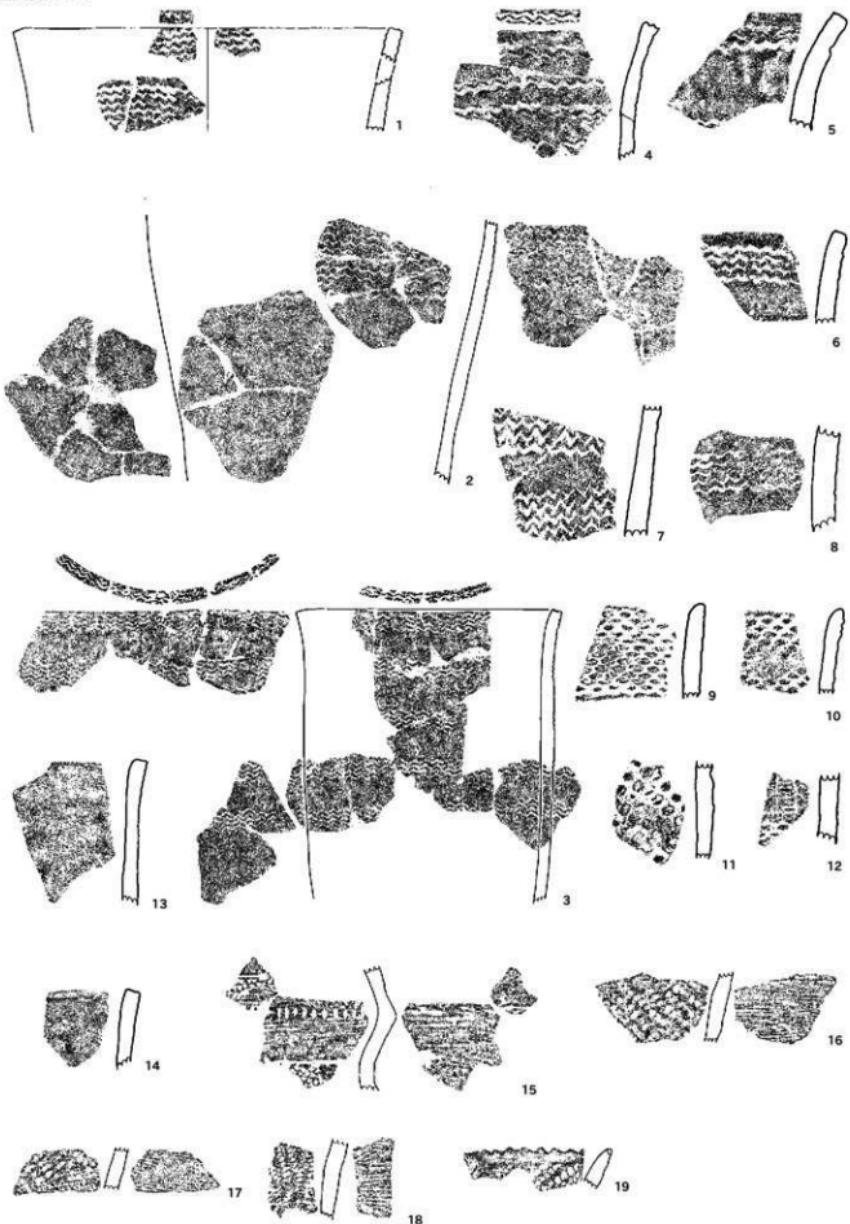
0 (1 : 50) 2.5m

遺構個別図9 土坑・集石



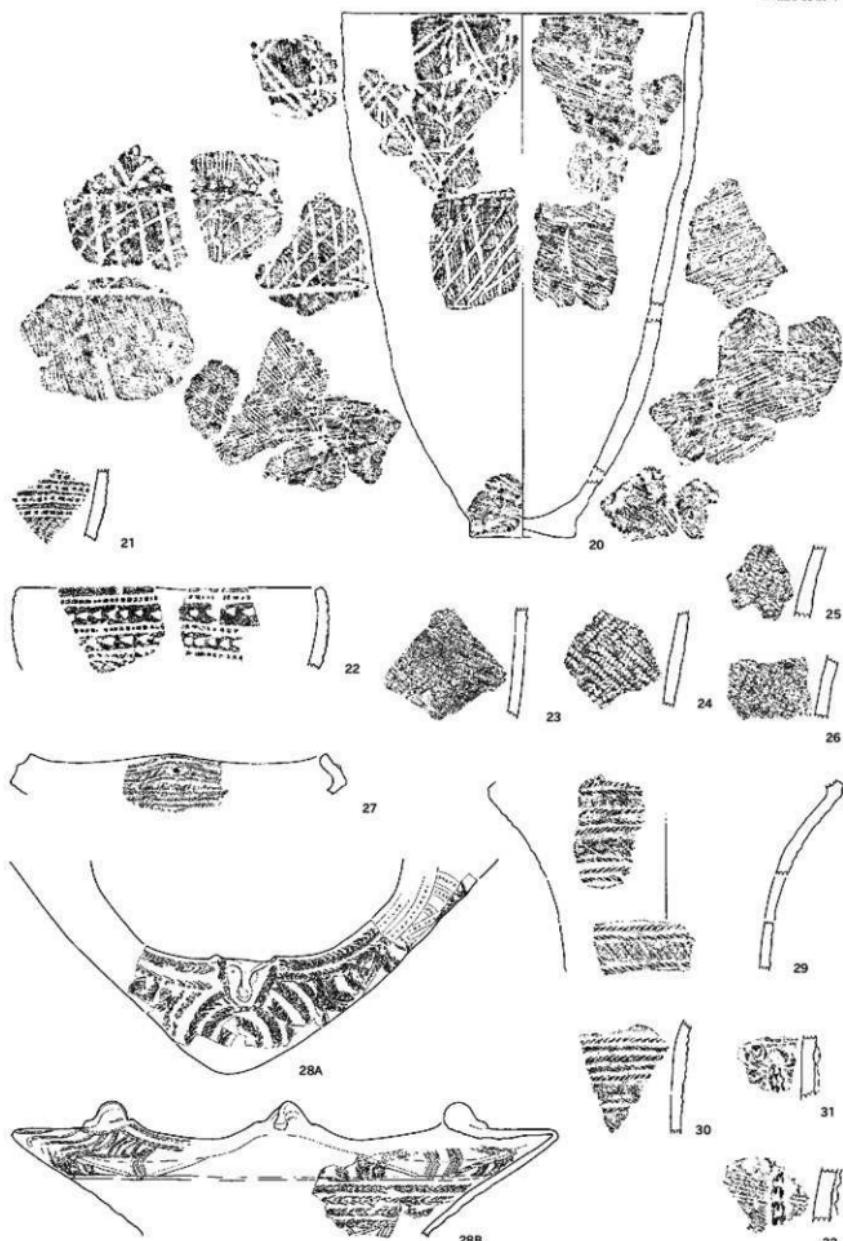


土器実測図(1)



0 1~3・15~19 (1:3) 15cm

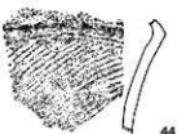
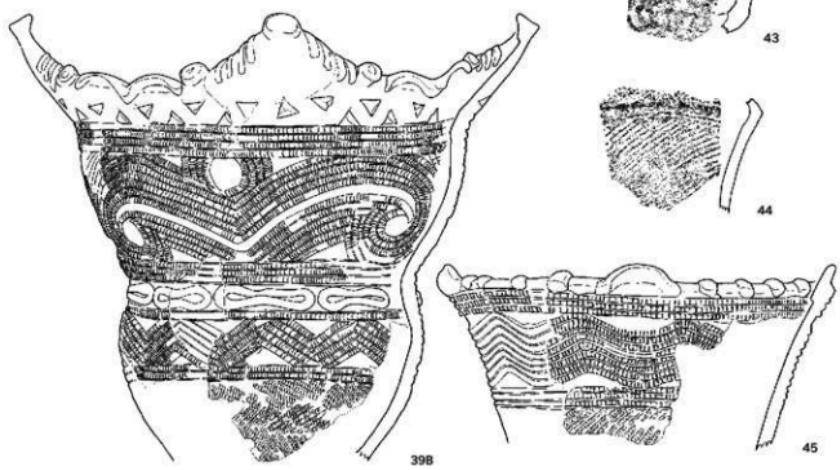
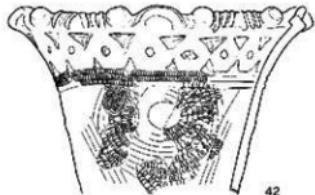
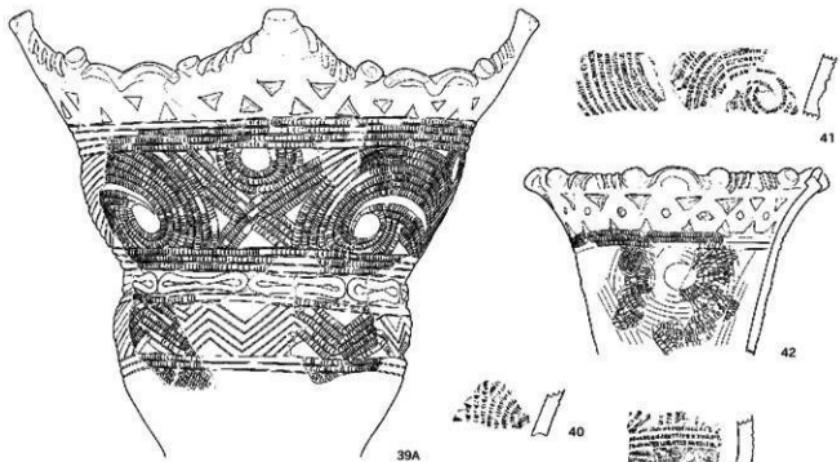
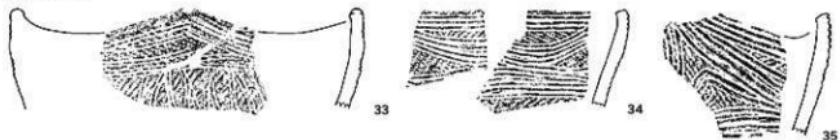
0 4~14 (1:2) 10cm

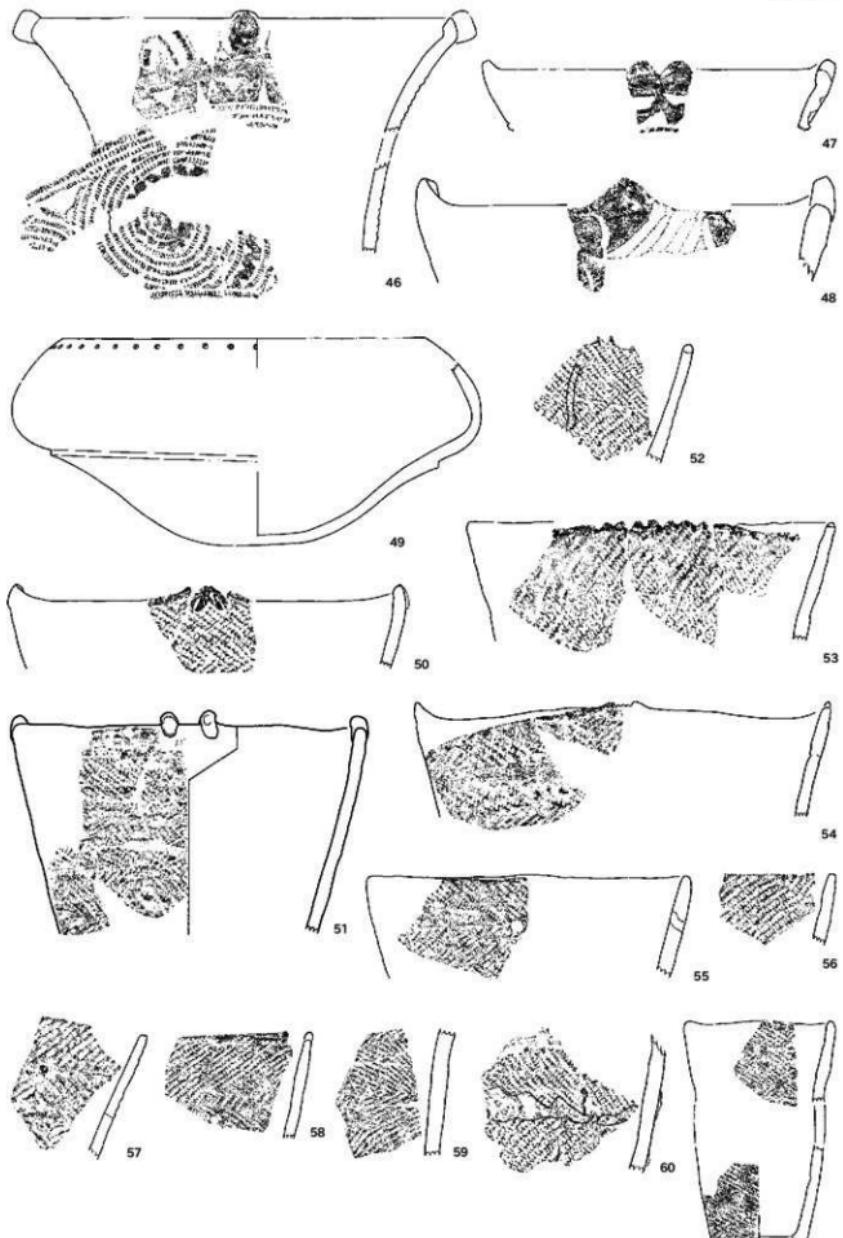


0 20~27・29~32 (1:3) 15cm

0 28 (1:4) 20cm

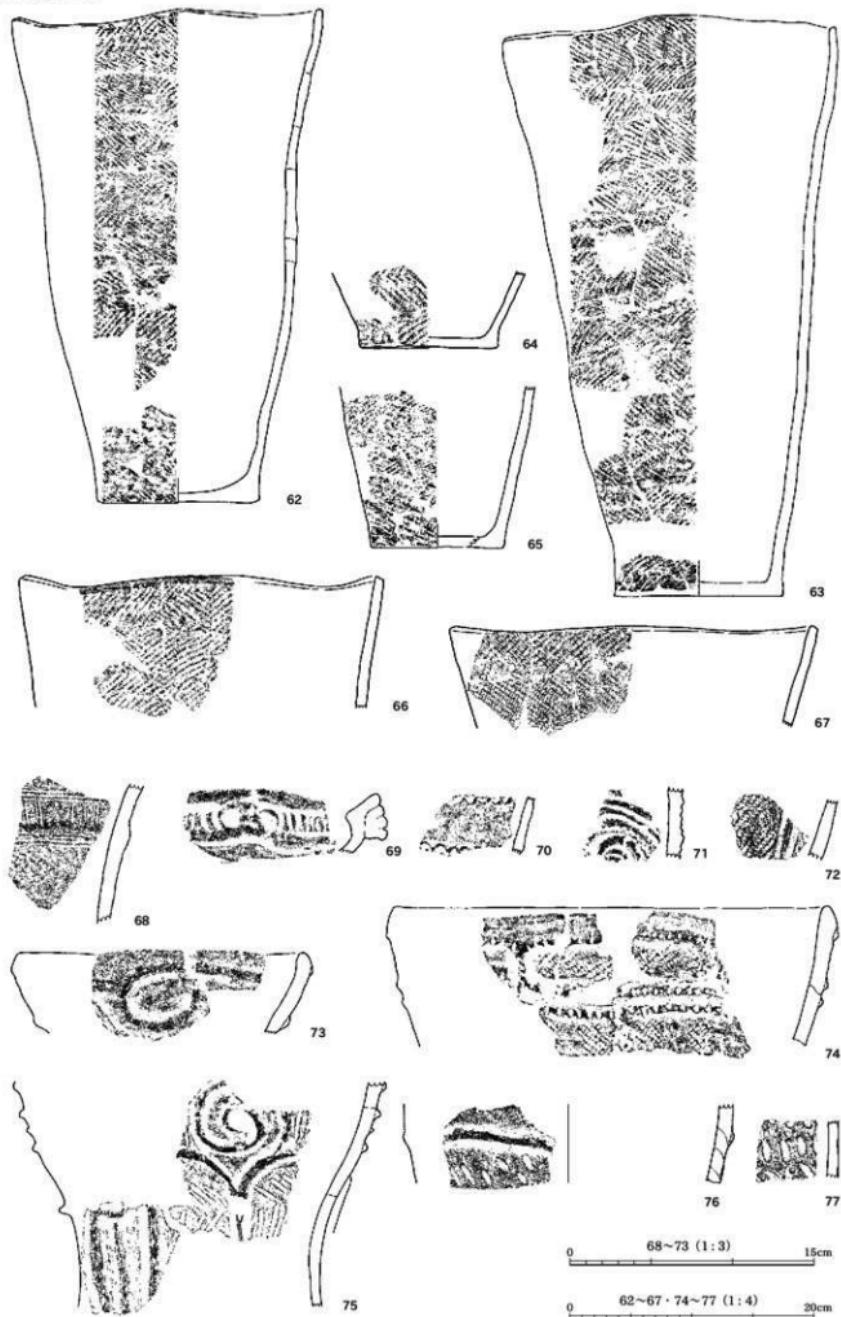
土器実測図 (3)

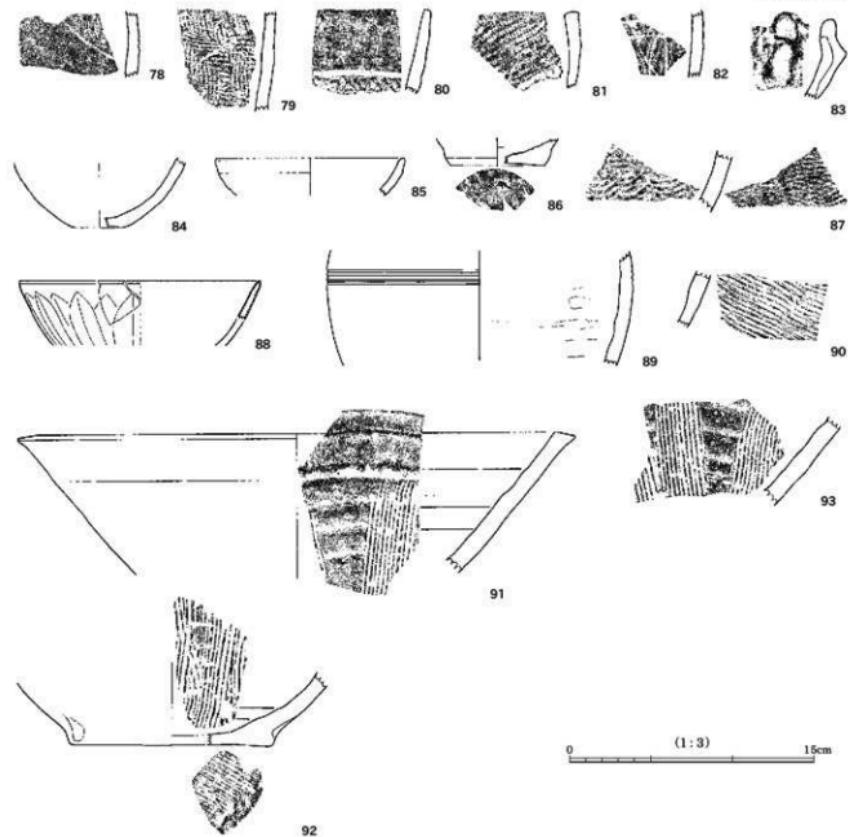




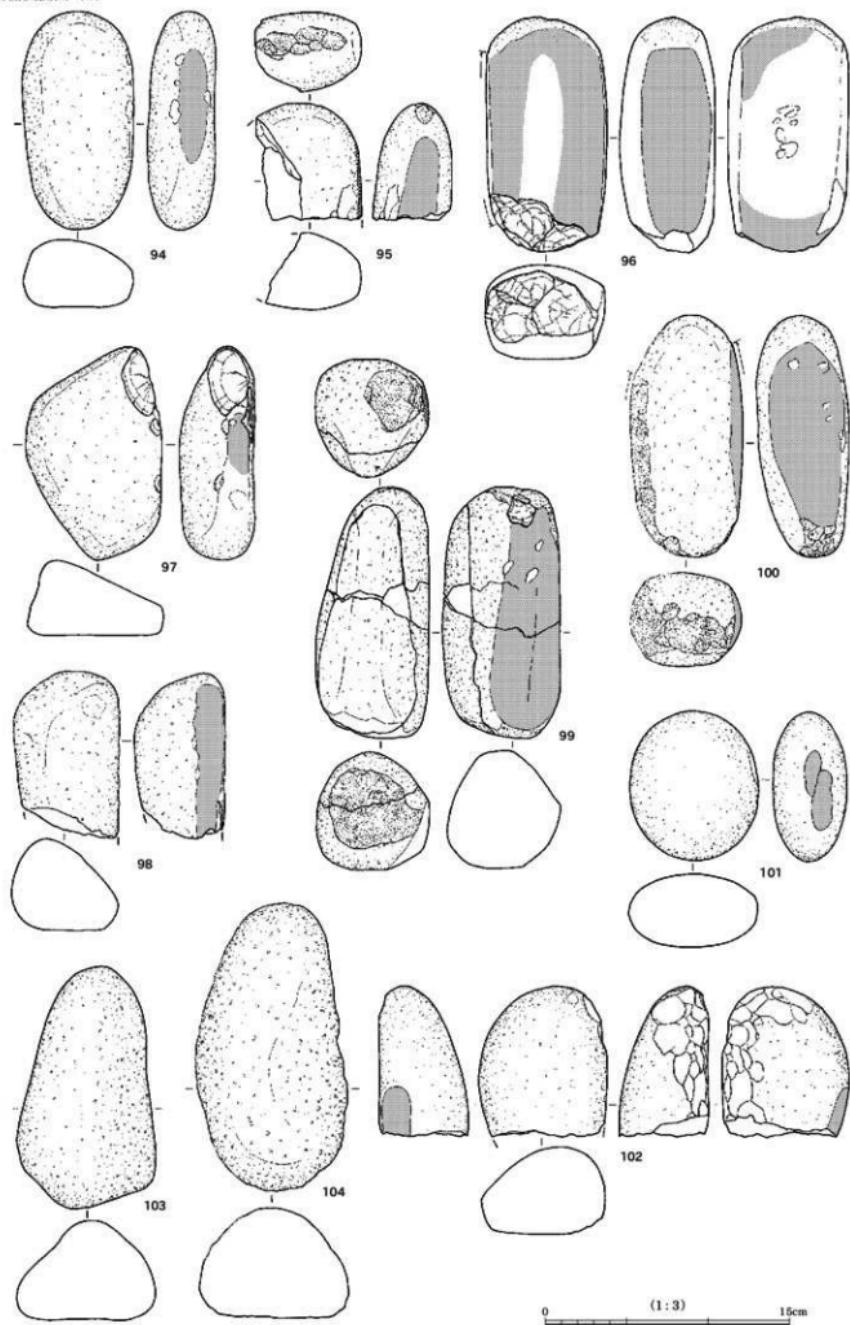
0 46~48・50~61 (1:3) 15cm

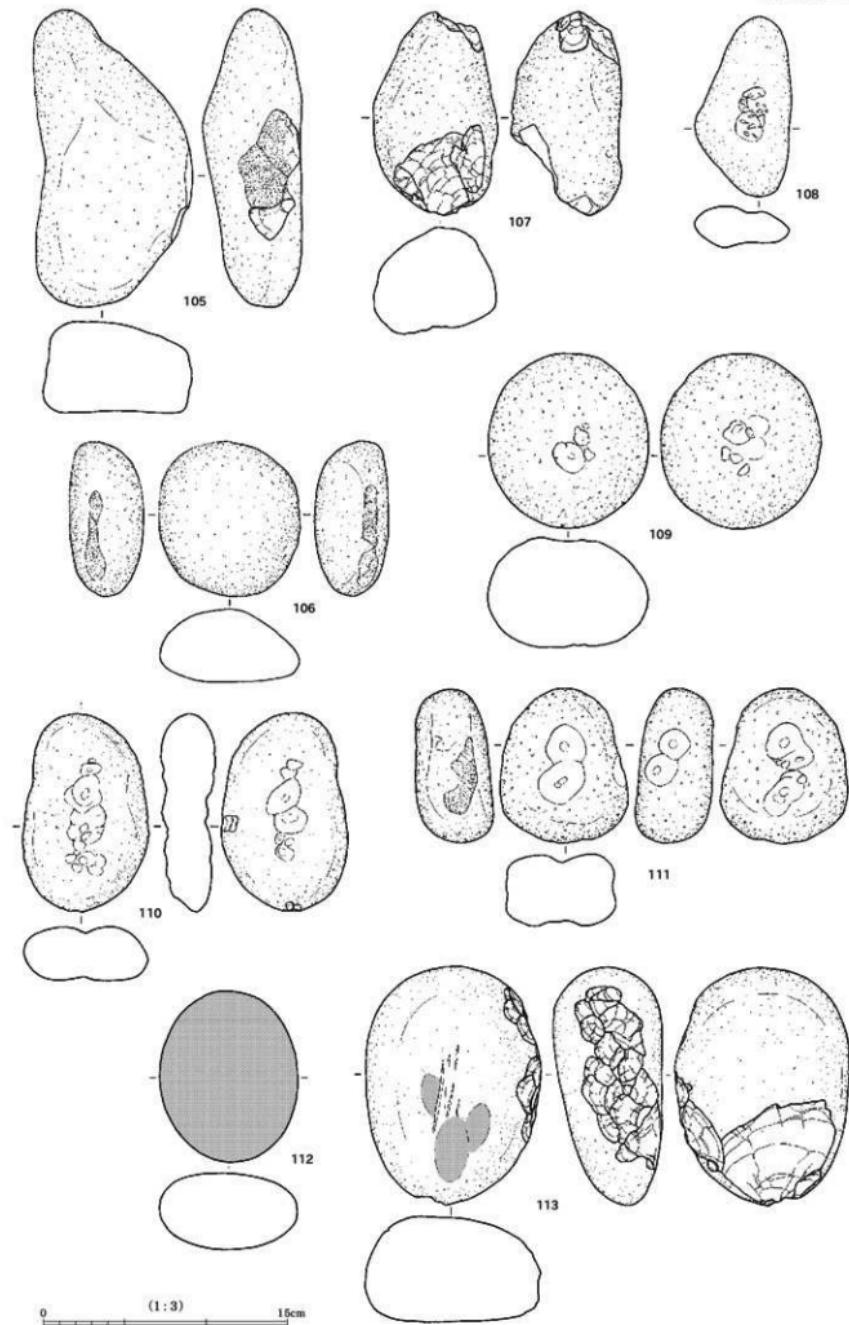
0 49 (1:4) 20cm



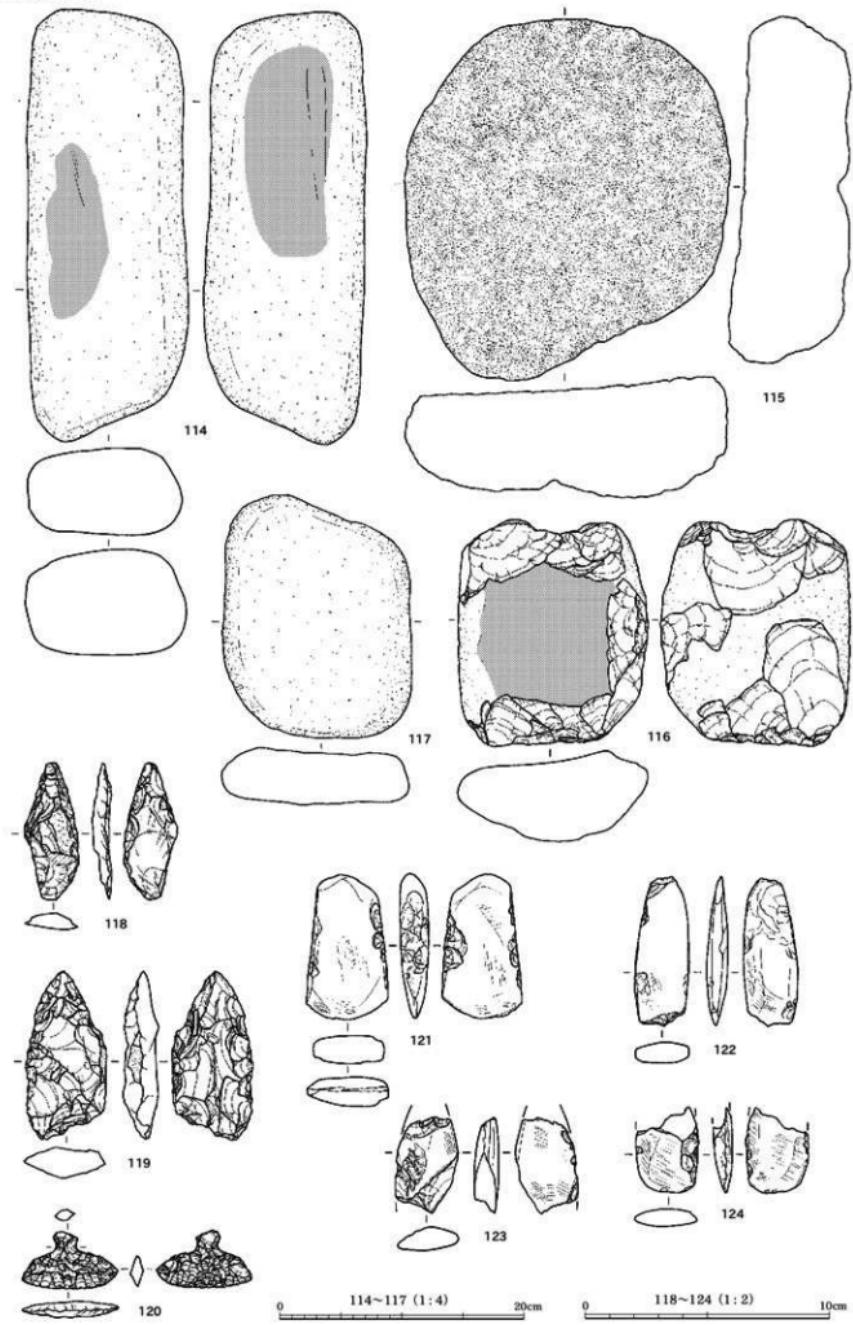


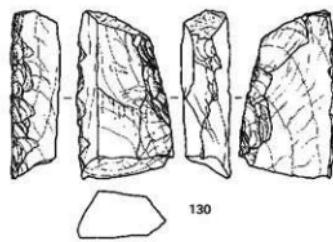
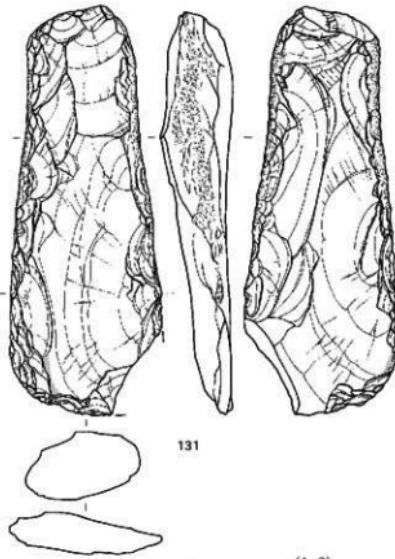
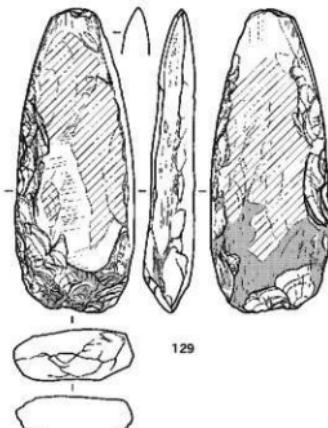
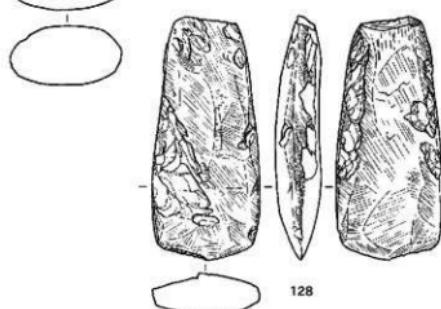
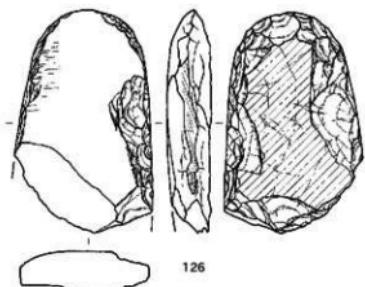
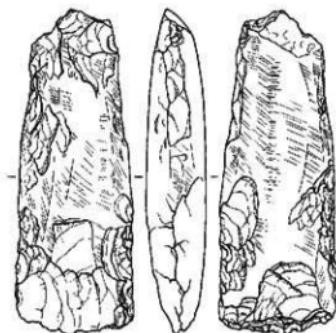
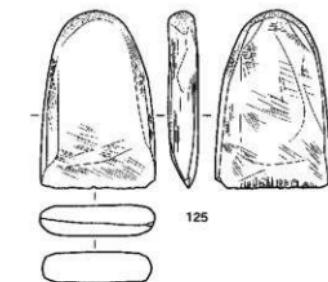
石器実測図(1)





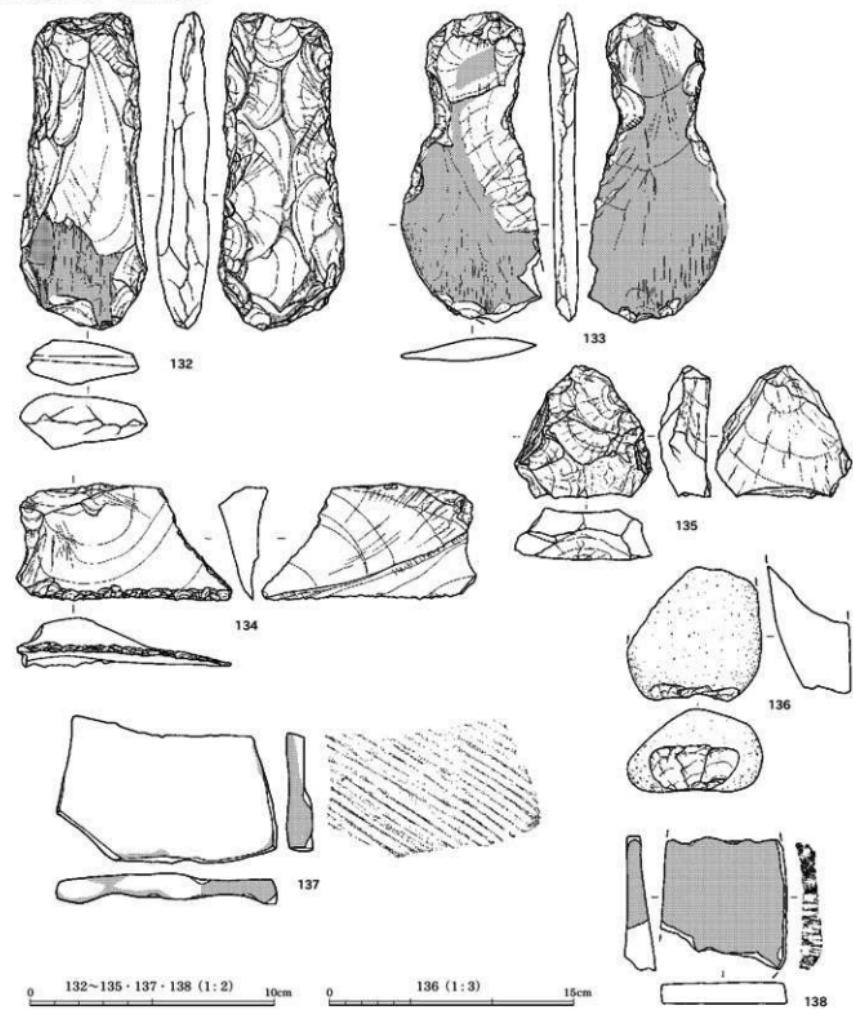
石器実測図(3)





0 (1:2) 10cm

石器実測図 (5)・土製品実測図





139 開元通宝



140 開元通宝



141 開元通宝



142 開元通宝



143 乾元重寶



144 乾元重寶



145 乾元重寶



146 乾元重寶



147 乾元重寶



149 天寶元寶



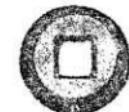
150 光天元寶（サシ17）



151 乾德元寶



152 乾德元寶



153 咸康元寶



154 周通元寶

155 周通元寶

156 唐國通寶

157 宋通元寶

158 宋通元寶

钱货拓影图(2)



159 宋通元宝



160 宋通元宝



161 太平通宝



162 太平通宝



163 太平通宝



164 淳化元宝



165 淳化元宝



166 淳化元宝



167 淳化元宝



168 至道元宝



169 至道元宝



170 至道元宝



171 咸平元宝



172 咸平元宝



173 咸平元宝



174 景德元宝



175 景德元宝



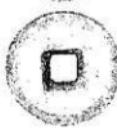
176 景德元宝



177 祥符元宝



178 祥符元宝



179 祥符通宝

180 祥符通宝

181 祥符通宝

182 天福通宝

183 天福通宝



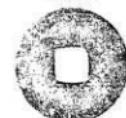
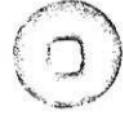
184 天聖元宝

185 天聖元宝

186 天聖元宝

187 明道元宝

188 明道元宝



189 明道元宝

190 景祐元宝

191 景祐元宝

192 景祐元宝

193 皇宋通宝



194 皇宋通宝

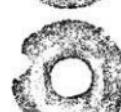
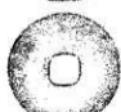
195 皇宋通宝

196 皇宋通宝

197 皇宋通宝

198 至和元宝

钱货拓影图(4)



199 至和元宝

200 至和元宝

201 至和通宝

202 至和通宝

203 至和通宝



204 嘉祐元宝

205 嘉祐元宝

206 嘉祐通宝

207 嘉祐通宝

208 嘉祐通宝



209 治平元宝

210 治平元宝

211 治平通宝

212 治平通宝

213 治平通宝



214 治平通宝

215 治平通宝

216 熙宁元宝

217 熙宁元宝

218 熙宁元宝



219 熙寧元宝



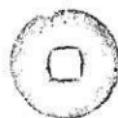
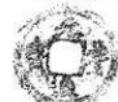
220 熙寧重宝·折二錢



221 元豐通寶



222 元豐通寶



223 元豐通寶



224 元祐通寶



225 元祐通寶



226 元祐通寶



227 紹聖元宝



228 紹聖元宝



229 紹聖元宝



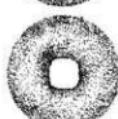
230 紹聖元宝



231 紹聖通寶



232 元符通寶



233 元符通寶



234 元符通寶



235 元符通寶



236 聖宋元宝



237 聖宋元宝



238 聖宋元宝

钱货拓影图(6)



239 圣宋元宝



240 大观通宝



241 大观通宝



242 政和通宝



243 政和通宝



244 政和通宝·折二钱



245 政和通宝·折二钱



246 宣和元宝



247 宣和通宝



248 宣和通宝



249 宣和通宝·折二钱



250 宣和通宝·折二钱



251 宣和通宝·折二钱



252 宣和通宝·折二钱



253 宣和通宝·折二钱



254 清寧通宝



255 建炎通宝



256 建炎通宝



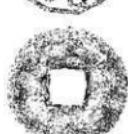
257 建炎通宝·折二钱



258 建炎通宝·折二钱



259 紹興元宝



260 紹興元宝·折二錢



261 紹興通寶



262 紹興通寶·折二錢



263 淳熙元宝



264 淳熙元宝



265 淳熙元宝



266 淳熙元宝



267 淳熙元宝



268 淳熙元宝



269 淳熙元宝



270 绍熙元宝



271 绍熙元宝



272 绍熙元宝



273 绍熙元宝



274 绍熙元宝



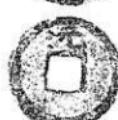
275 建元通宝



276 建元通宝



277 建元通宝



278 嘉泰通宝

钱货拓影图(8)



279 嘉泰通宝



280 嘉泰通宝



281 嘉泰通宝



282 开禧通宝



283 开禧通宝



284 嘉定通宝



285 嘉定通宝



286 嘉定通宝



287 嘉定通宝



288 嘉定通宝



289 嘉定通宝



290 嘉定通宝



291 嘉定通宝



292 大宋元宝



293 大宋元宝



294 大宋元宝



295 绍定通宝



296 绍定通宝



297 绍定通宝



298 绍定通宝



299 紹定通寶



300 建平元寶



301 建平元寶



302 建熙通寶



303 建熙通寶



304 淳祐元寶

305 淳祐元寶

306 淳祐元寶

307 淳祐元寶

308 淳祐元寶



309 淳祐元寶

310 皇宋元寶

311 皇宋元寶

312 皇宋元寶



313 同慶通寶



314 景定元寶

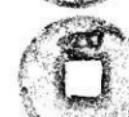
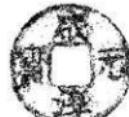
315 景定元寶

316 景定元寶

317 咸淳元寶

318 咸淳元寶

钱货拓影图(10)



319 咸淳元宝

320 咸淳元宝·折二钱

321 咸淳元宝·折二钱

322 咸淳元宝·折二钱

323 天盛元宝



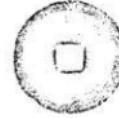
324 正隆元宝

325 正隆元宝

326 大定通宝

327 大定通宝

328 大定通宝



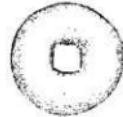
329 至大通宝

330 至大通宝

331 至正通宝

332 至正通宝

333 天定通宝



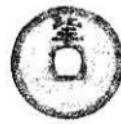
334 大德通宝

335 大中通宝

336 大中通宝

337 大中通宝

338 洪武通宝



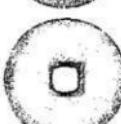
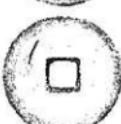
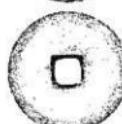
339 洪武通宝

340 洪武通宝

341 洪武通宝

342 洪武通宝

343 永樂通宝



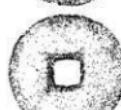
344 永樂通宝

345 永樂通宝

346 永樂通宝

347 宣德通宝

348 宣德通宝



349 弘治通宝

350 弘治通宝

351 海東通宝

352 海東通宝

353 朝鮮通宝



354 朝鮮通宝

355 大平興宝

356 大治通宝

357 大世通宝

358 大世通宝

銭貨拓影図 (12)・木製品実測図



369 大世通宝



360 大世通宝



361 世高通宝



362 世高通宝



363 世高通宝



364 世高通宝



365 神功開宝



366 神功開宝



367 富壽神宝



368 島銭「宋聖開宝」



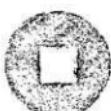
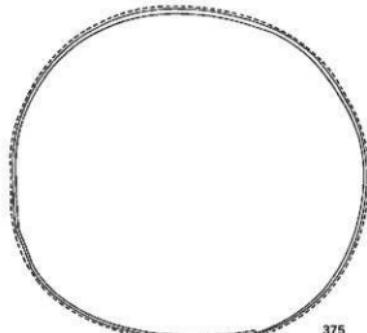
369 島銭「宋通元宝」



370 島銭「太平通宝」(サシ34)



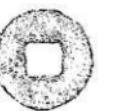
371



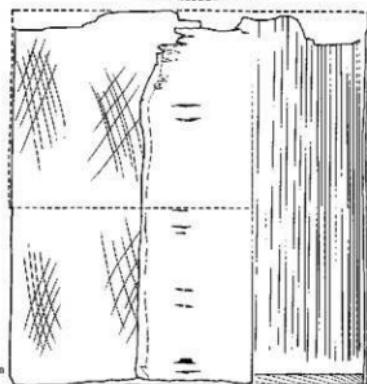
372



373



374





小重遺跡全景 1



▲ 小重遺跡周辺の景観（南西から）



15号土坑 銭貨埋納状況2



15号土坑 銭貨埋納状況1



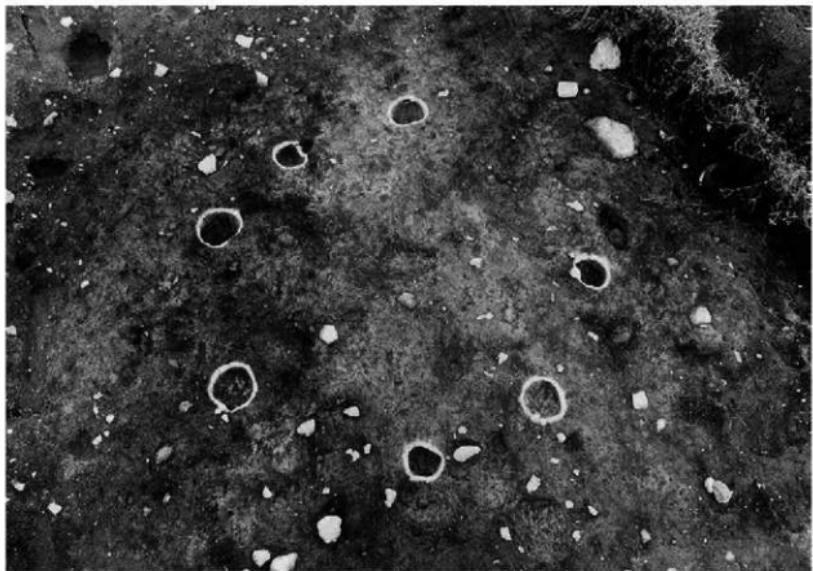
15号土坑 銭貨埋納状況3



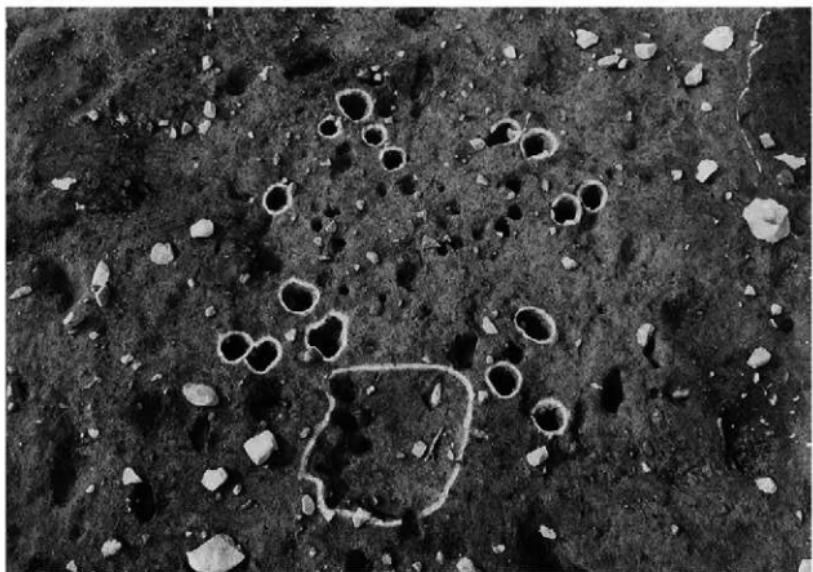
15号土坑 銭貨埋納状況4



15号土坑 曲物設置状況(北から)



1号竖穴(南から)



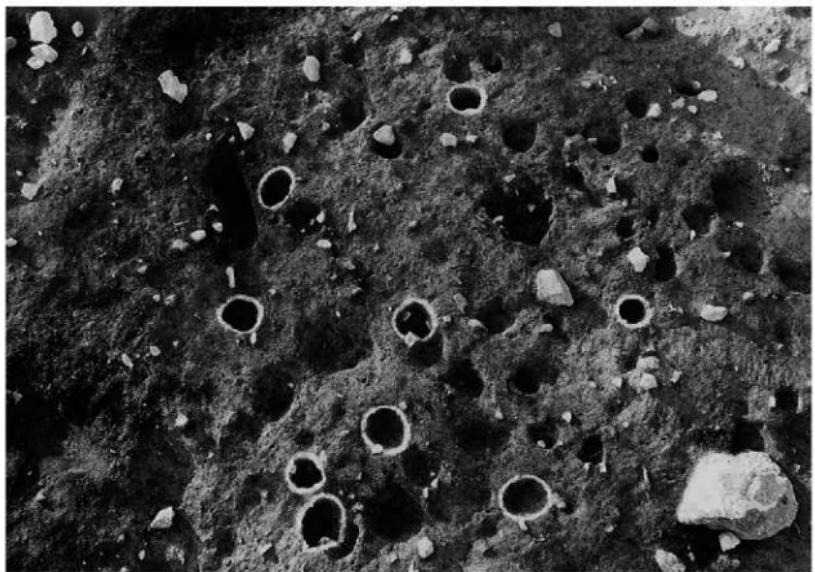
2号竖穴(東から)



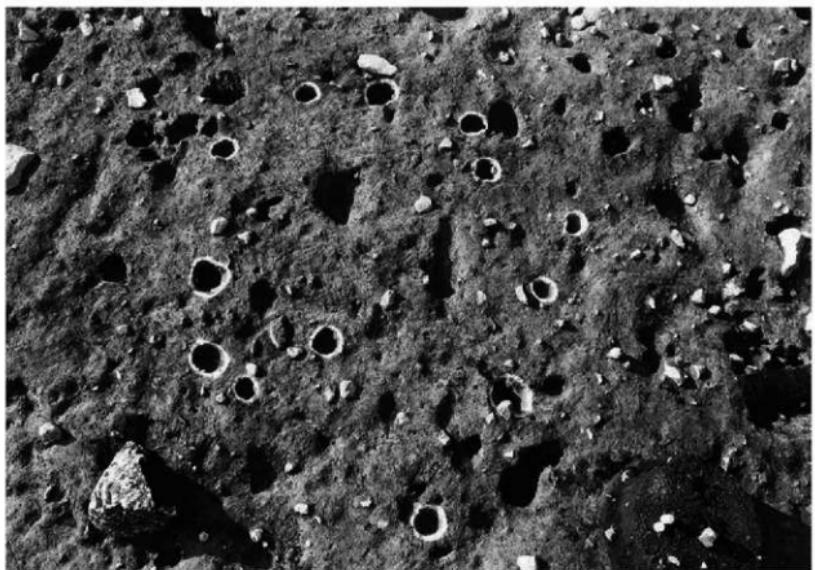
3号竪穴(西から)



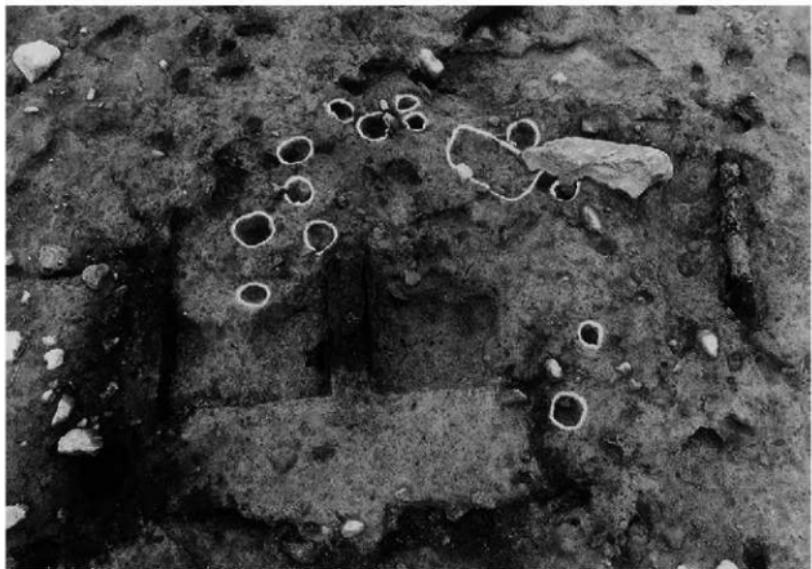
4号竪穴(南から)



5号豊穴(東から)



6号豊穴(東から)



7号竪穴(西から)



8号竪穴(東から)



土層堆積状況1 (5-K・L境界)



土層堆積状況2 (L-6・7境界)



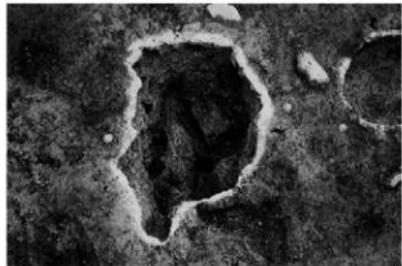
土層堆積状況3 (M-6・7境界)



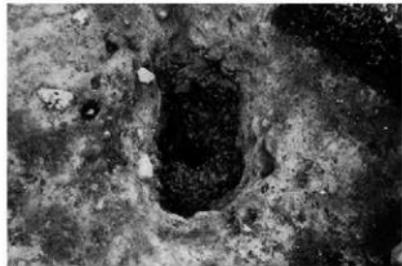
土層堆積状況4 (C-4・5境界)



土層堆積状況5 (B-4・5境界)



7号土坑(南から)



14号土坑(南から)



14号土坑断面(西から)



16号土坑(東から)



16号土坑(北から)



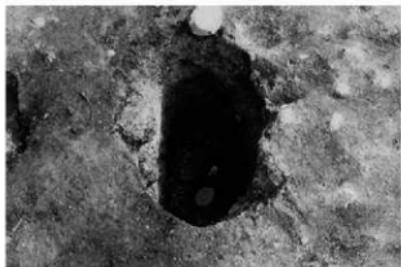
16号土坑断面(西から)



17号土坑(北から)



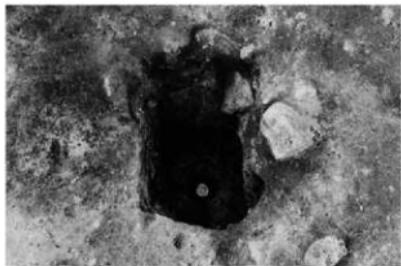
17号土坑断面(西から)



18号土坑（北から）



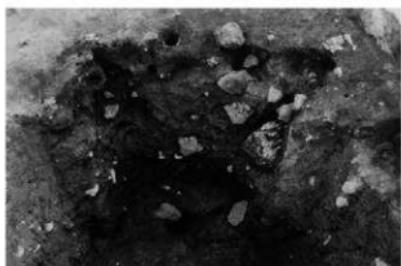
22号土坑（西から）



23号土坑（南から）



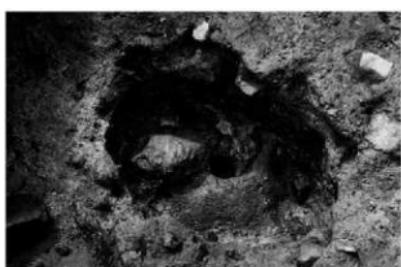
23号土坑断面（東から）



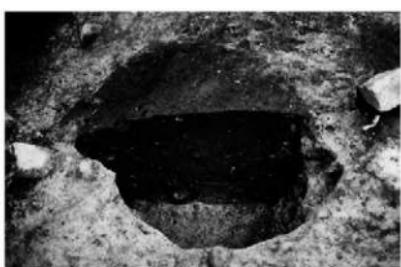
24号土坑（北東から）



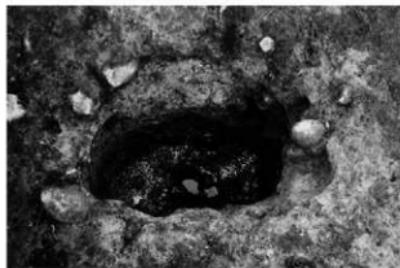
24号土坑断面（北東から）



25号土坑（北から）



25号土坑断面（北から）



27号土坑(東から)



27号土坑断面(北から)



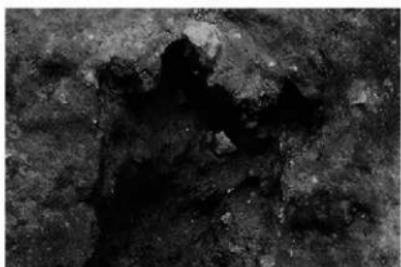
37号土坑(北から)



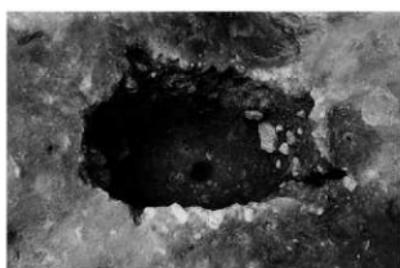
37号土坑断面(西から)



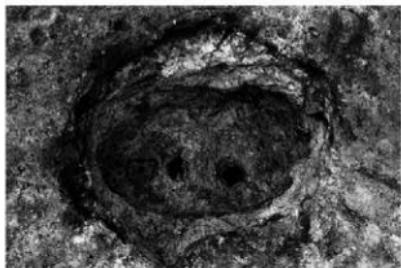
43号土坑断面(東から)



132号土坑(北東から)



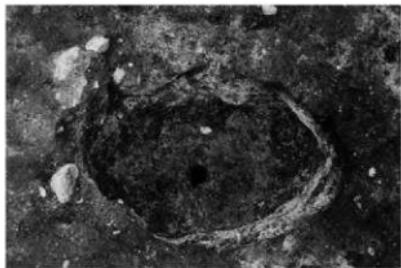
135号土坑(北から)



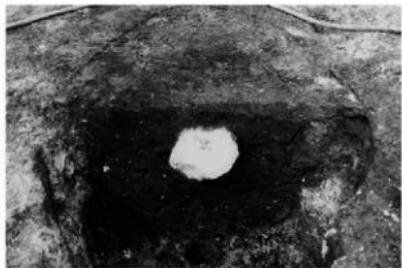
162号土坑(東から)



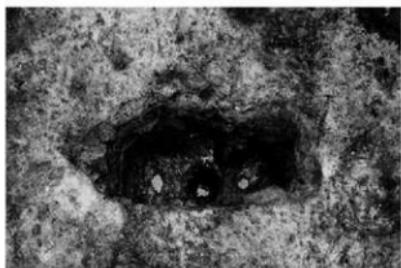
162号土坑断面(北から)



163号土坑(東から)



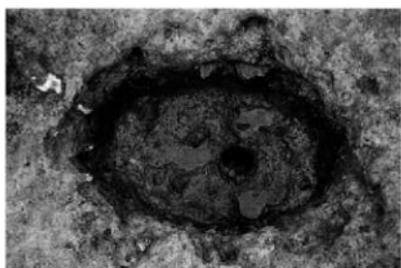
163号土坑断面(南から)



175号土坑(東から)



175号土坑断面(南から)



203号土坑(西から)



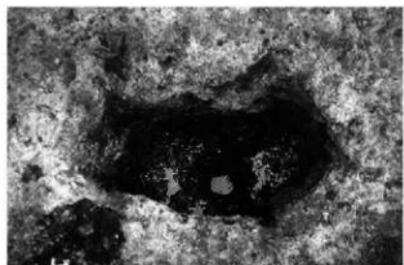
203号土坑断面(西から)



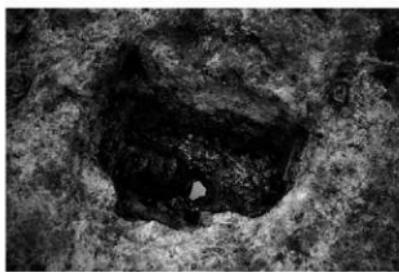
213号土坑(北から)



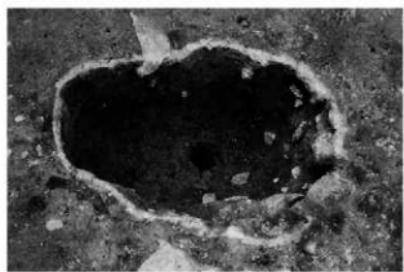
213号土坑断面(東から)



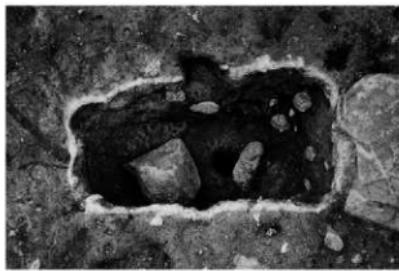
221号土坑(西から)



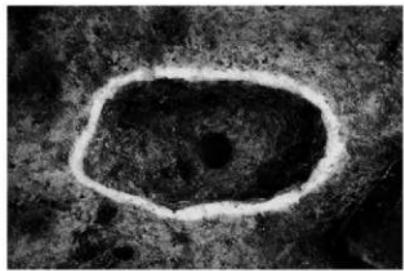
228号土坑(東から)



268号土坑(東から)



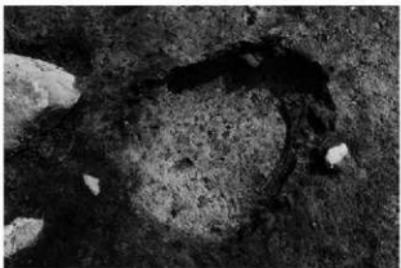
269号土坑(東から)



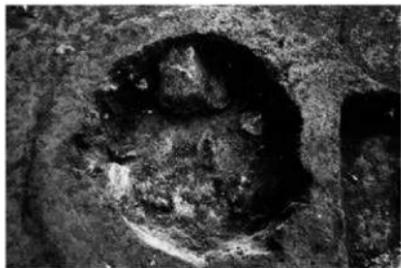
426号土坑(南西から)



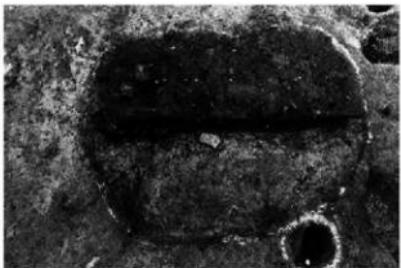
34号土坑



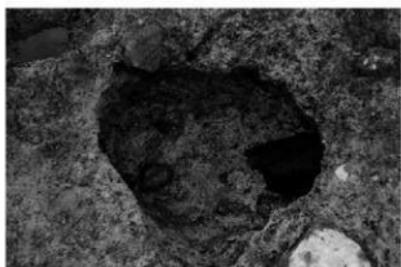
36号土坑



99号土坑



197号土坑 (4号竖穴) 断面



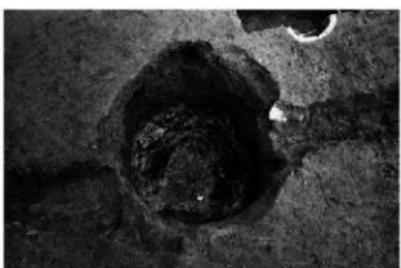
216号土坑



216号土坑断面



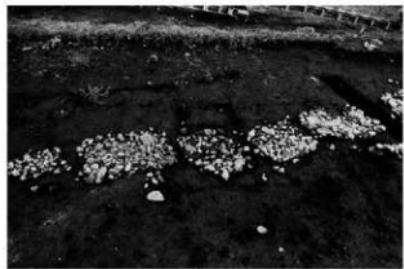
217号土坑



66号土坑



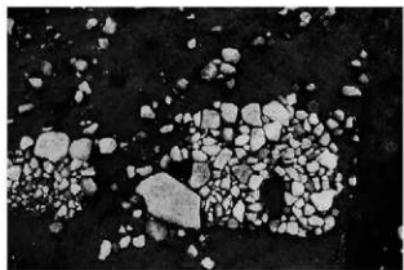
集石土坑列 北側部分(西から)



集石土坑列 中央部分(西から)



集石土坑列 南側部分(西から)



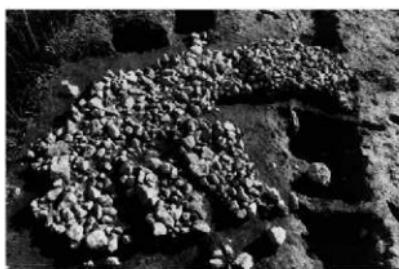
集石土坑列 441号～443号土坑(東から)



60号土坑



106号土坑



1号集石



溝跡(F・G-5・6グリッド)



小重遺跡全景2（南東から）



調査風景



調査風景

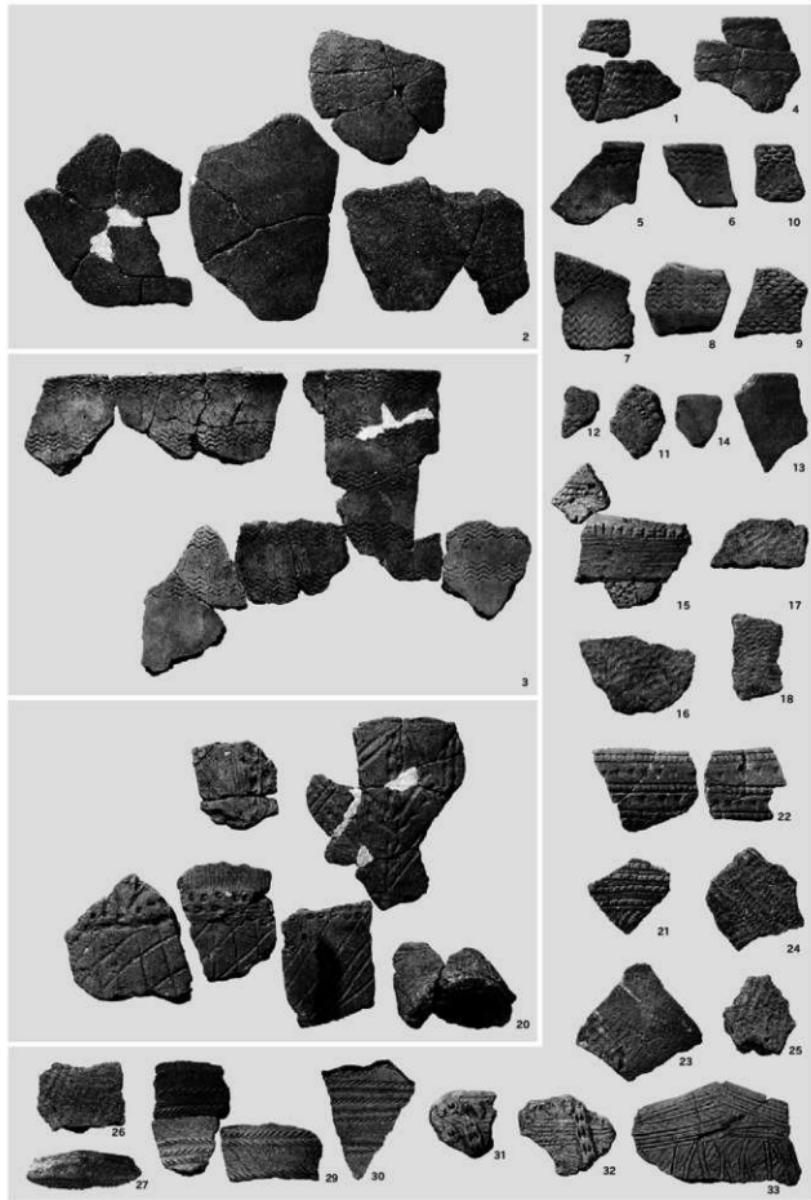


III層上面の礫産出状況 (J・K-5・6 グリッド)

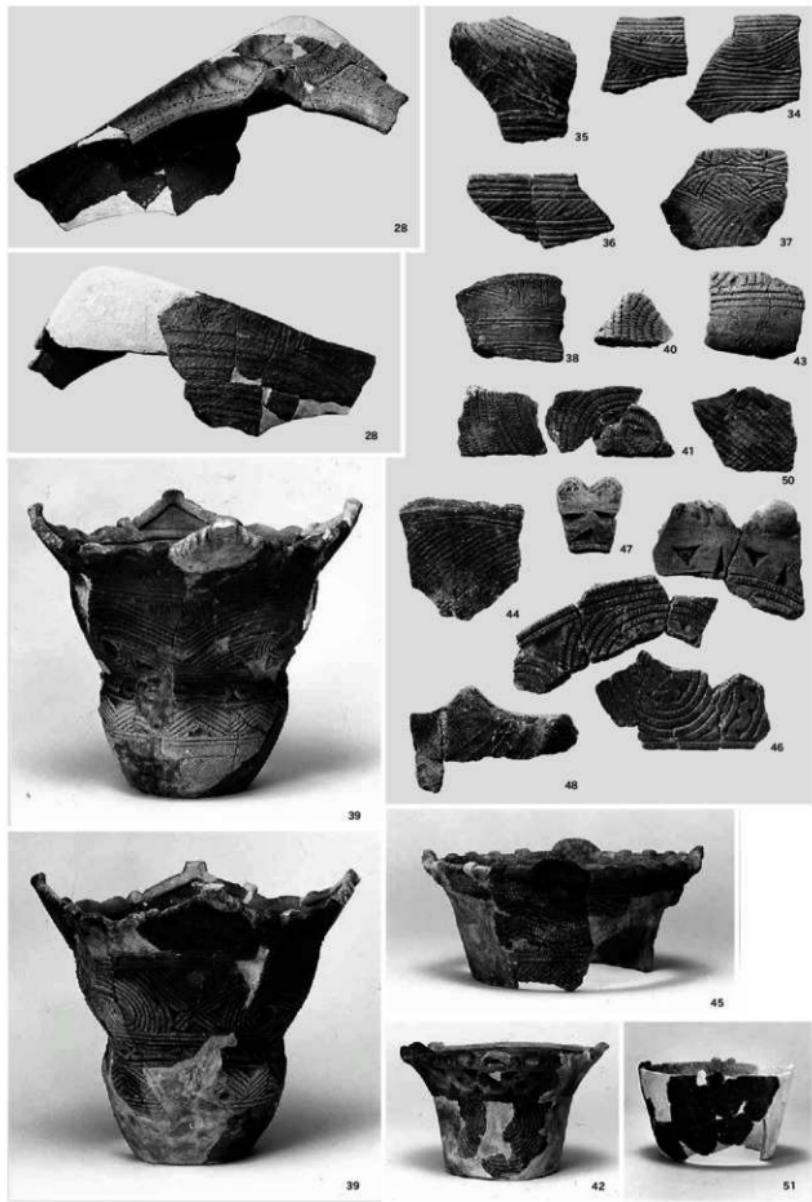


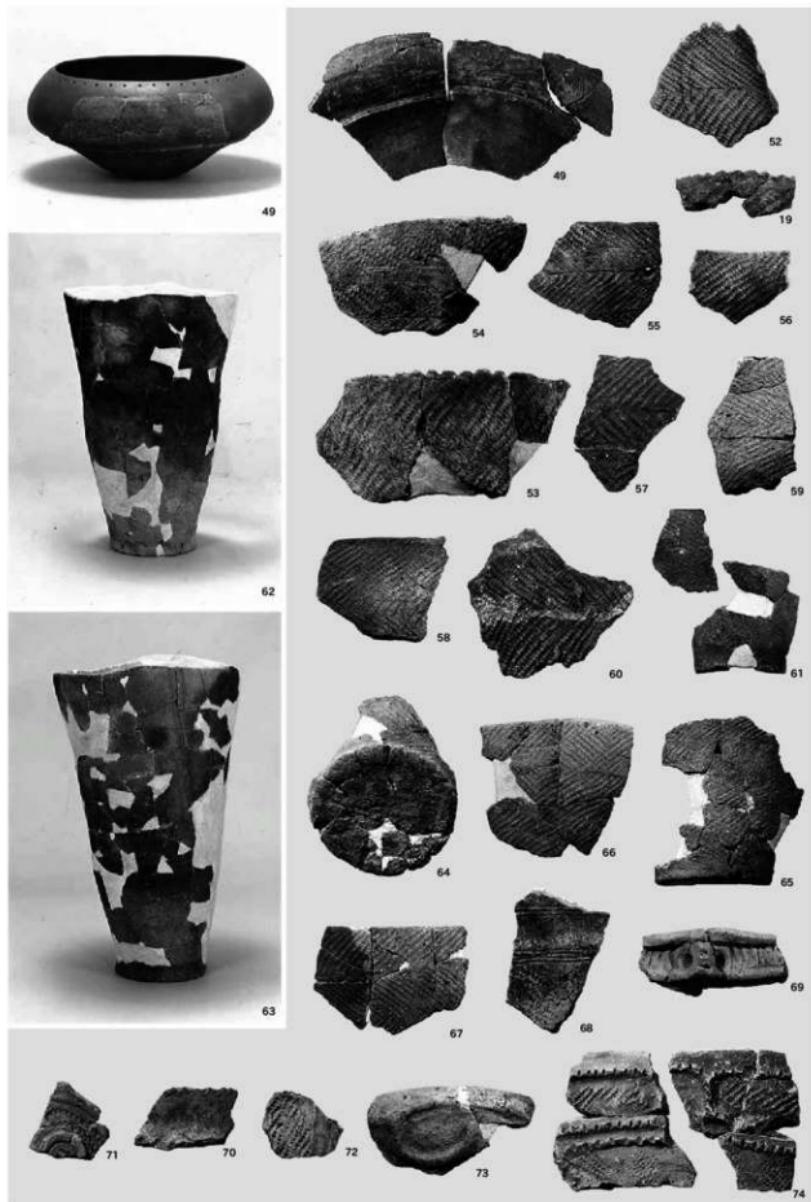
国道18号際の調査経過

土器 (1)

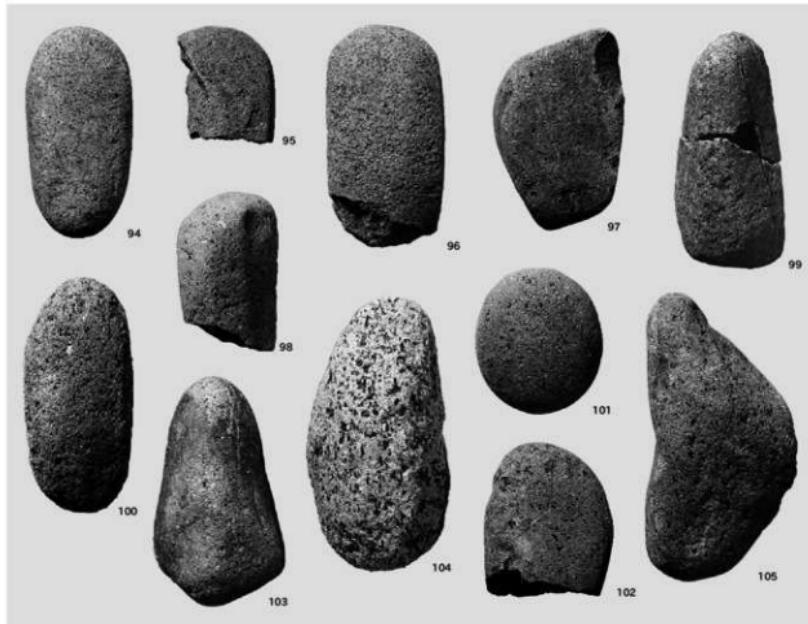
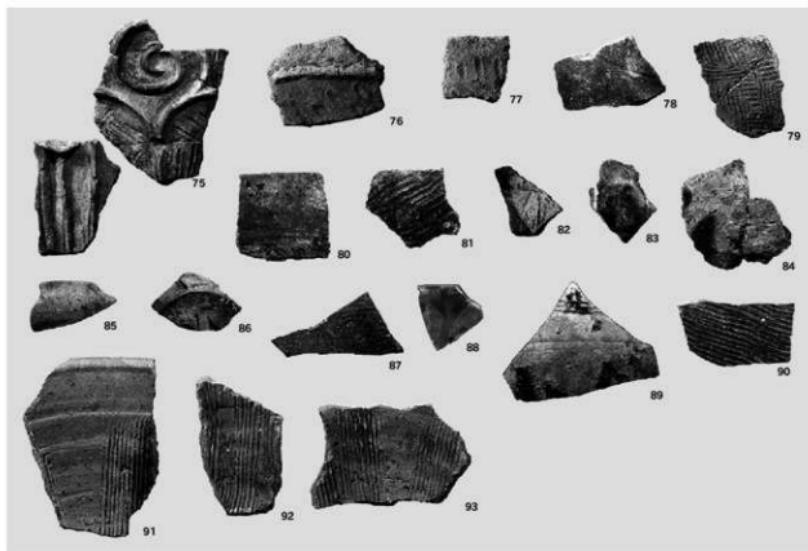


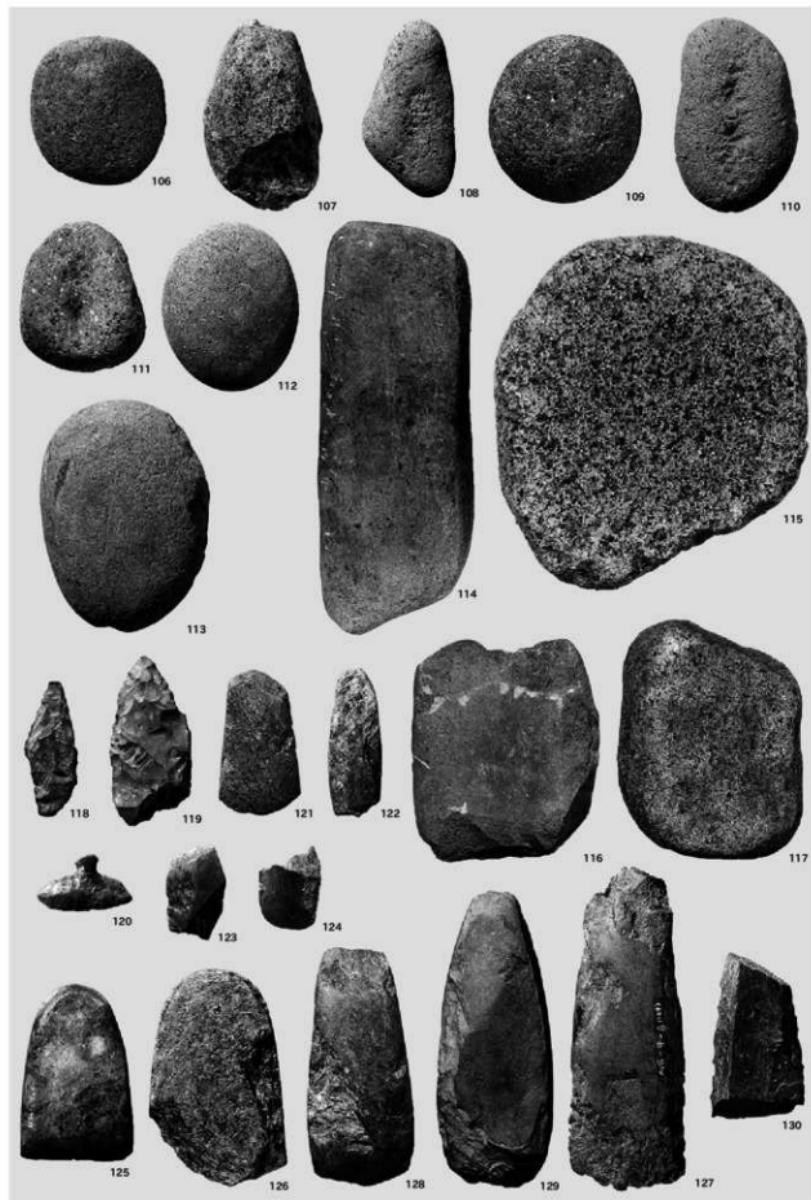
土器 (2)



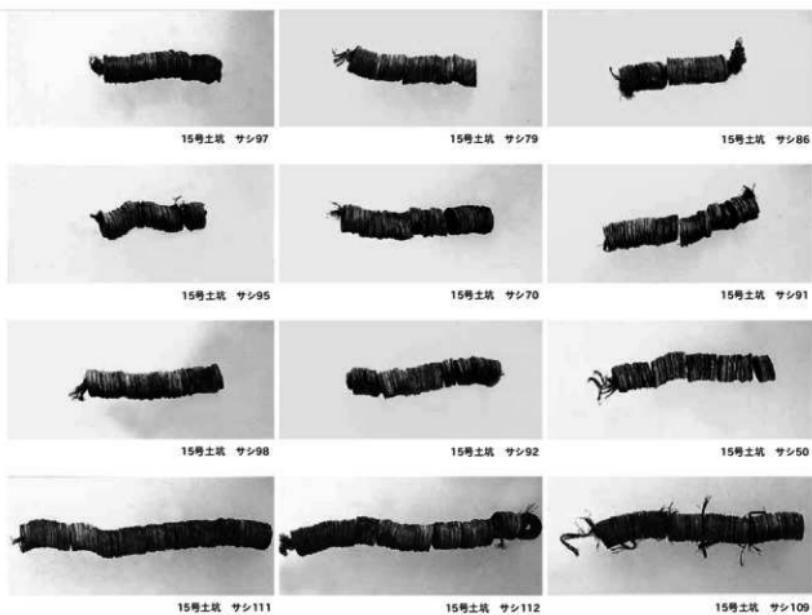
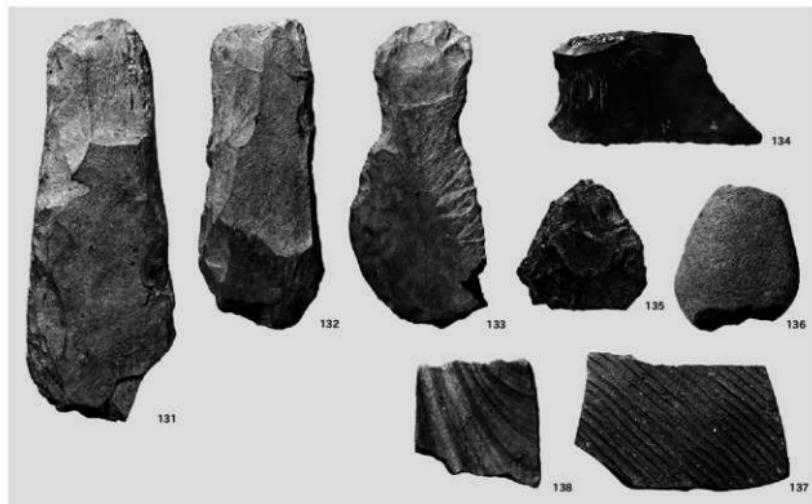


土器(4)・石器(1)

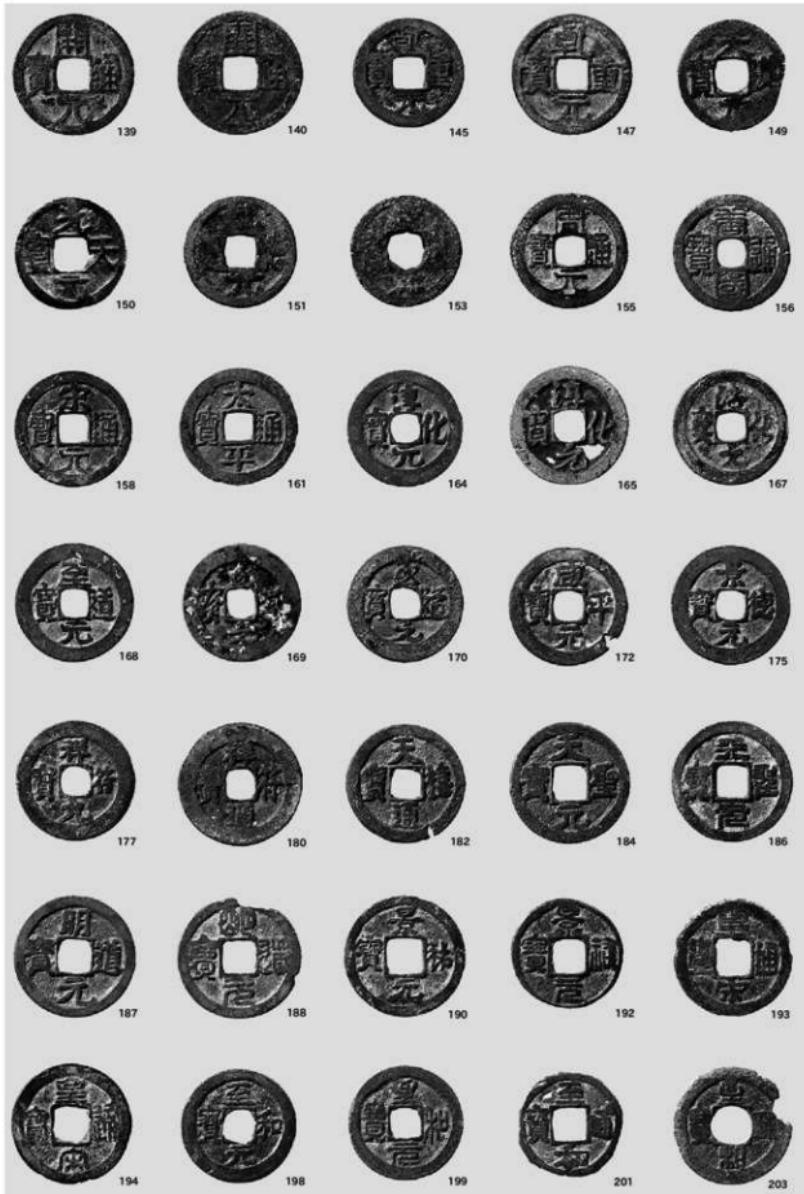




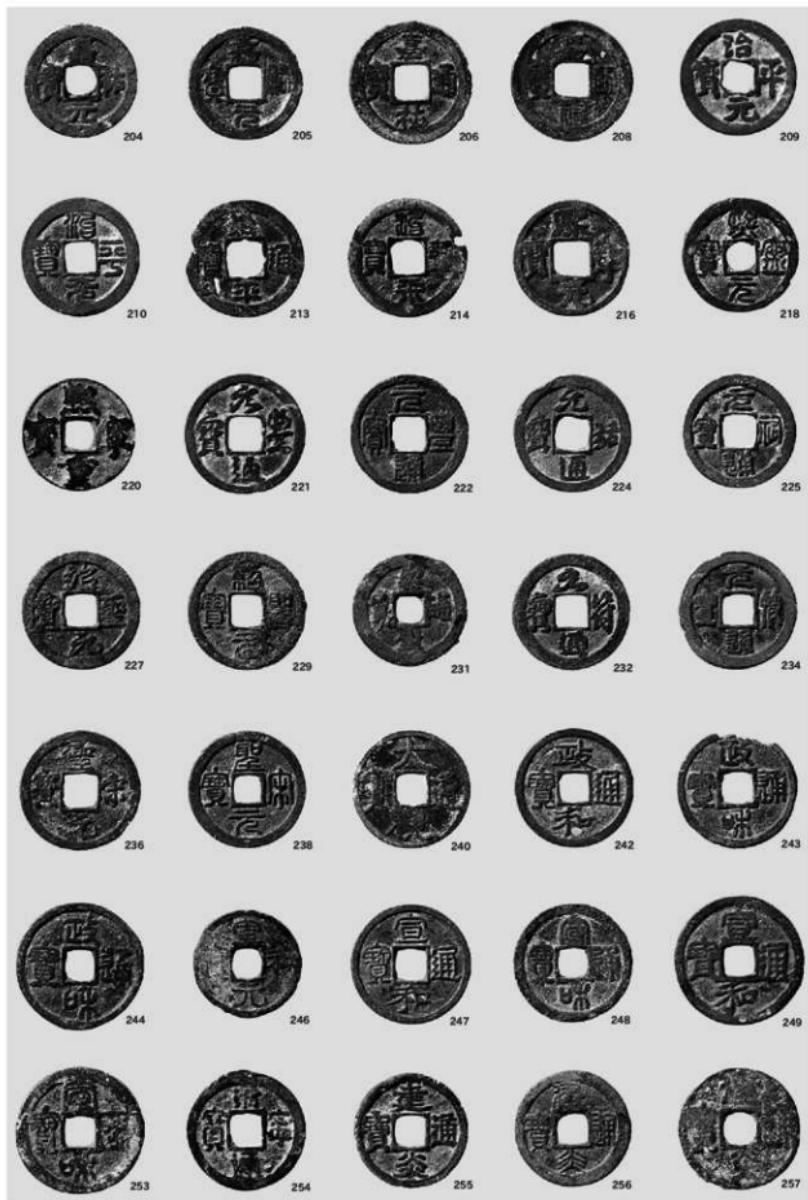
石器（3）・土製品・サシ状態の錢貨（1）



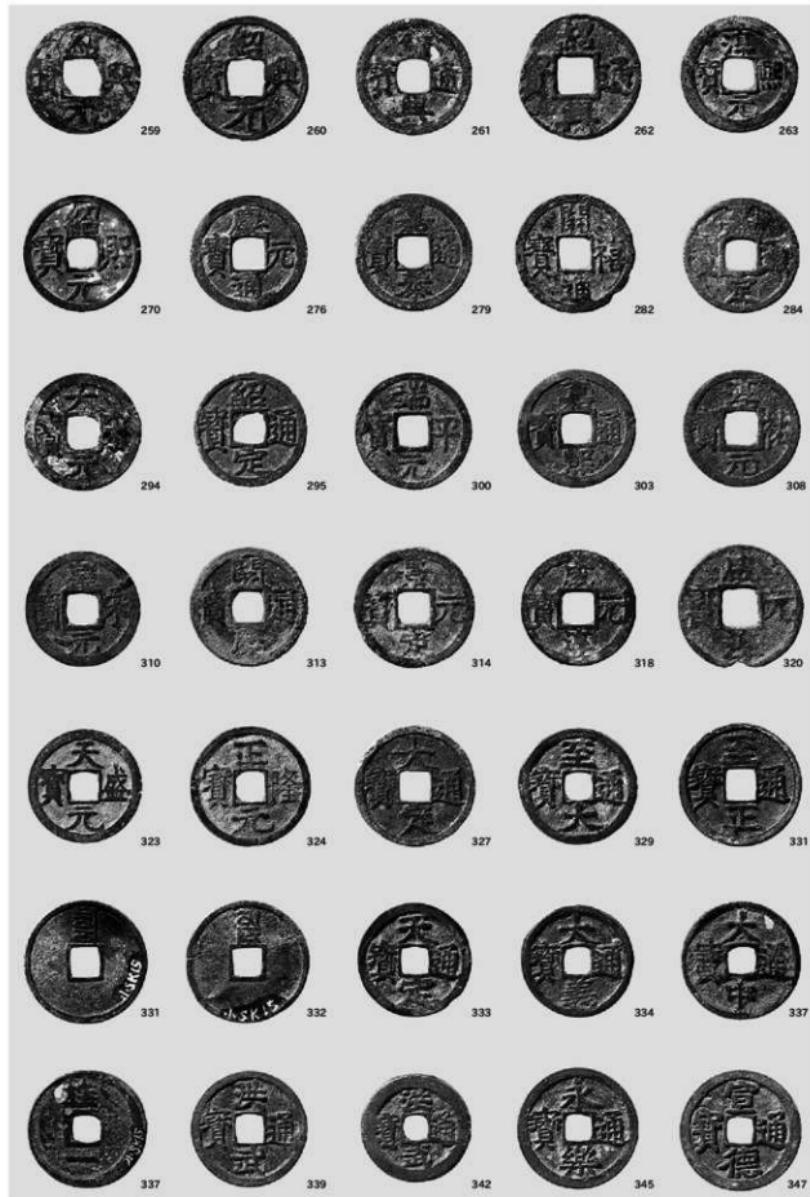
錢貨 (1)



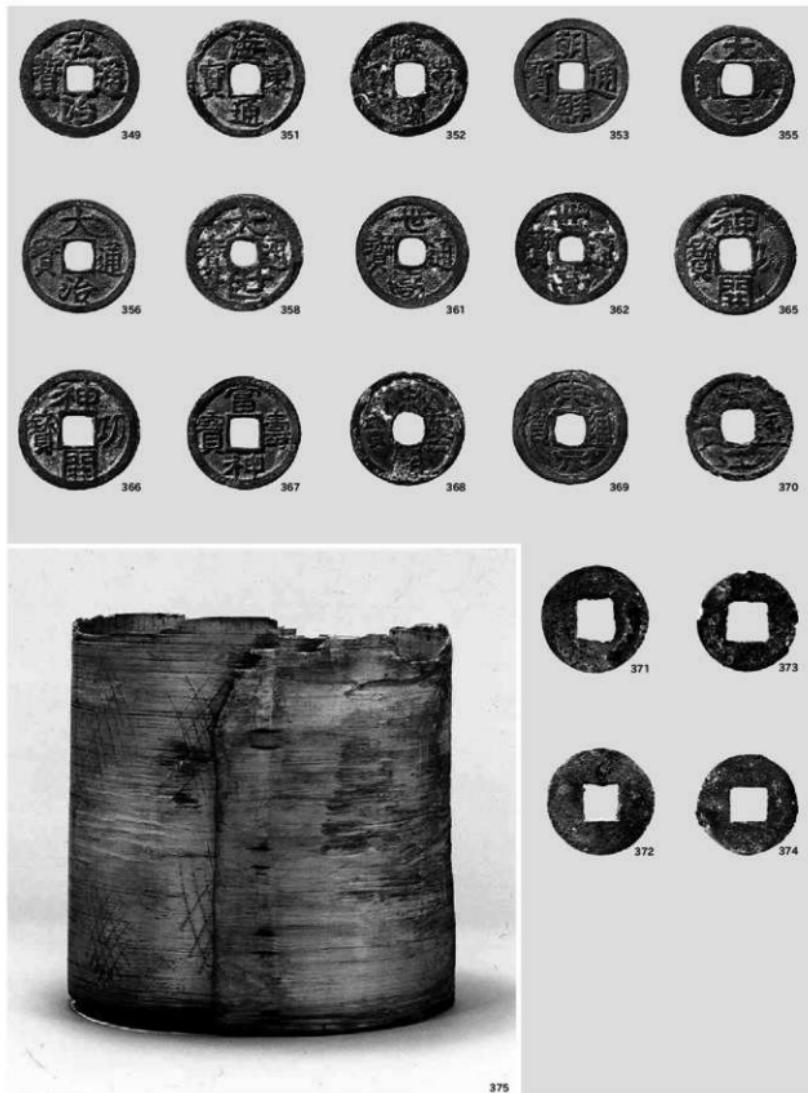
钱货 (2)



錢貨 (3)



钱货(4) · 木制品



報告書抄録

ふりがな	こじゅういせき						
書名	小重遺跡						
副書名	一般国道18号改築工事関係発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第108集						
編著者名	小池義人						
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市大字金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981						
発行年月日	2002年1月11日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
小重遺跡	新潟県中頃城郡 中郷村大字市屋 字小重ほか	15-546	37	36度 57分 18秒	138度 13分 26秒	19890904 ~19890913 19900508 ~19901116	8,800m ² 一般国道18号改築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
小重遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居9基 隨し穴土坑24基	縄文土器・石器			
	集落	不明	掘立柱建物1基 集石土坑				
古銭 出土地	中世	銭貨埋納土坑1基	銭貨29,000点				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第108集
一般国道18号改築工事関係発掘調査報告書
小重遺跡

平成14年1月10日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
平成14年1月11日発行 〒956-8570 新潟市新光町4番地1

電話 025 (285) 5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市大字金津93番地1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 長谷川印刷
〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号
025 (233) 0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第108集

一般国道18号改築工事関係発掘調査報告書 小重遺跡 正誤表

頁	行・表	欄	誤	正
14			第7図 横引遺跡の出土物	第7図 横引遺跡の出土遺物
折込み	第2表	No.71	弘治通宝：初鋲年1488	初鋲年1503
折込み	第5-1・5-2表	No. 7	周元通宝	周通元宝
37	5行		同村郷清水遺跡42基	同村郷清水遺跡44基
37	7行		計303基である。	計305基である。

上記表のとおり訂正くださるよう、お願いいいたします。
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団